指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(20)

橋牟礼川遺跡
範囲確認調査報告書

橋牟礼川遺跡Ⅷ

(片野田遺跡地点，南迫田遺跡)

1995年3月

鹿児島県指宿市教育委員会

序　　文

本書は，国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地の西側近接地，および指宿市十二町に所在する南迫田遺跡の確認調査の成果をまとめたものです。

調査成果の主なものを挙げますと，まず，南迫田遺跡から平安時代の畠の跡が発見されました。

また，橋牟礼川遺物包含地の西側近接地からは，近世～弥生時代に至る様々な遺構や遺物が発見され，橋牟礼川遺跡の広がりが確認されました。中でも，古墳時代の住居跡の発見は，当時の集落の広がりを知る上で，大変貴重な資料を得たと思われます。

今回の調査により，南迫田遺跡，橋牟礼川遺跡の価値がますます高められたものと確信すると同時に，本書が皆様に活用され，将来に守り伝えられるべき遺跡の適切な保存に役立てられることを願ってやみません。

この確認調査に御指導頂きました諸機関の先生方をはじめ，協力を頂いた関係各位及び地元の方々に対して厚くお礼申し上げます。

平成7年3月31日

指宿市教育委員会教育長　中　村　利　廣

例　　言

1．本書は，平成6年7月15日～平成7年3月31日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する橋牟礼川遺跡，及び南迫田遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査，及び整理・報告書作成に要した経費6,000千円のうち，½は国，¼は県からの補助を得て行った。

3．発掘調査は指宿市教育委員会が実施，橋牟礼川遺跡片野田地点を渡部徹也が，南迫田遺跡を中摩浩太郎，鎌田洋昭が担当した。

4．遺構，遺物の原図作成，製図については，目次に作成者名を記す。尚，原図作成者を㊞，トレース実施者を㊝とする。

5．写真図版の作成については，渡部徹也が主に行った。

6．本書の執筆・編集は下山覚，中摩浩太郎，渡部徹也，鎌田洋昭が行った。

7．付篇において各先生方より玉稿を賜った。記して感謝申し上げたい。

　付篇1．杉山真二「指宿市，橋牟礼川遺跡片野田地点における植物珪酸体分析」

　付篇2．竹中正己，峰和浩，小片丘彦，「指宿市橋牟礼川遺跡片野田地点出土の人骨」

8．本書中のレベルはすべて絶対高である。また図中に用いられている座標は公共国土座標系第9系に準ずる

9．本書中の層位，遺物観察表の色調名は「標準土色帖」1990年版に基づく。

10．遺物出土状況図のNo.は遺物実測図のNo.，写真No.とは整合性は無く，出土遺物観察表の取り上げNo.と合致する。

11．遺物観察表，実測図，遺構図の表記凡例は「橋牟礼川遺跡Ⅲ」(1992，指宿市教育委員会）に準ずる。

12．遺構の土壌硬度測定には，山中式土壌硬度計を用いた。

本　文　目　次

表　目　次

挿　図　目　次

片野田遺跡

南迫田遺跡

写真図版目次

橋牟礼川遺跡範囲確認調査

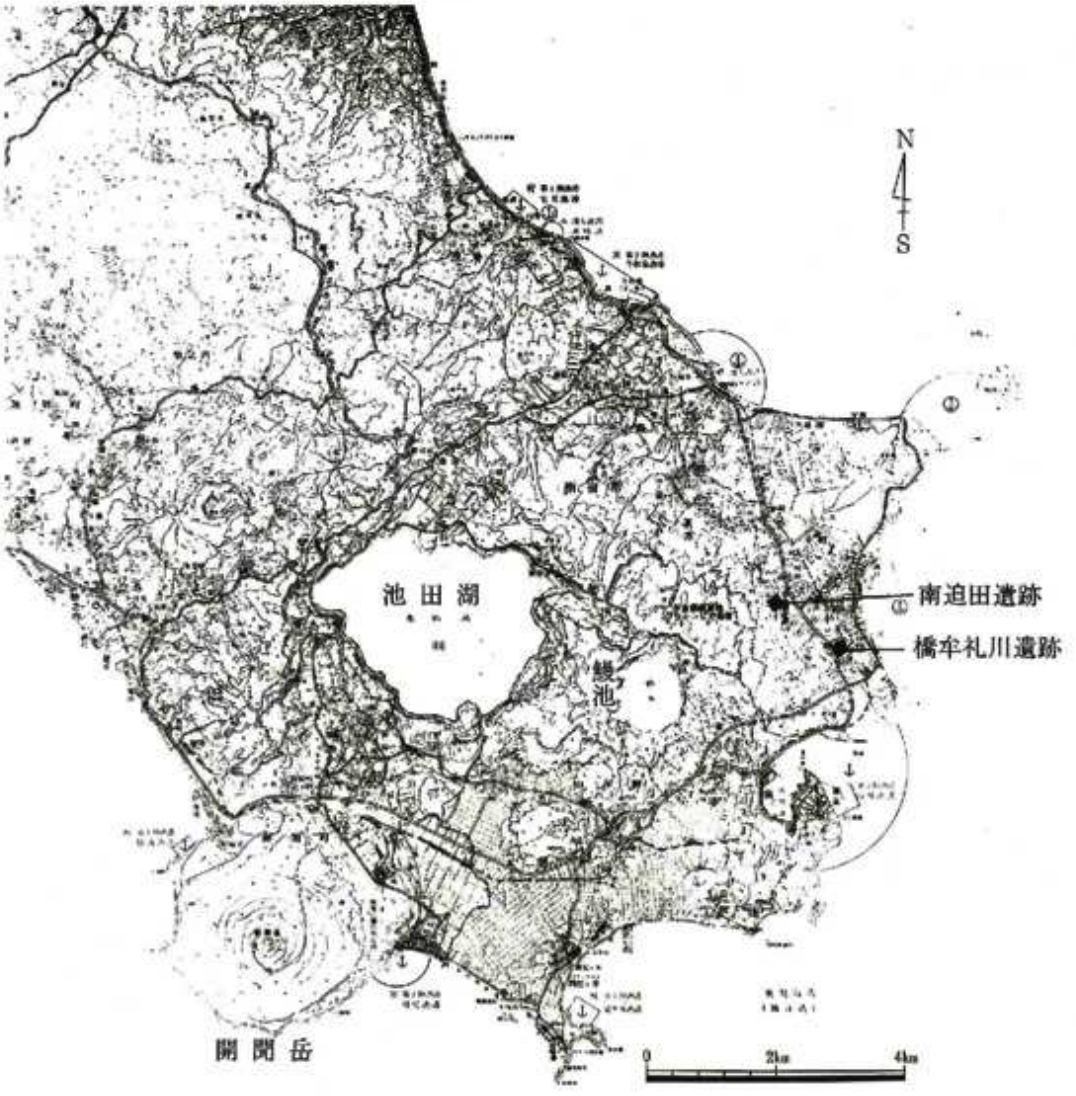
片野田遺跡地点篇

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境

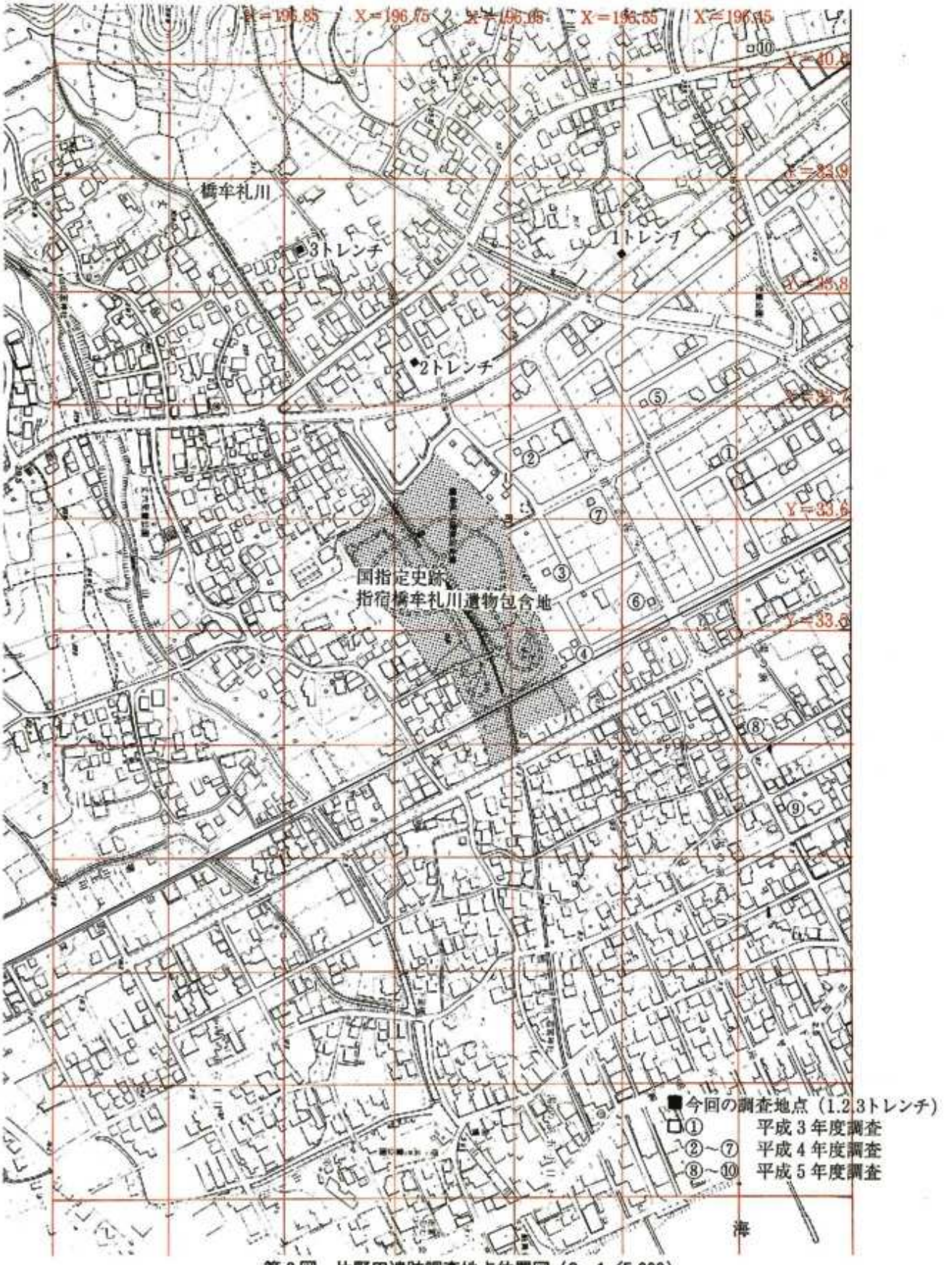
国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地を含む橋牟礼川遺跡は，指宿市十二町下里に所在する。遺跡は，山裾から海岸に向けて緩やかに傾斜する海抜７～20ｍ前後の火山性扇状地上に広がる縄文中期～近世にかけての複合遺跡である。また，遺跡の南西約10kmにある開聞岳の噴火によって，度重なる被害を受けた火山災害遺跡としても知られている。

範囲確認調査は，平成３年度より年次的に，国指定地北側，東側，北西側の近接地において実施され，遺跡の広がりが確認されている。

今回調査した西側地区は，従来，片野田遺跡として呼称されているが，本調査の目的を鑑み，橋牟礼川遺跡の片野田地点と仮称しておきたい。　（文責　渡部）



第１図　遺跡所在位置図（S＝1／150,000）



第２図　片野田遺跡調査地点位置図（S＝1／5,000）

第Ⅱ章　調査に至る経緯

第1節　経　緯

橋牟礼川遺跡は，大正13年に国指定史跡の指定を受け，昭和57年に2.36haの公有地化が図られた。昭和61年度から開始された国指定史跡北側隣接地の土地区画整理事業に伴い発掘調査が実施され，貴重な遺構，遺物の発見が相次いだ。そうした中，国指定地周辺の遺跡保存について論議が起こり，これからの遺跡保存に向けて，その広がりや内容について詳細なデータを得るため，平成３年度から範囲確認調査が実施された。今回の調査は，遺跡が西側の山裾に向かいどこまで広がっているのかを把握するために３ヵ所の確認トレンチを設け実施した。

第2節　調査の組織

発掘調査及び整理作業は以下の組織で行なわれた。

発掘調査主体	指宿市教育委員会	
発掘調査責任者	指宿市教育委員会教育長	中村利廣
発掘調査担当課	指宿市教育委員会社会教育課長	山澤郁夫
	指宿市教育委員会社会教育課係長	尾辻　隆
	指宿市教育委員会社会教育課派遣社会教育主事	塩入俊実
	指宿市教育委員会社会教育課文化係長	久保憲一郎
	指宿市教育委員会社会教育課文化係主査	大久保正一
	指宿市教育委員会社会教育課主事	宮原智子
発掘調査員	指宿市教育委員会社会教育課文化係主事	下山　覚
	同　上	中摩浩太郎
	同　上	渡部徹也
	同　上　主事補	鎌田洋昭
発掘調査作業員・整理作業員	安留和子，渡瀬ヤナギ，吉元アヤ子，吉元キヨ子，吉元愛子，浜崎イチ子，阿久根ノリ子，吉留紀代子，井上ヒサ子，東　冨子，林山イネ，竹下カツエ向吉ひで子，下之園トシ子，吉元マリ子，今柳田辰雄，有里ユキエ，吉富功大阪恵子，追立節子，山下すみ江，新小田千恵子，中間清子，徳留逸子，豊崎キクエ，水流ツヤ子，中谷良子，清　秀子，新小田香代子，前田恵子，徳留逸子，内薗拓也	

第Ⅲ章　遺跡の層位

今回調査した片野田地点の層序は，橋牟礼川遺跡の標準層位と基本的に同一であるため，地層の表記は，橋牟礼川遺跡のそれに準じたい。なお，各調査地点における細かな特徴については各トレンチの層位で触るものとし，ここでは，橋牟礼川遺跡の標準層位を述べる。

橋牟礼川遺跡に見られる地層は，池田湖噴出物や開聞岳噴出物とそれらの間に挟まる扇状地堆積物等から形成されている。中でも開聞岳噴出物は，黄コラ（縄文後期降下），暗紫コラ（弥生中期降下），青コラ（７世紀最終四半期），紫コラ（西暦874年３月25日）の４層が確認され，調査において鍵層としての役割を担っている。

第1層　黒褐色土層（表土）　旧耕作地である。現代の層である。

第2層　暗灰色土層　近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

第3層　黒灰色土層　近世～近代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

第4層　黒色土層　中世（鎌倉～室町時代）の遺物包含層。黒ボクのように腐植土が発達している。厚さは20～50cm前後で，宋代の青磁や白磁，回転糸切り底の土師器などが検出される。

第5層a　紫灰色火山灰層（紫コラ）　平安時代開聞岳噴出物堆積層で，フォール・ユニットを形成する。第5層cと一連の噴火による噴出物とする考えがある。

第5層b　紫灰色火山灰二次堆積物　第5層c（貞観16年開聞岳噴出物）の二次堆積層で，水流作用で生成されたものと考えられ砂が多く混在し，ラミナが発達する。

第5層c　紫灰色火山灰層（紫コラ）　貞観16年3月4日（西暦874年）の開聞岳噴火に伴う噴出物堆積層に比定されている。極めて固く固結し，フォール・ユニットが認められる。

第6層a～c　暗オリーブ褐色土層　奈良～平安時代の遺物包含層で，その上面は貞観16年の開聞岳噴出物で被覆されていることから，貞観16年の火山噴出物降下直前の旧地表形状をそのままとどめていると考えられる。第6層は腐植化が進行しているa，aに比べ明るいオリーブ褐色を呈するb，cは第7層の二次堆積層と3層に分層が可能である。

第7層　青灰色固結火山灰層（青コラ）　7世紀最終四半世紀頃に比定される開聞岳噴出物堆積層で，下部は火山活動初期のスコリアが2～5cm程度堆積する。

第8層　橙色土層　砂や池田湖起源の噴出物，軽石を含む扇状地堆積層。古墳時代末頃の土石流堆積物と考えられる。

第9層　暗褐色土層　古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田湖降下軽石を含みやや粘質である。厚さは50cm～1m程度である。第9層の中位から遺構が掘り込まれる場合などは，埋土色調，粒度から判別することが難しい。第9層の形成は，基本的に扇状地堆積物であるが，集落形成等の土地利用による攪乱や河川の氾濫による要因が複合していると考えられる。

第10層　赤橙褐色粘質土層　弥生中～後期の遺物包含層で，扇状地堆積物と考えられる。

第11層　暗紫色火山灰層（暗紫コラ）　弥生時代中～後期に降下した開聞岳噴出物堆積層。

第12層　明褐色土層　弥生時代前～中期にわけての遺物包含層で粘性が強い。

第13層　暗褐色小石混シルト質土層　主に刻目突帯文土器を包含する層で，小礫を含む。

第14層　赤褐色小石混シルト質土層　主に縄文時代晩期の遺物を含む。黒川武士器が主体。

第15層　赤褐色砂粒混シルト質土層　主に縄文時代晩期の遺物を含むが，後期の遺物も混在する。

第16層　黒褐色橙色パミス混シルト質土層　主に縄文時代後～晩期の遺物を含む。

第17層　暗青灰色火山灰層（黄コラ）　縄文時代後期の開聞岳噴出物堆積層。

第18層　灰褐色砂質土層　縄文時代後期遺物包含層で下部は池田湖火山灰に変化する。

第19層　池田湖火山灰層　灰色～黄灰色を呈する層で，約5,500年前の池田カルデラ形成期の火山活動に伴い堆積したものと考えられている。

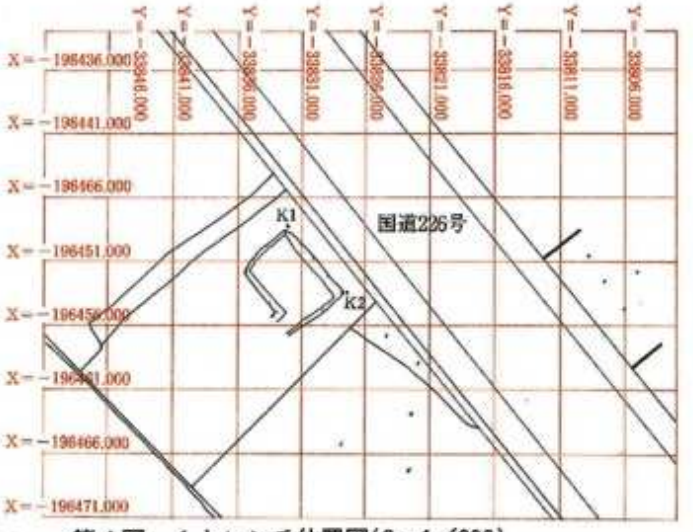
指宿市教育委員会『第Ⅳ章　遺跡の層序』「橋牟礼川遺跡Ⅲ」を抜粋，一部改変。

第3図　橋牟礼川遺跡標準層位模式図

第Ⅳ章　確 認 調 査

第1節　1トレンチの調査

丹波川，王子田川の2本の小河川に挟まれた三角州地帯に5×7mのトレンチを設けた。トレンチ南側の国道と幹線道路が接するT字路では，平成3年度の都市計画事業に伴う発掘調査で古墳時代の集落が検出されていたが，1トレンチの調査でその広がりを確認することができた。また，近世～近代頃と考えられる道路跡が1本検出された。

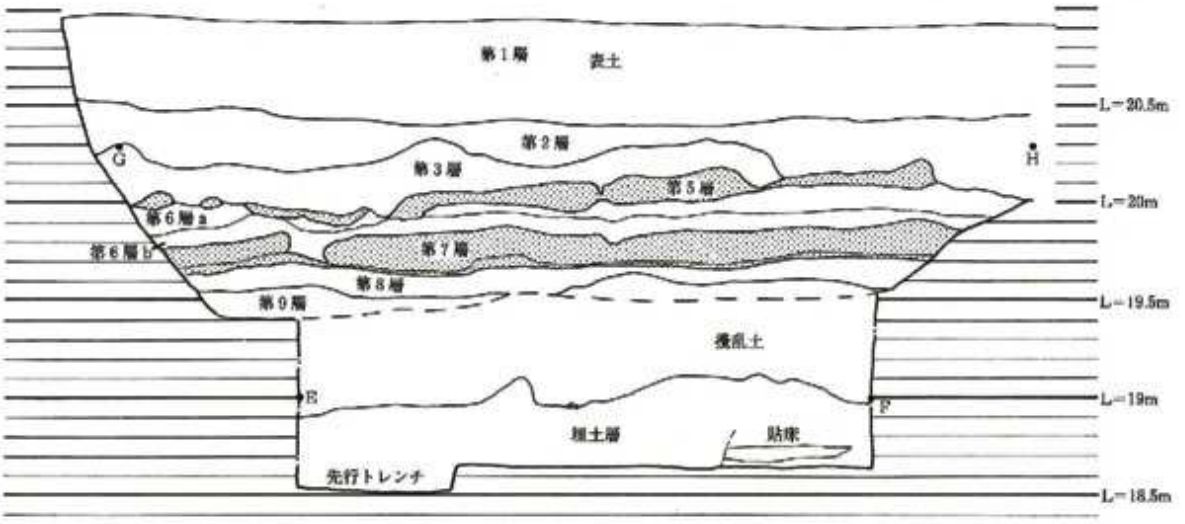


第4図　1トレンチ位置図(S=1／600)

(1) 層　　位

第1層，第2層，第4層，第5層，第6層，第7層，第8層，第9層の8層を確認した。

第1層は，表土で，現耕作土である。第2層は砂層で，道路跡を覆っている。付近小河川の氾濫によって堆積したものと思われる。第4層は褐色土層である。遺物の出土は見られなかった。第5層は，紫コラである。一部，攪乱を受け，その上面は削平されている。最下層に火山礫も確認されたが，ルーズな堆積のため，上層の細粒火山灰と分層しづらい。第6層は，a，bの2層が確認された。第7層の青コラは，10～15cm前後の厚さで安定し堆積している。最下部にはスコリア層が見られる。第8層は，5～10cm前後の堆積である。成川式土器の細片等の遺物を含む。第9層には，古墳時代の竪穴住居が造られており，そのほとんどが埋土層となっている。2段掘りしたトレンチの南壁を一面の図に投影したため，第9層途中に攪乱層が見られるが，本来この攪乱は，近代～現代のものである。また，1号住居跡の貼床が見られるが，2号住居を造る際に切られている。近接した高さに2号住居の床もあるものと思われたが，明確な分層が困難で，把握できなかった。



第5図　1トレンチ南壁層位断面図(S=1／40)

(2) 遺　構

A．道路跡（近世～近代頃）

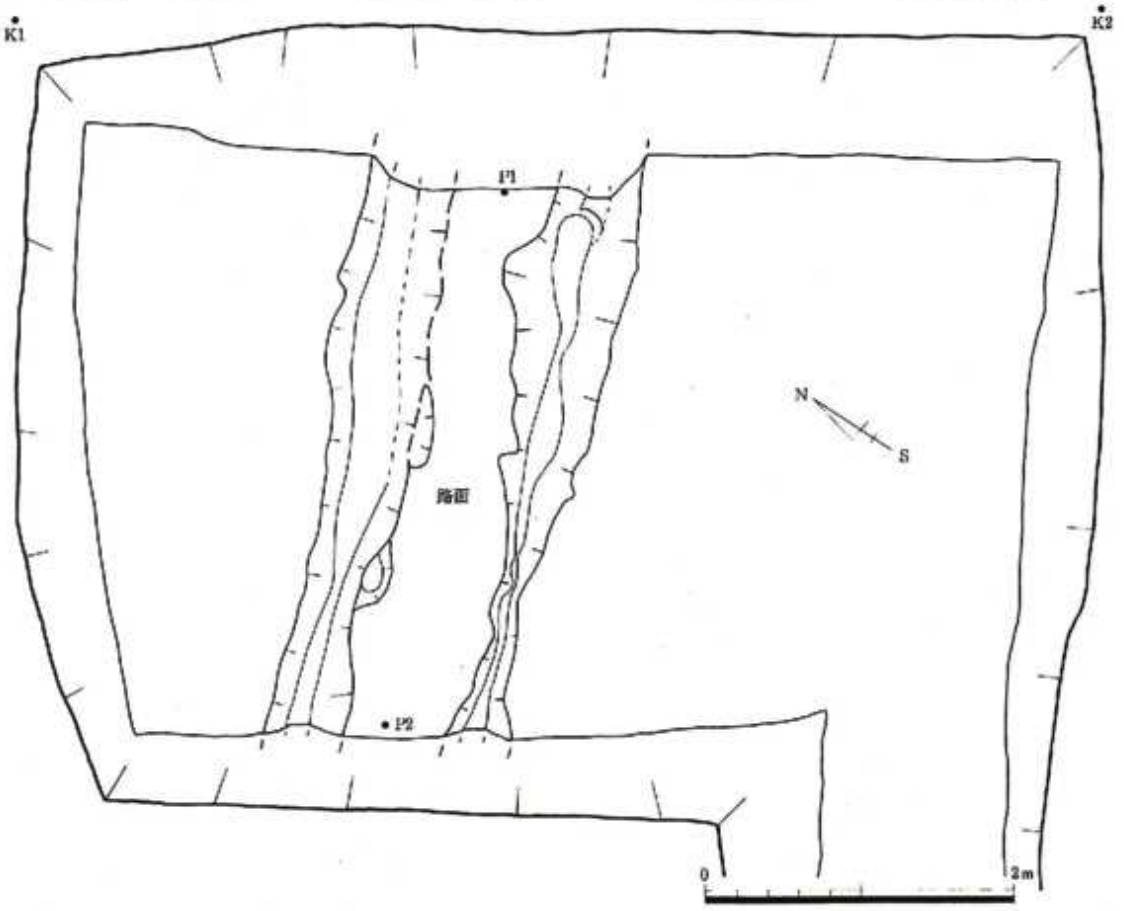
トレンチ中央部を東西に走る道路跡を検出した。

道路跡は，第９層に掘り込まれ造られており，直上には，小河川の氾濫による砂礫が厚く堆積している。この砂礫層の下層に見られた攪乱土中から近世陶磁器の破片が出土していることから，小河川の氾濫はそれ以降の時期と考えられ，砂礫層に直接被覆された道路跡も近接した時期のものと思われる。道路跡は両側に側溝を有し，路面幅40～90cmで路面は硬化していた。側溝まで含めた幅は，1.4～1.8mである。側溝の深さは，路面から約10～15cm前後である。

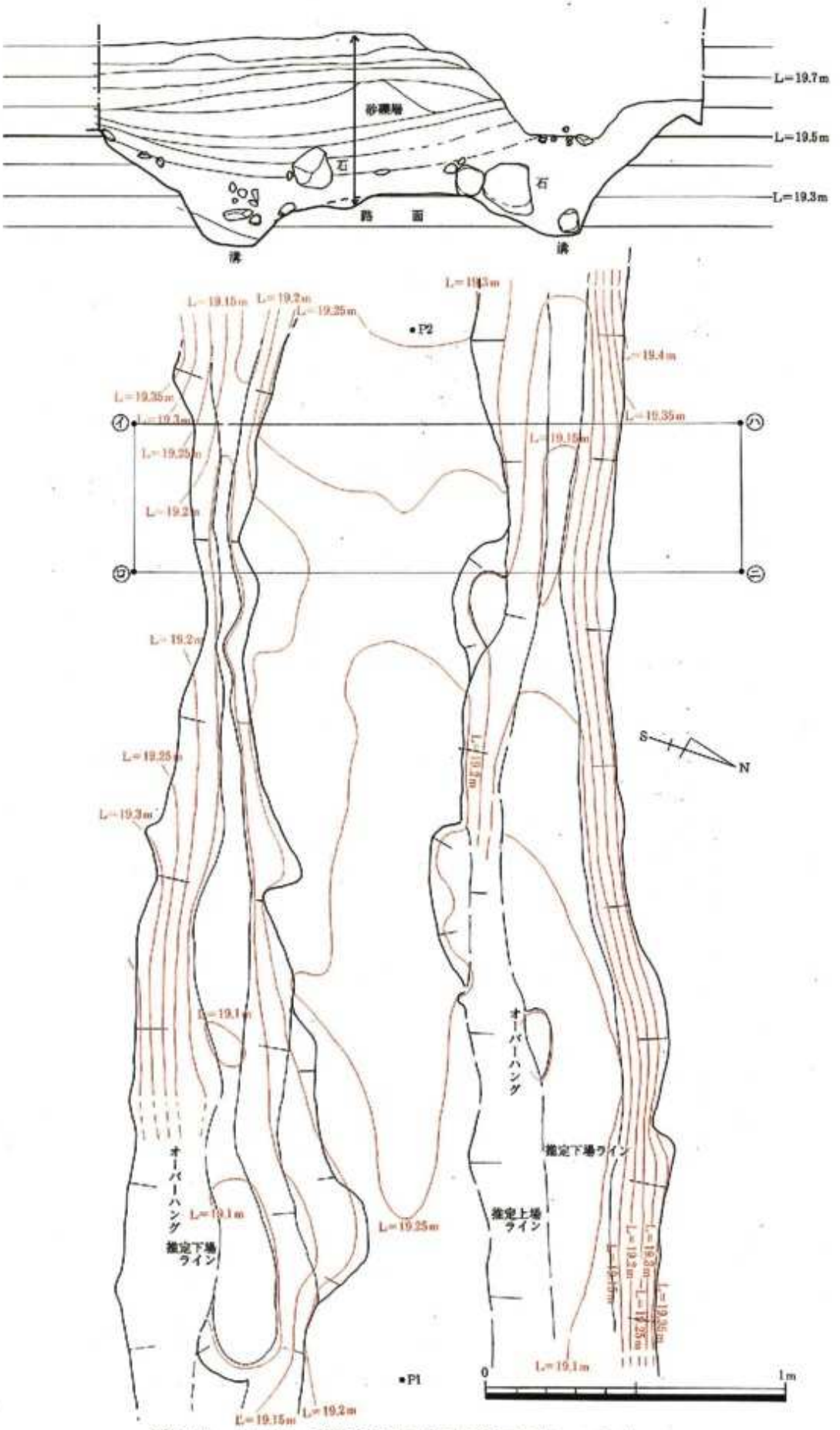
路面の硬化状況を把握するために，土壌硬度測定を実施した。その結果，路面部分の平均支持強度は14.74kg／cm²の硬度を有することが判った。

表－１　近世道路跡土壌硬度測定データ

④	4.97	2.91	11.03	8.94	8.77	48.25	11.19	9.02	6.47	5.40	6.14	4.77	6.27	6.84	14.47	20.23	20.69	37.96	42.49	⑬
	6.15	5.07	13.78	11.03	13.39	48.22	15.37	11.48	6.42	7.04	8.77	9.22	6.44	4.07	16.51	19.40	22.20	33.53	48.01	
	14.86	547	6.60	11.82	14.68	40.42	14.44	17.75	6.10	9.31	17.38	12.23	15.94	7.92	11.55	17.01	18.05	27.71	51.48	
	13.43	13.76	8.34	6.61	9.41	26.22	14.9	17.75	6.45	8.82	7.38	10.29	9.71	9.87	16.04	18.32	20.26	32.89	45.15	
㉒	8.51	7.21	4.84	9.15	10.48	22.57	35.01	15.24	4.37	7.34	6.03	12.13	9.11	12.85	8.51	70.77	12.20	17.82	33.47	㉜
	非道路部分		側溝部分		路面部分							側溝部分				非道路部分				



第６図　１トレンチ近世道路跡検出状況図(S＝1／50)



第７図　１トレンチ道路跡平面図及び断面図(S=1／20)

B．竪穴式住居跡（古墳時代）

a．1号住居跡

トレンチのほぼ中央部に1号住居跡を検出した。1号住居跡は，2号住居跡，1号土壙にそれぞれ切られ，西隅のコーナーを含む一部しか残存していないが，トレンチ南壁の断面に貼床が続いていることから，一辺3mを超える大きさで，方形プランをなすものと考えられる。竪穴の深さは25cm以上で床には貼床が施されている。主柱穴の一つと思われる柱穴を1穴確認したが，その他の柱穴，中央炉は検出できなかった。恐らく周辺の遺構に切られたものと思われる。

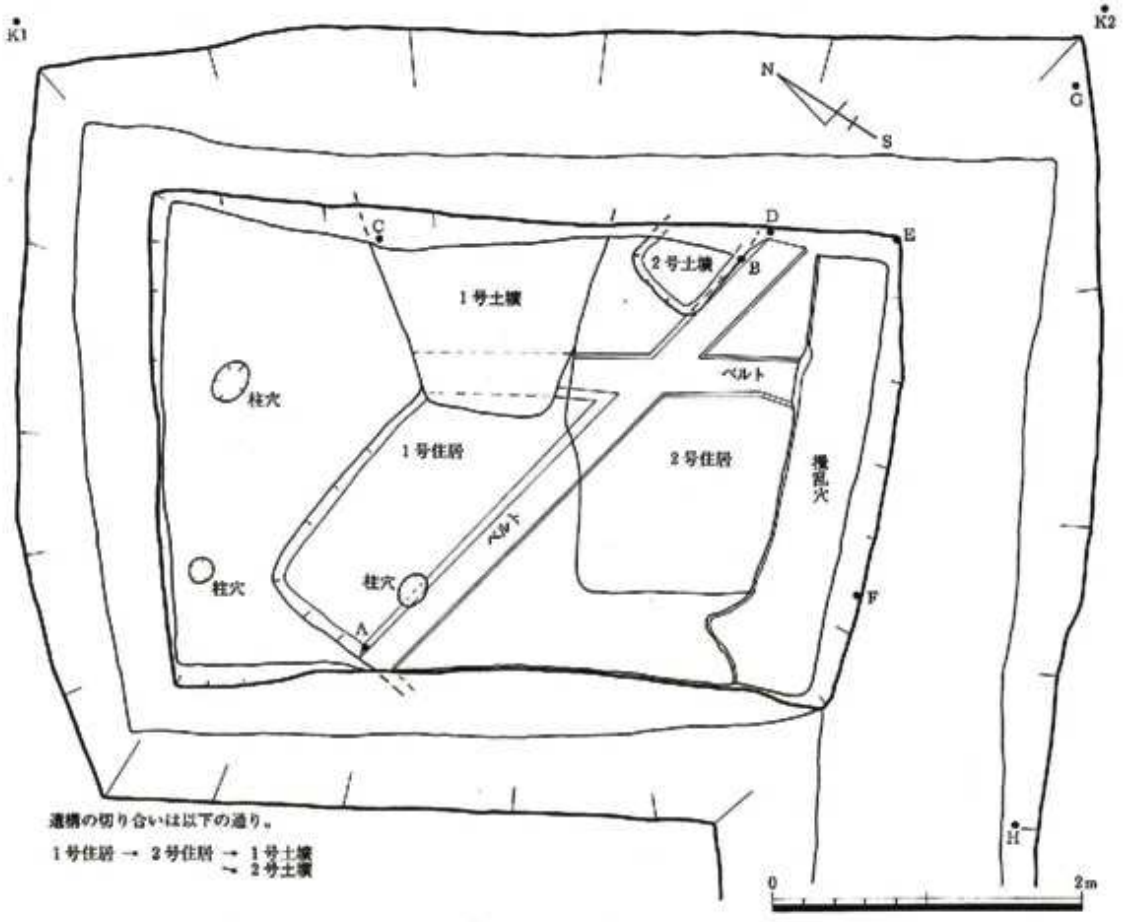
柱穴は，長径22cm，短径18cmの楕円形で，深さ10cmを計る。1号住居跡の北側でも，2穴の柱穴と考えられる遺構を確認した。柱穴2は，長径19cm，短径17cm，深さ18cmを，柱穴3は，長径30cm，短径20cm，深さ9cmを計る。いずれも1号住居跡に伴うものかどうかは不明である。

1号住居跡の貼床の硬さを把握するために土壌硬度測定を行った。その結果，床部分の平均支持強度は，10.09kg／cm²の値を得た。

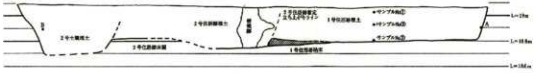
貼床には肉眼観察から，小礫や粘質土を混ぜた土壌を用いていると推測される。

表－2　1トレンチ古墳時代住居跡
床面土壌硬度測定データ

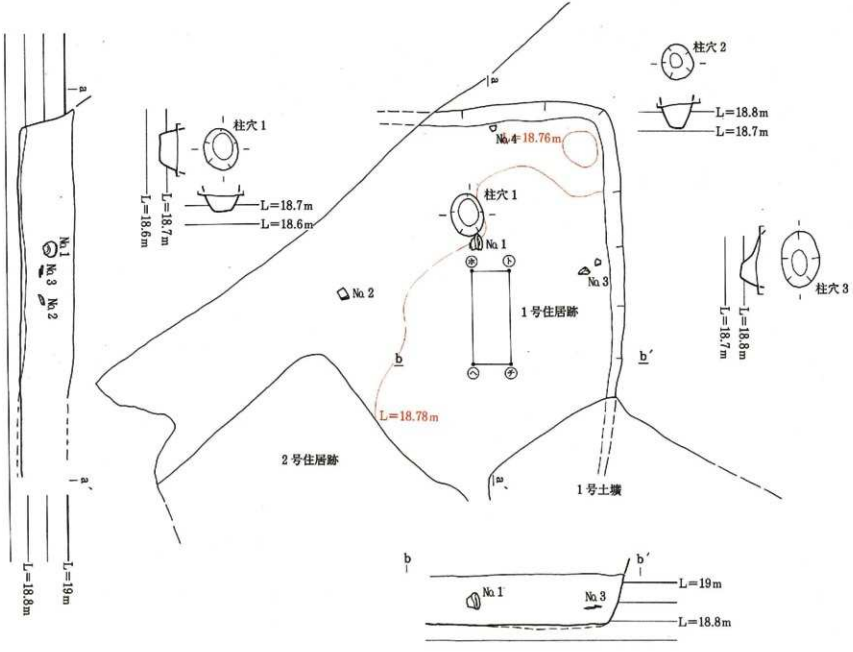
㋑	6.34	15.49	13.29	7.53	6	㋒
㋓	7.55	8.13	11.86	10.71	13.97	㋔



第8図　1トレンチ古墳時代住居跡検出状況図（S＝1／50）



第９図　１トレンチ古墳時代住居跡埋土断面図(S=1／30)



第10図　１トレンチ古墳時代１号住居跡平面図(S=1／20)

b．2号住居跡

1号住居跡の床面を検出した段階で2号住居跡の掘り方のラインをとらえた。1号住居跡の埋土に掘り込まれているため，上場での検出が極めて困難であった。1号住居跡と同じく北西隅のコーナーを含む一部分の検出で，柱穴，中央炉等は検出されなかった。これらは，後世の攪乱によって失われた可能性もあるが，柱穴については，3トレンチの調査で見つかった同時期の竪穴式住居跡において，掘り込みを伴わない形のものが検出されていることから，そうした形態のものがあった可能性も否めない。

2号住居跡は，1号土壙，および2号土壙に切られている。2号土壙は，住居の付帯遺構の可能性もあるが，詳細は不明である。

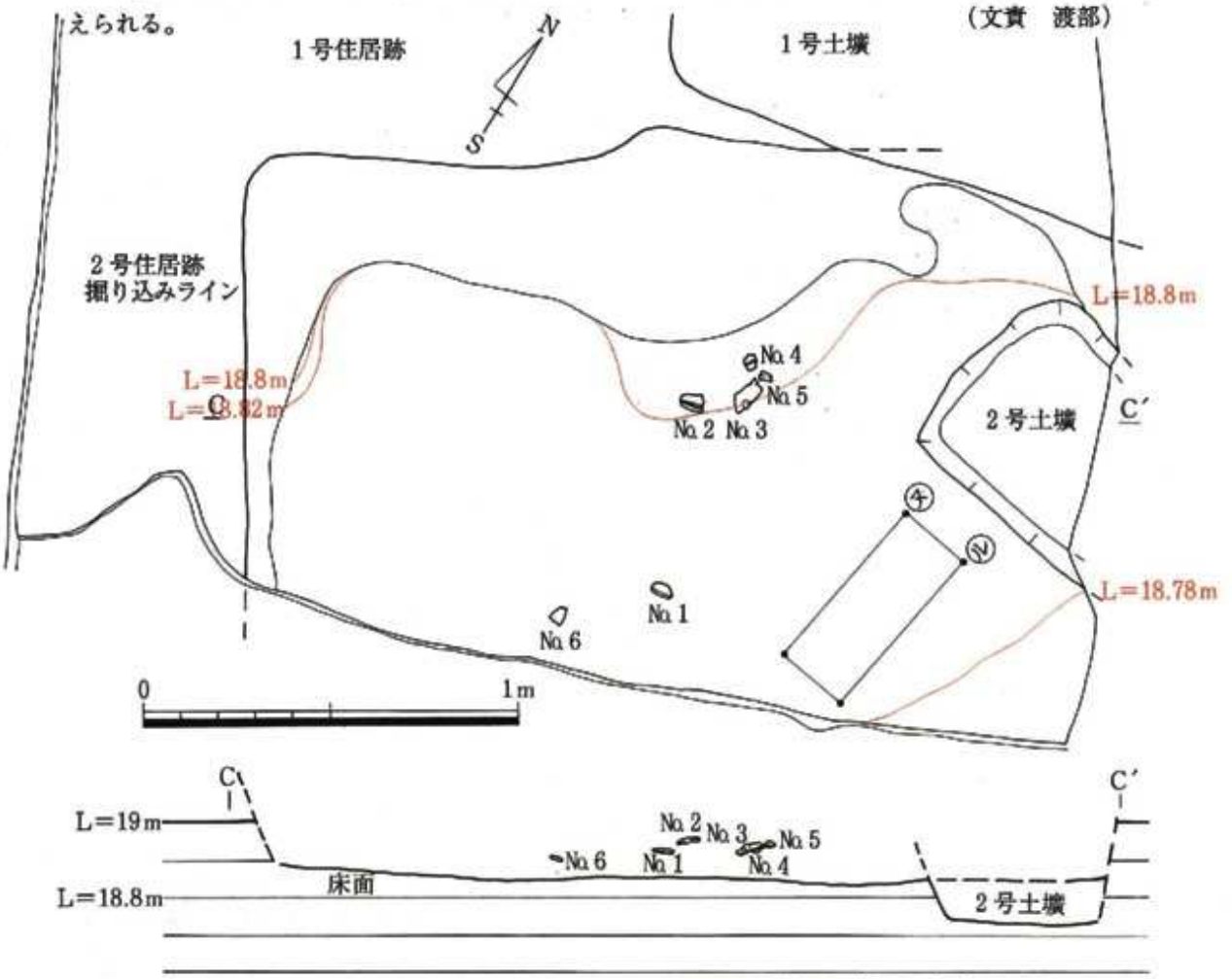
2号住居跡の床は，1号住居跡に比べ，明瞭な貼床が見られないものの固く硬化していたため，土壌硬度測定を行った。その結果，床部分の平均支持強度は，22.45kg／cm²の床の硬度を得た。

表ー3　1トレンチ2号住居跡
床面硬度データ

	a	b	c	d	e	
1	18.12	17.94	27.10	21.67	11.96	㋝
2	72.80	19.86	17.89	24.67	13.49	㋛

本トレンチで検出した住居跡の床は，埋土の色調とほとんど変わらなかったことから，掘り出した土を，再度床の整形仕上げの際に用いているものと考えられる。

（文責　渡部）



第11図　1トレンチ古墳時代2号住居跡平面図及び断面図(S=1／20)

C．土壙（古墳時代）

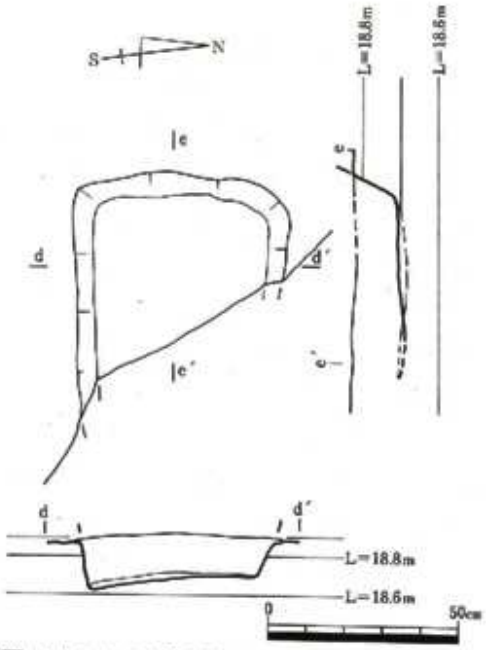
a．1号土壙

1号住居跡，2号住居跡を切って造られている埋土中に掘り込まれ造られていたため，上場での検出が極めて困難であった。土壙の平面形の全体像は不明であるが，検出した範囲では台形を呈し，断面の状況から深さ40cm以上を計るものと推測される。また，埋土中からは，高坏の破片が出土している。

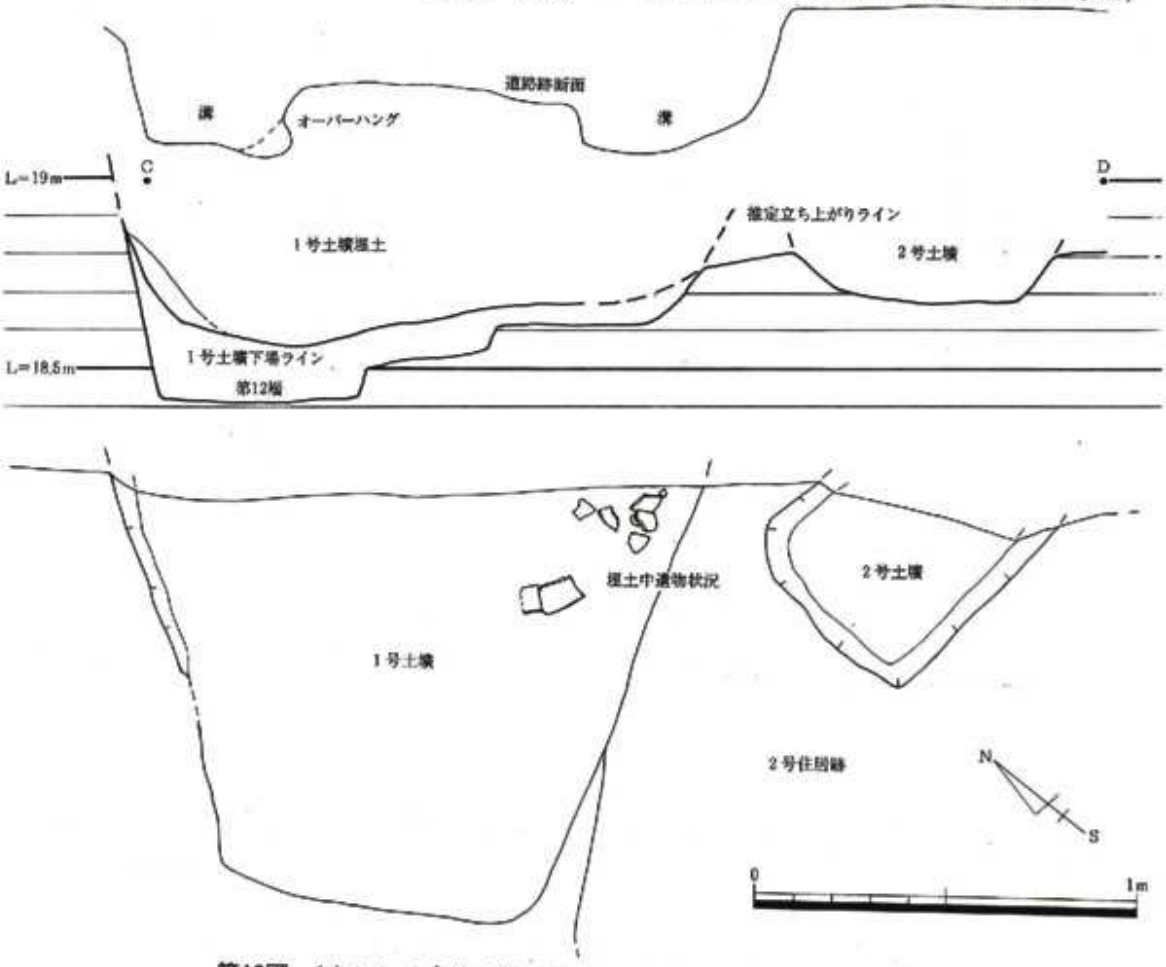
b．2号土壙

2号住居跡に掘り込まれた土壙で，検出した範囲では方形を呈する。南北方向に約55cm，深さ15cm以上を計る。埋土中からは，成川式土器の細片が出土した。

1号土壙とともに詳細は不明である。



（文責　渡部）　第12図　1トレンチ2号土壙平面図及び断面図(S=1／20)



第13図　1トレンチ古墳時代1号土壙平面図及び断面図(S=1／20)

(3) 遺　物

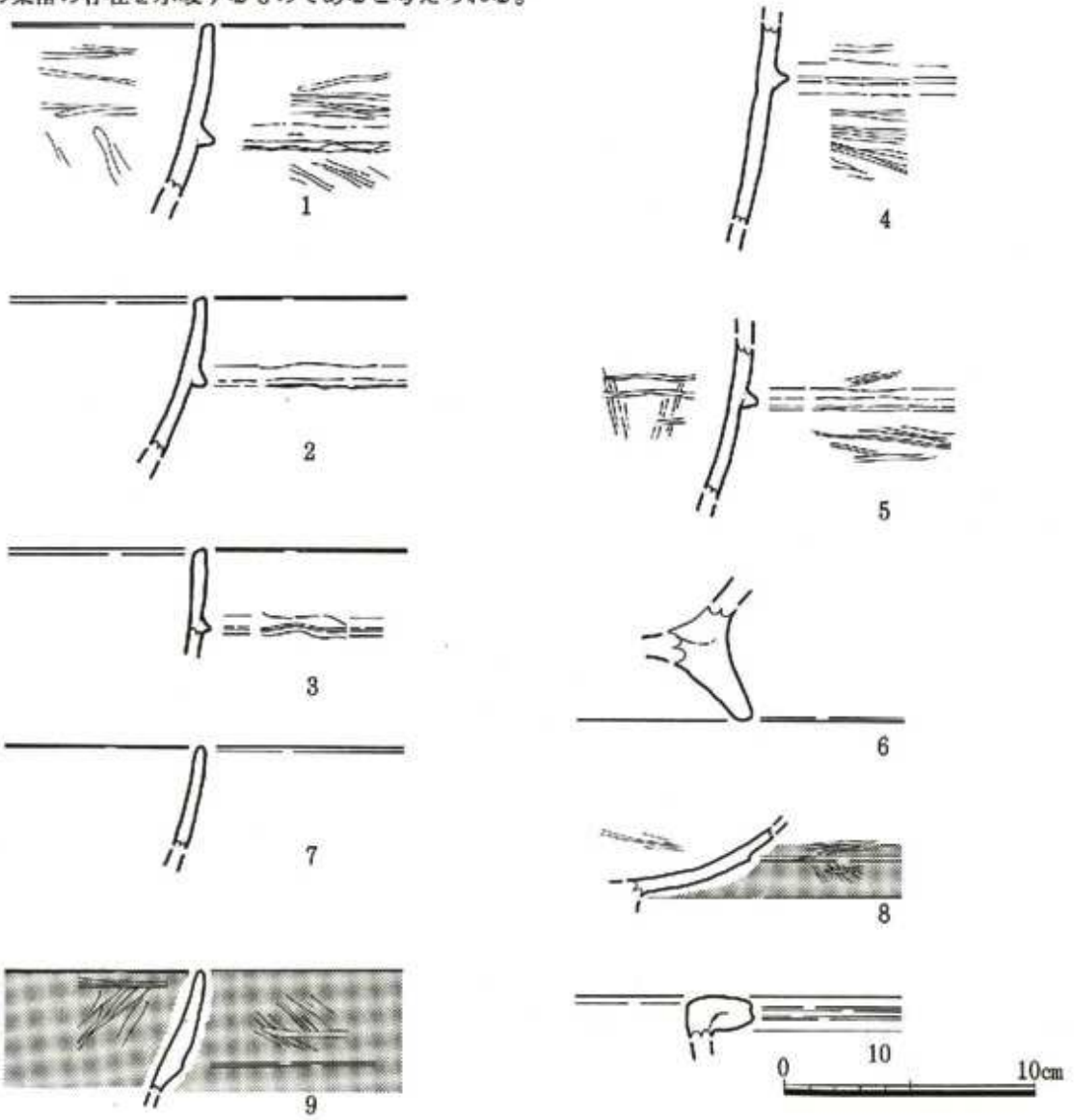
1トレンチからの出土遺物について，包含層(第9層)出土のものには第14図№1～10がある。

1～3は，甕形土器の口縁部である。いずれも，口縁部直下に一条の突帯を貼り付けている。

口唇部上面はヨコナデを施し，平坦に仕上げられる。これらの甕形土器の口縁部の形態は，橋牟礼川遺跡の平成3年度調査で出土したSBU.M.№26-27トレンチ土器集中廃棄所の一群の甕形土器(肩部を形成するもの)と異なり，肩部を形成しないばかりでなく，内外面にミガキが施されるなどの特徴を有する。このような特徴は，いわゆる「成川式土器」の中で最も新しい特徴を持つものと考えられる。

特に，ミガキの採用について，先に触れた土器集中廃棄所では，基本的にハケメを利用する一群が卓越しているのに対して，新出の要素として捉えられる属性の一つであろう。同時に，突帯における刻みについても消失の過程をたどると考えれる。

これらのことから，1トレンチ第9層の1～3については，橋牟礼川遺跡の中心集落よりも後出の集落の存在を示唆するものであると考えられる。



第14図　1トレンチ出土遺物実測図(S=1/3)

4，5は，甕形土器胴部突帯部である。これも1～3と同様にミガキが施され，突帯にはキザミを有しないことから，「成川式土器」の新しい部類に属するものと思われる。

6は，甕形土器底部の脚台部である。

7は，鉢形土器の口縁部であると考えられる。

8は，高坏形土器の坏部の屈曲部である。外面は赤色塗彩が施される。

9は，坩形土器の口縁部で，内外面ともに赤色塗彩が施される。口縁部はやや肥厚し，頸部に至る部分で段を形成する。

10は，弥生時代甕形土器口縁部である。口縁部は厚く肥厚し，明瞭な接合痕が観察される。口唇部はヨコナデによって凹みを有する。

11～27は，1号ないし2号住居埋土から出土した資料である。

11，12は，甕もしくは鉢形土器の口縁部である。細片において，甕形土器と鉢形土器の区分は困難である。

13～17は，甕形土器の胴部突帯部である。このうち，13，16，17は，突帯の始点と終点を意識的にずらしている箇所と思われ，斜方向に粘土紐が貼り付けられている。13～17は，いずれも突帯に刻みを施さないものである。

18は，甕もしくは鉢形土器の底部脚台部である。

19～21は，鉢形土器の口縁部と思われるが，21については，傾きから蓋形土器の可能性もある。

22～25は，高坏形土器脚台部で，22は外面，23～25は内外面ともに赤色塗彩を施す。25は，脚台下半で24などの脚台下半部のカーブに対して反転したカーブを持つものである。

26も高坏形土器の脚台部であるが，赤色塗彩を施さないものである。

27は，縄文時代晩期の深鉢形土器口縁部であり，内面はナデ，外面には工具による条痕が施される。

28～30は1号土壙埋土から出土した資料である。

28は鉢形土器口縁部で，口縁部が大きく開くボウル状の器形を呈するものと思われる。外面はミガキを施すが，やや粗い。

29は，甕もしくは鉢形土器の底部脚台部である。接地面が丸みを有する。

30は，高坏形土器坏部で，胴部に段を有するものである。赤色塗彩の有無については不明である。

31～35は2号住居の床面付近から出土した資料である。概ね5cm～10cmの範囲内の床面上位から検出されたため，共時を追求できる資料ではないことを付記しておく。

31は，四足の脚を有する土器の底部付近の資料で，皿形土器となるものと思われる。脚の部分はユビオサエの痕跡が明瞭に残る。このような皿形土器の事例としては，平成3年度に行われた橋牟礼川遺跡の発掘調査において検出されたものがある。それは，皿形を呈すると考えられる器形のもので，脚台を有し，脚台部分には三角形や長方形の透かしが認められるものである。赤色塗彩も施され，儀器との見方もあったが，31の資料では単純に儀器と判断することは困難である。

類例も少ない資料であり，今後その用途論を含めて注意しておくべき資料であろう。

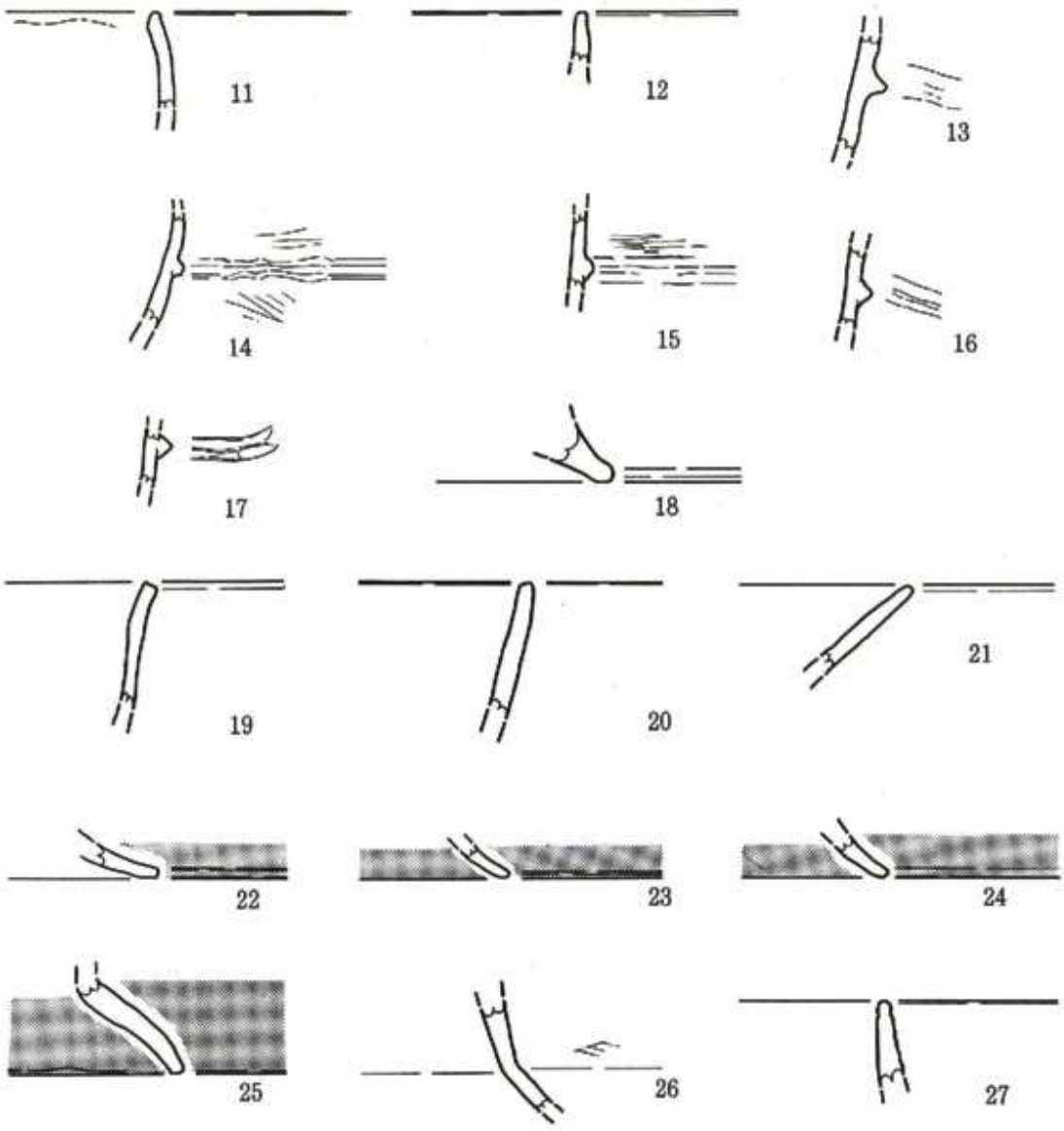
32は，甕形土器の口縁部である。口唇部上面は平坦に仕上げられている。口縁部の器形はやや内湾する。口縁部下には一条の突帯が施され，突帯には棒状具による刻みが施されている。

33は，甕形土器の胴部突帯部で，ツマミあげられた突帯には指頭の圧痕が残る。一部工具による刻みが施されたためにできる粘土のヨリが認められる。

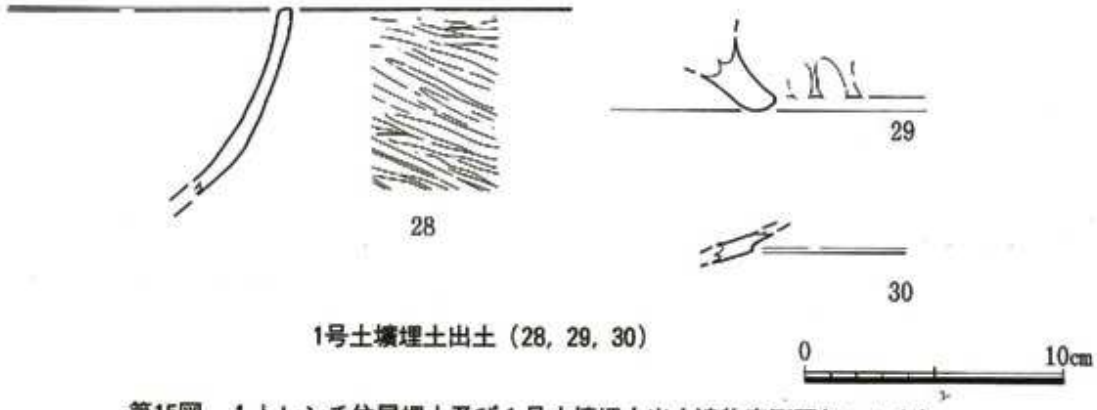
34は，弥生時代甕形土器の脚台部である。底部接地面はややあげ底状を呈している。

35も，弥生時代甕形土器の口縁部であり，口縁部の突帯部は欠損している。

34，35ともに弥生土器で，2号住居の埋まる過程で混入したものであろう。



1，2号住居埋土出土（11～27）



1号土壙埋土出土（28, 29, 30）

第15図　1トレンチ住居埋土及び1号土壙埋土出土遺物実測図(S=1／3)

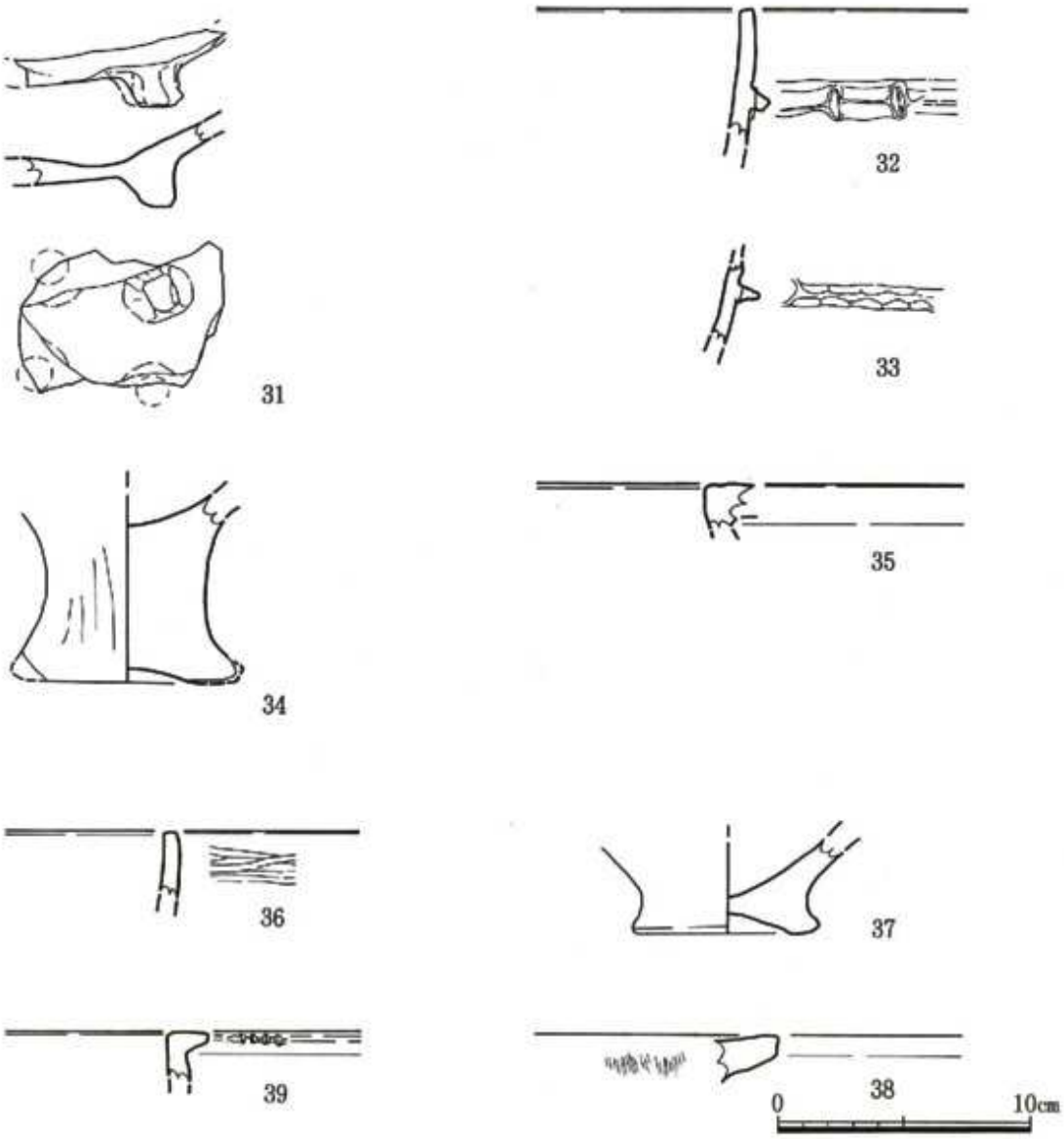
36～38は，近世の攪乱層から出土した資料である。

36は，甕または鉢形土器の口縁部で外面にはミガキを施される。

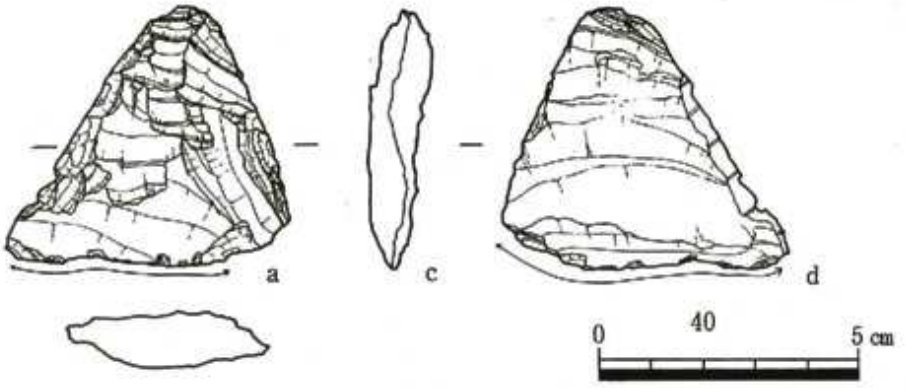
37は，甕または壺形土器の底部で，脚台を有するものである。胴部への立ち上がりの状況は壺形土器に見えるが，壺形土器で，明確な脚台を有する事例は橋牟礼川遺跡ではない。但し，平成3年度の橋牟礼川遺跡の発掘調査におけるSUB.M.№25-26トレンチ第8層から出土した完形の壺形土器の底部はあげ底で，かつ，やや脚台状に輪状に肥厚が見られた事例があり，にわかに器種を限定し難い。

39は，弥生時代甕形土器口縁部である。口縁部突帯部分にはヘラ状工具によって刻みが密に施されている。

38は，いわゆる瓦器の鍋と考えられる。口縁部の突帯部分であり，器そのものに貼付するため，接合部分にはハケメによる凹凸がつけられている。



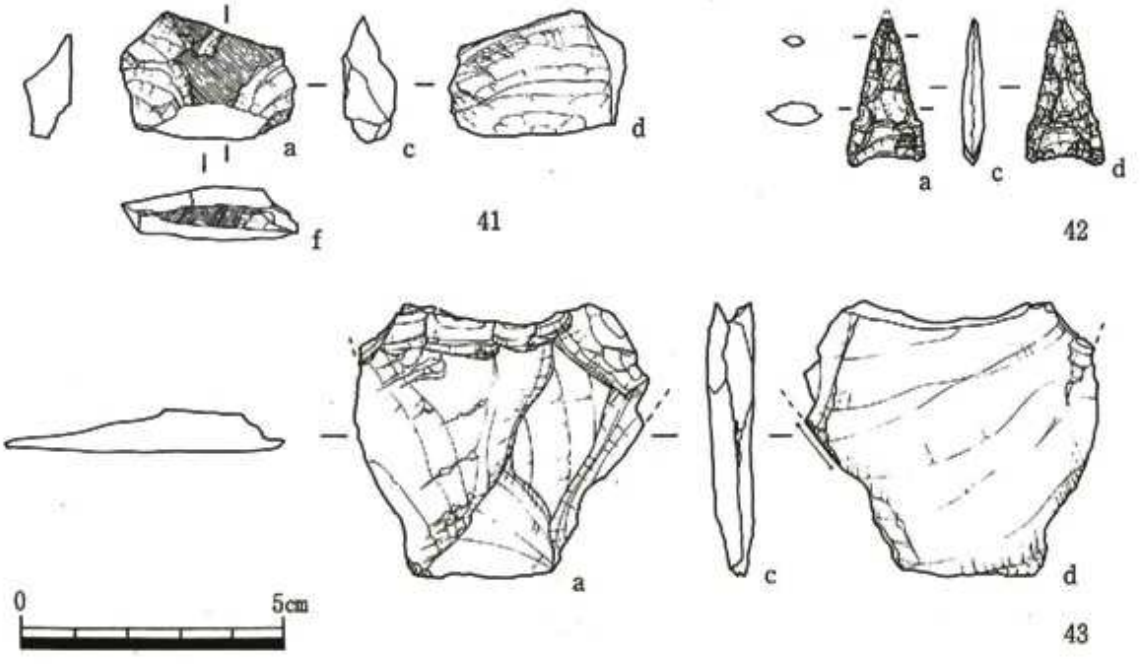
第16図　1トレンチ2号住居床付近出土遺物及び攪乱層出土遺物実測図(S=1／3)



第17図　1トレンチ古墳時代1号住居跡床直付近出土石器実測図(S=2／3)

石器(第17・18図)

40は第1住居跡床直上より10cm内のレベルから出土した使用痕のある剥片である。a面左側部では中心に向けての二次加工が卓越しており，意識的に形状を三角形に整えるものと推測出来る。下端縁には小剥離痕状の使用痕が認められる。なお，a面の剥離面の状況から両極打法によりこの剥片が剥離されたものと考えられる。



第18図　1トレンチ出土石器実測図(S=2／3)

41は磨製石器の破損片と考えられる資料である。a・b面の状況から，当破片が石器より剝落する以前にも数枚の破片が同一方向の力により剝落している。このことから同じような作業を繰り返し行う石器で，その使用頻度も高かったものと推測できる。

研磨痕はa面とf面の研磨痕の継がりは本来，直角であったものと考えられ，磨製石器の刃部とは考えられない。磨製品石斧の基部と考えられよう。

42は細かな縁辺調整が施されている石鏃である。石鏃の先端部は使用の際に欠落したものと考えられる。両面の剝離痕の状況から，石鏃の素材剝片の剝離面が観察出来ないことから，石鏃の完成品が出来るまでの間に，相当の調整剝片が剝離されたものと考えられる。また，基部は整形の最終作業に行い，快りをさほど入れずに整形を施しており他の部分と比べ調整は粗である。

基部の平面的形態にこの石鏃の形態的特徴が見い出せよう。

43は粒子の細かい砂岩系の石材を素材とした使用痕のある剝片である。素材剝片の打面部は石核から剝離する際に剝落したものと考えられる。a面の剝離技術が伺える。ポジ面観察によると，打瘤はほとんど発達しておらず，b面左側縁に刃こぼれ状の使用痕が認められる。

（文責　鎌田）

表—4

図番	取上No	残存法量	器種	部位	色 ㊥	㊥	㊥	㊥	胎土粒	長石材	調整	その他	出土状況	接合関係
1	26	破片	甕形土器	口縁部	10R6/6 10R5/2	2.5YR7/2	10R5/6 2.5YR7/2	—	細砂粒を含む	㊦ ㊥ 微	㊥ナデのちミガキ ㊧ナデのちミガキ 口㊨ナデのちミガキ ㊨ヨコナデ	傾きギモン	9	
2	4	破片	甕形土器	口縁部	10R6/6 5YR7/2	2.5Y7/4	10YR5/3 10R5/6	—	細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ナデ ㊧ナデ 口㊨ナデ ㊨ヨコナデ	傾きギモン	9	
3	35	破片	甕形土器	口縁部	5YR7/4	10YR8/2 10Y6/2	7.5Y6/2 2.5YR7/6	—	細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥マメツ ㊧ナデ 口㊨マメツ ㊨ヨコナデ	傾きギモン	9	
4	2	破片	甕形土器	胴部 突帯部	2.5YR7/6 2.5YR6/2	5YR7/3	5YR8/3 2.5YR7/6	—	細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ナデ ㊧ナデのちミガキ ㊨ヨコナデ	傾きギモン	9	
5	30	破片	甕形土器	胴部 突帯部	10R6/4	10R5/6	2.5YR7/4	—	細砂粒を若干含む	㊦ ㊥ 微	㊥ナデのちミガキ ㊧ナデのちミガキ ㊨ヨコナデ	傾きギモン	9	
6	15	破片	甕形土器	底部	10R6/6 5Y6/2	10YR7/3	10R6/6 10YR7/2	赤色 7.5YR4/2	細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ハクラク ㊧ナデ ㊨ナデ 赤色ナデ	傾きギモン	9	
7	38	破片	鉢形土器	口縁部	7.5YR7/3	5YR8/4	10YR6/3	—	細砂粒を若干含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ナデ ㊧ナデ 口㊨ナデ	傾きギモン	9	
8	29	破片	高杯形土器	胴部 屈曲部	10R6/6 5YR7/3	5YR7/3	10R6/6 5YR7/3	—	細砂粒を若干含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ミガキ ㊧ミガキ 赤色塗彩	傾き若干ギモン	9	
9	5	ⓒ1/8～1/7残存	壺形土器	口縁部	10R5/8 7.5YR6/6	10R5/8	10R6/8 2.5YR5/1	—	微砂粒を含む	㊦ ㊥ 微	㊥ミガキ赤色塗彩 ㊧ 〃 口㊨ 〃	傾き若干ギモン	9	
10	8	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	5YR7/4	5YR7/4	7.5YR7/3	—	細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ ㊤ ㊤ 微	㊥ヨコナデ ㊧ヨコナデ 口㊨ヨコナデ	傾き若干ギモン	9	
11	SA1 / SA2 一括	破片	甕形 or 鉢形土器	口縁部	10R6/4 2.5Y6/3	2.5Y6/3 5YR7/2	2.5YR7/4	—	砂粒を微量含む 細砂粒を含む	㊦ ㊥ 微	㊥ナデ ㊧ナデ 口㊨ヨコナデ	傾きギモン	—	
12	*	破片	鉢形 or 甕形土器	口縁部	2.5YR6/6	2.5YR6/6	2.5YR6/6	—	細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ナデ ㊧ナデ 口㊨ヨコナデ	傾きギモン		
13	*	破片	甕形土器	胴部 突帯部	10R5/3 10R6/6	10R6/4	10R6/4	—	細砂粒を含む 小レキを微量含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ナデ ㊧ナデ，ミガキ？ややマメツ ㊨ヨコナデ？ややマメツ	傾き上下ギモン 突帯部は端部と思われ，斜方向に貼付		
14	*	破片	甕形土器	胴部 突帯部	10R6/6 10R6/3	10R6/6	10R6/6	—	細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥工具によるナデのちナデ ㊧ミガキ ㊨ヨコナデ	傾き上下ギモン		
15	*	破片	甕形土器	胴部 突帯部	10R5/4	5YR7/3	10R5/4 5YR7/3	—	細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ミガキ？ややマメツ ㊧ミガキ ㊨ミガキ，マメツ	傾き上下ギモン		
16	*	破片	甕形土器	胴部 突帯部	10R6/4	10R6/6	10R6/6	—	細砂粒を若干含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ナデ ㊧ナデ，カーボン付着 ㊨ヨコナデ	傾き上下ギモン 突帯部端部の為突帯貼付傾斜		
17	*	破片	甕形土器	胴部 突帯部	10R5/2 10R5/6	10R5/6	10R5/6	—	細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ナデ ㊧ナデ，カーボン付着 ㊨ヨコナデ	傾きギモン		
18	*	破片	甕形土器	胴部 脚台部	10R6/4	—	10R6/6	赤色 10R6/4 2.5YR6/1	細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ナデ ㊧ナデ 赤色ナデ	傾き若干ギモン		
19	*	破片	鉢形土器	口縁部	2.5YR7/8	5YR8/4 N7/0	2.5YR7/3	—	細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ナデ ㊧ナデ 口㊨ヨコナデ	傾き若干ギモン		
20	*	破片	鉢形土器	口縁部	10R6/6	10R5/4 2.5YR4/2	10R6/6	—	砂粒を若干含む 細砂粒を含む	㊦ ㊥ ㊤ 微	㊥ナデややマメツ ㊧ナデややマメツ 口㊨ヨコナデ	傾きギモン		

表－5

図番	取上No.	残存法量	器種	部位	色調				胎土粒	長和材	調整	その他	出土状況	接合関係
21	SA1 / SA2 一般	破片	鉢形 or 壺形土器	口縁部	10R6/6 5YR7/3 5YR6/2	5Y5/2 2.5YR7/3	2.5Y5/2 2.5YR6/4	－	砂粒を若干含む 細砂粒を含む	⑨⑪ ⑬ 他	㋐マメツ ㋑ナデ ㋒㋓ヨコナデ	傾きギモン		
22	＊	破片	高杯形土器	脚台部	10R4/8	2.5YR5/6	5Y5/1 5YR7/6	－	微砂粒を若干含む	⑪ 他	㋐ミガキ,赤色塗彩ややマメツ 脚内マメツ 脚端ミガキ赤色塗彩,ややマメツ	傾きギモン		
23	＊	破片	高杯形土器	脚台部	10R5/4	－	5YR8/4 5Y6/2	脚内 10R5/6	微砂粒を含む	⑦ ⑭ 他	㋐ミガキ,赤色塗彩ややマメツ 脚内ミガキ赤色塗彩ややマメツ 脚端ミガキ,赤色塗彩ややマメツ	傾きギモン		
24	＊	破片	高杯形土器	脚台部	10R4/8	－	10R5/6	脚内 10R4/6	微砂粒を微量含む	⑦ ⑬ 他	㋐ミガキ,赤色塗彩ややマメツ 脚内ミガキ赤色塗彩ややマメツ 脚端ミガキ,赤色塗彩ややマメツ	傾きギモン		
25	＊	破片	高杯形土器	脚台部	2.5YR7/4 10YR6/4	－	10YR6/3 10Y7/1	脚内 7.5YR5/3 10YR3/1	砂粒を含む	⑭ ⑦ 他	㋐ナデ, 赤色塗彩 脚内ナデ 脚端ナデ			
26	＊	破片	高杯形土器	脚台部	5RP7/1 10R6/8	－	10R6/4	脚内 10R6/4	細砂粒を含む	⑦ ⑭ 他	㋐ミガキ, ややマメツ 脚内ナデ	傾きギモン		
27	＊	破片	深鉢形土器 (貝文系統)	口縁部	7.5YR5/3 7.5YR4/1	5YR5/4 10R6/6	10R6/6 10YR5/4	－	微砂粒を含む	⑪ 他	㋐ナデ ㋑条痕 ㋒㋓ヨコナデ	傾き不明		
28	1号土壙 遺土1,2 一般	破片	高杯形土器	口縁部	5YR8/4 2.5YR5/2	10YR7/4 5Y4/1 5YR5/3	7.5YR7/4 5Y6/1	－						
29	1号土壙 一般	破片	甕形土器	底部 脚台部	5YR5/3 2.5YR6/6 7.5YR3/1	－	7.5YR3/1 2.5YR5/6	脚内 10R3/1	細砂粒を含む	⑨ ⑭ ⑬ 他	㋐ユビオサエのちナデ 脚内ナデ 脚端無調整			
30	＊	破片	高杯形土器	脚部 屈曲部	10R6/8	7.5YR5/3	10R6/8 7.5YR5/3	－	微砂粒を含む	⑦ ⑭ ⑬ 他	㋐ミガキ?ややマメツ ㋑ミガキ	傾きギモン		
31	SA2 F3	破片	(重)足付皿形土器	脚台部	2.5YR7/3	7.5YR8/2 10YR6/2	5YR8/3 10YR5/1	脚内 2.5YR7/3 2.5YR3/1	細砂粒を含む	⑨ ⑭ ⑪ 他	㋐ナデ ㋑ナデ 脚内ナデ 脚端無調整	傾きギモン		
32	SA2 F2	破片	甕形土器	口縁部	2.5YR7/6 5YR7/3 10YR5/3	2.5YR7/6 5YR7/3 10YR5/3	2.5YR7/6 10YR6/3	－	細砂粒を含む	⑦ ⑭ ⑬ 他	㋐工具によるナデのちナデ ㋑工具によるナデのちナデ ㋒㋓ヨコナデ ㋔ヨコナデのち棒状具でキザミ	傾き若干ギモン		
33	SA2 F1	破片	甕形土器	頸部 突帯部	10R4/2 10R6/4	10R6/6	10R6/6	－	細砂粒を含む	⑦ ⑭ ⑪ 他	㋐ナデ ㋑工具によるナデ, ナデ ㋔ユビオサエのちナデのち指圧によるキザミ	傾き上下ギモン		
34	SA1 F1	㊟ 最小径部 1/1残存	甕形土器	底部	5YR5/3	5YR4/2 2.5YR6/3	10R5/8 10YR6/2	脚内 2.5YR5/4	砂粒を微量含む 細砂粒を若干含む	⑭ ⑬ ⑩ 他	㋐マメツ ㋑工具によるナデのちナデやややマメツ ㋔ハクラク 脚内ナデ	反転		
35	SA2 F5	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	10R4/2	5YR6/4	10YR8/4 2.5YR7/6	㋒㋓ 5YR6/4	微砂粒を若干含む	⑦ ⑭ ⑪ 他	㋐工具によるナデのちナデ ㋒㋓工具によるナデのちナデ	傾きギモン		
36	カクラン	破片	甕形 or 鉢形土器	口縁部	2.5YR6/2 7.5YR4/1	2.5YR7/4	2.5YR6/2 2.5YR7/4	－	細砂粒を若干含む	⑨ ⑭ ⑪ 他	㋐ナデ ㋑ナデのちミガキ ㋒㋓ミガキ	傾きギモン		
37	＊	㊟ L/1残存 ㊟7.4cm	甕形土器	底部	10R6/6 10YR6/2	10YR6/3 7.5YR3/1	10R5/6 7.5YR7/3	脚内 10YR6/2 10r6/6	細砂粒を含む	⑦ ⑭ ⑪ ⑬ 他	㋐ナデ ㋑ナデ ㋔ナデ 脚内ナデ	反転		
38	＊	破片	瓦器, 鍋	口縁部	7.5YR3/1 10YR6/2	10YR7/2 10YR6/1	10YR5/1 10YR7/3	－	微砂粒を微量含む	⑭ ⑬ 他	㋐接合部よりワレ, 接合部にハケメ ㋑ヨコナデ ㋒㋓ナデ,ややマメツ			
39	＊	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	2.5YR6/6	2.5YR6/6	2.5YR6/6 10YR6/1	㋒㋓ 5YR6/3	微砂粒を若干含む	⑭ ⑬ 他	㋐ナデ ㋑ヨコナデ, ナデ ㋒㋓ヨコナデ	傾き若干ギモン		

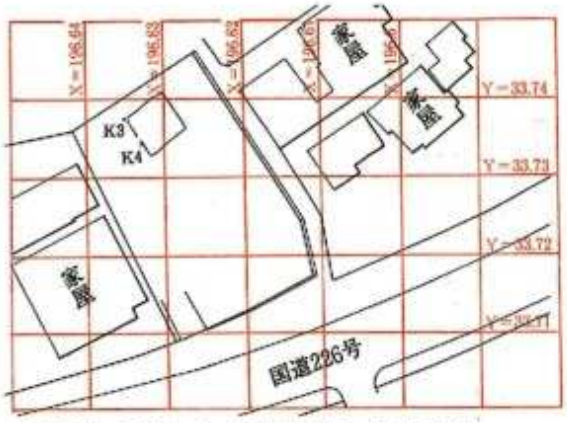
表－6

図番	取上No.	残存法量	器種	部位	色 ㊥	㊦	㊧	㊨	胎土粒	使用材	調整	その他	出土状況	接合関係
40	SA1 一般	完全形 ㊥5.6cm ㊦5cm ㊧1.1cm ㊨22 g	剥片							石材 粘板岩		使用痕あり		
41	一般	欠損 ㊥形 3.45cm ㊦㊧ 2.4cm ㊦形 1.0cm ㊨重 10 g	磨製石器							石材 粘板岩			攪乱土 出土	
42	SA1 一般	完全形 ㊥2.8cm ㊦1.6cm ㊧0.5cm ㊨ 1 g	打製石鏃							石材 粘板岩				
43	32	完全形? ㊥5.3cm ㊦4.7cm ㊧0.9cm ㊨21 g	剥片							石材 粘板岩		使用痕あり	9	

第2節　2トレンチの調査

国指定史跡から約70m程西側の地点に6×6mのトレンチを設け調査を行った。

中世～弥生時代に至る包含層が確認された他，中世の柱穴群等が検出された。



第19図　2トレンチ位置図(S=1／1,000)

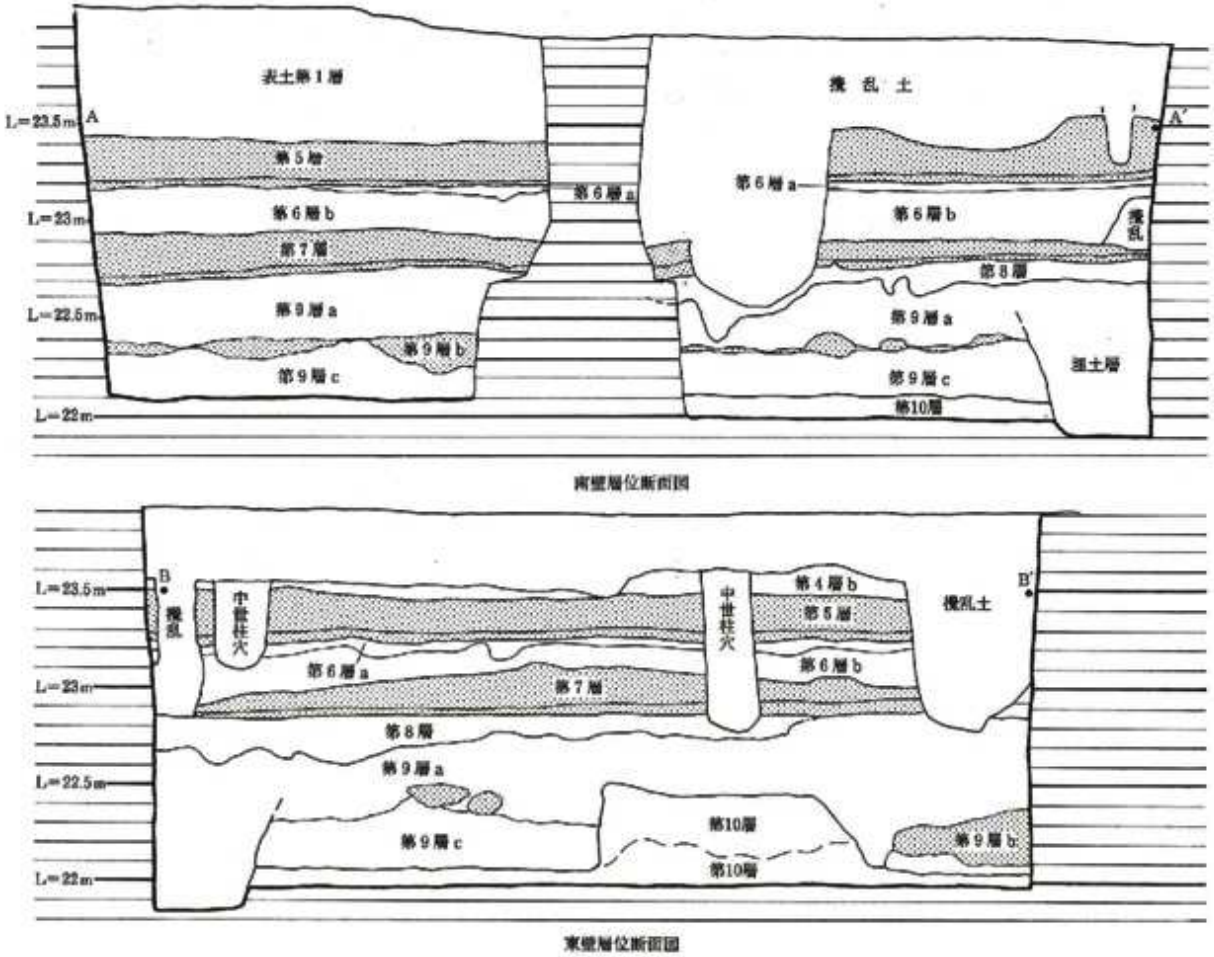
(1) 層　位

第1層，第4層，第5層，第6層a，b，第7層，第8層，第9層a，b，c，第10層を確認した。調査地点は，かつて家屋が建っており，第1層は建築時の攪乱土層である。第4層は，黒色の砂質層で中世期の包含層である。第5層，第7層の紫コラ，青コラはそれぞれプライマリーな堆積をなす。

第9層は，青コラの前期ステージ(注)の噴出物である第9層bを境に，黒褐色の第9層a，褐色の第9層cの3層に細分が可能である。第9層a，cの両層からは成川式土器の破片が出土している。

第10層は，赤褐色を呈すやや粘質の土層で，弥生式土器の破片を包含する。

土層の堆積は，安定しており，西から東（山手から海岸）へ向かって，緩やかな傾斜が見られる。



第20図　2トレンチ層位断面図(S=1／40)

また，トレンチ東壁において，台形状に第10層が盛り上がりが見られる。調査時において，トレンチの壁からトレンチ中央に向けて約80cm程延びる舌状の第10層の高まりを確認したが，自然地形によるものと誤認し，掘り下げてしまった。壁面の状況から，土盛り的な遺構，あるいは，自然地形の盛り上がりを整形して利用した何らかの遺構と考えられるが，詳細は不明である。(文責 渡部)

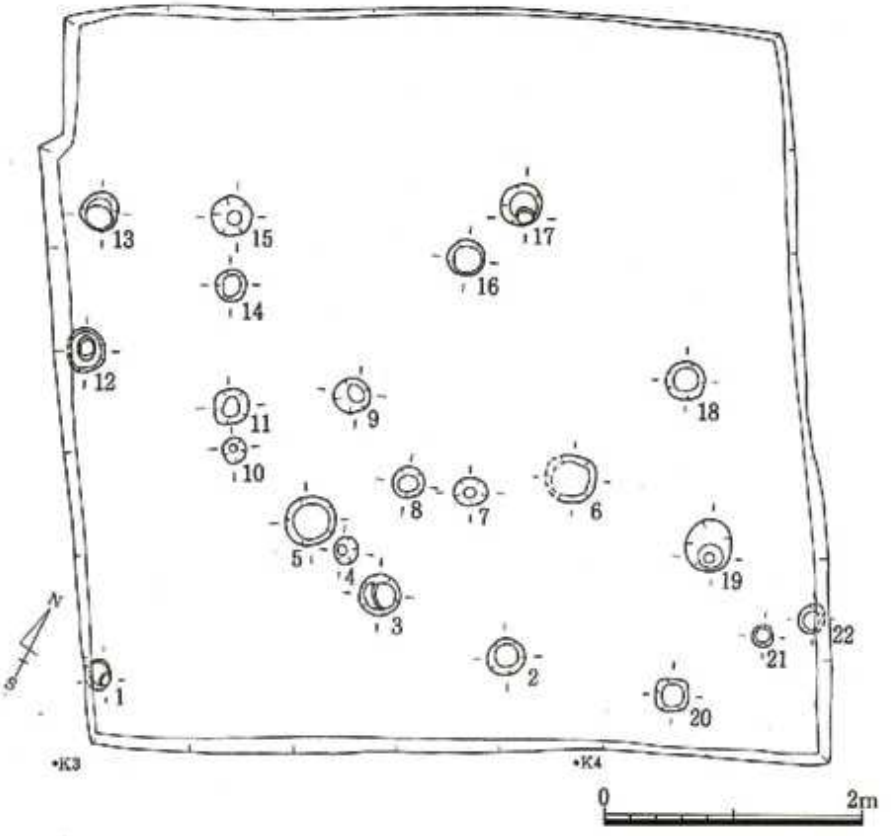
(2) 遺　構

A．柱穴群（中世）

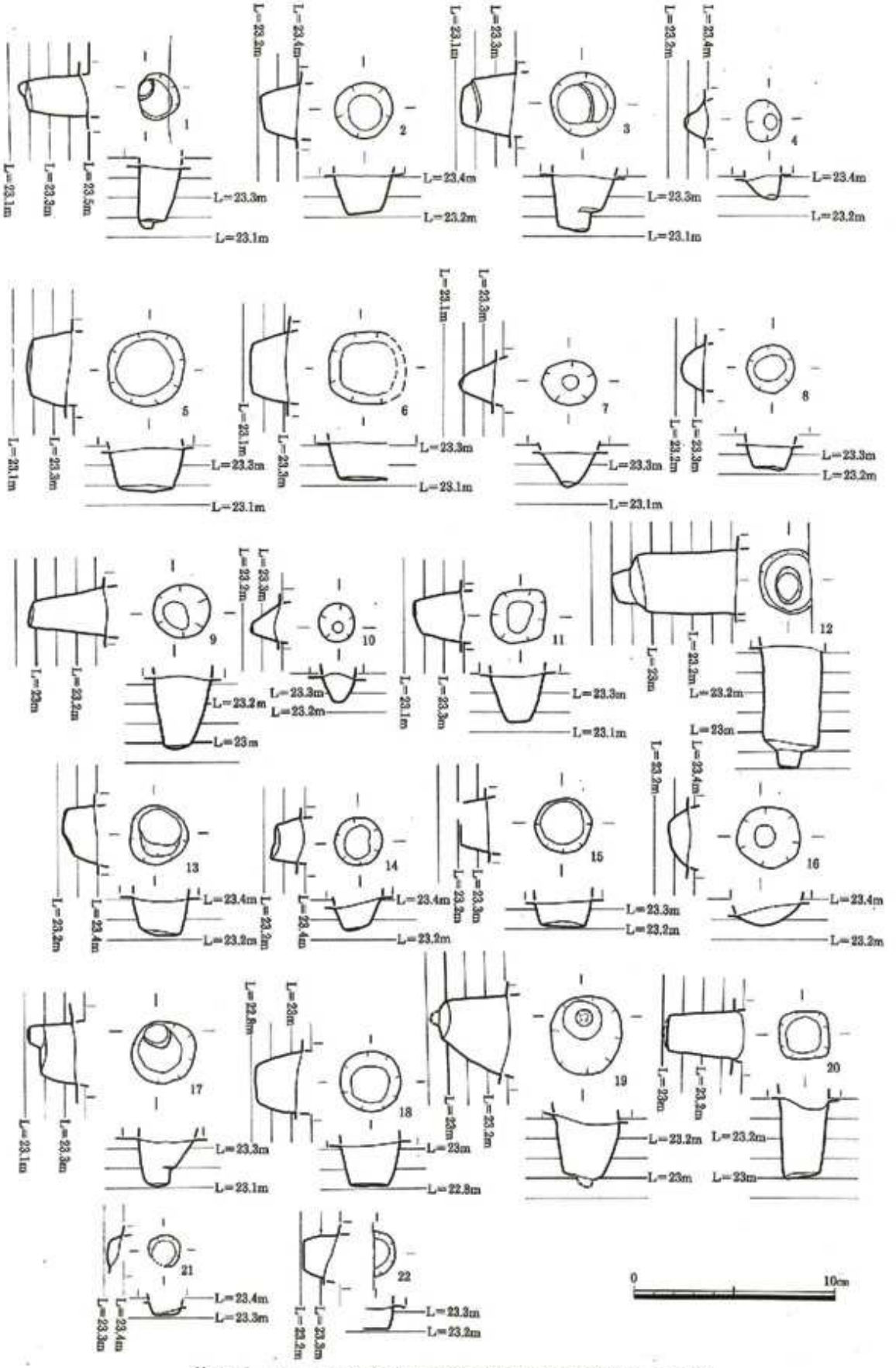
紫コラの上面を検出した段階で，上層より掘り込まれた柱穴群を確認した。埋土が，第４層の黒色土層であることから中世期の柱穴群と考えられる。

表－7

柱穴No.	上場径(cm)	下場径(cm)	深さ(cm)	柱穴No.	上場径(cm)	下場径(cm)	深さ(cm)
1	㊥2.4 ㊦1.9	㊥0.6 ㊦0.6	3.5	12	㊥3.3 ㊦3.1	㊥0.8 ㊦1.0	6.3
2	㊥2.9 ㊦2.8	㊥1.75 ㊦1.65	2.0	13	㊥3.0 ㊦2.85	㊥2.1 ㊦1.7	2.0
3	㊥3.2 ㊦3.2	㊥1.9 ㊦1.65	2.8	14	㊥2.4 ㊦2.3	㊥1.7 ㊦1.2	1.7
4	㊥2.1 ㊦1.7	㊥0.8 ㊦0.7	1.2	15	㊥2.8 ㊦2.8	㊥2.2 ㊦2.1	1.4
5	㊥3.8 ㊦3.7	㊥2.9 ㊦2.8	2.2	16	㊥3.2 ㊦3.1	㊥1.1 ㊦1.0	1.1
6	㊥3.85 ㊦3.6	㊥2.8 ㊦2.6	1.9	17	㊥3.3 ㊦3.1	㊥1.2 ㊦0.9	2.3
7	㊥2.8 ㊦2.2	㊥0.8 ㊦0.7	1.7	18	㊥3.1 ㊦3.0	㊥2.0 ㊦1.8	2.3
8	㊥2.4 ㊦2.4	㊥1.6 ㊦1.3	1.2	19	㊥4.0 ㊦3.55	㊥0.35 ㊦0.35	4.0
9	㊥2.8 ㊦2.7	㊥1.55 ㊦1.1	3.9	20	㊥2.8 ㊦2.4	㊥1.9 ㊦1.7	4.0
10	㊥2.6 ㊦1.8	㊥0.5 ㊦0.5	1.5	21	㊥1.6 ㊦1.5	㊥1.7 ㊦1.1	0.7
11	㊥3.2 ㊦2.6	㊥1.6 ㊦1.1	2.6	22	㊥2.2 ㊦	㊥1.5 ㊦	1.8



第21図　２トレンチ中世柱穴群検出状況図(S=1／60)



第22図　2トレンチ中世柱穴群平面図及び断面図(S=1／30)

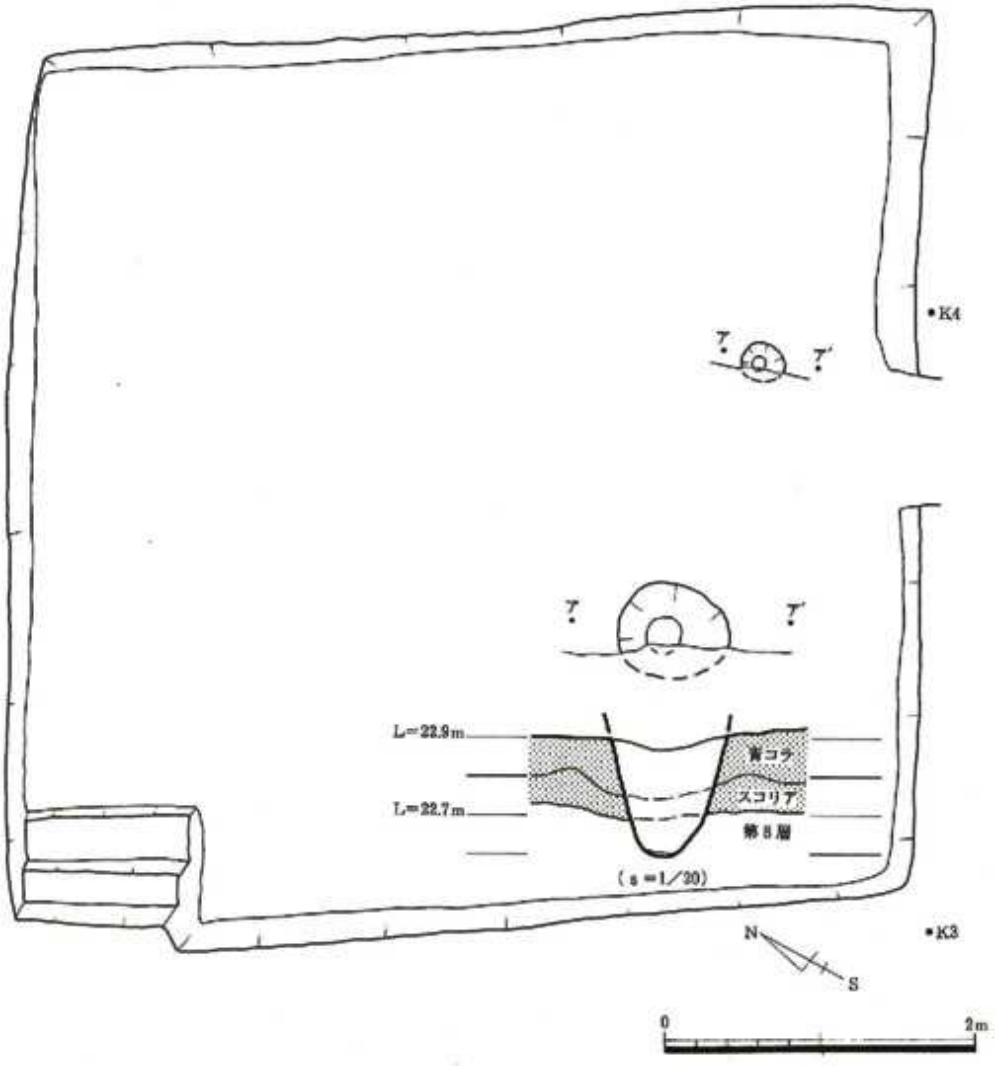
柱穴は22穴を確認した。詳細については表－7のとおりである。検出した柱穴群についてプランの推定を試みたが，明確にプランをなすものの特定は困難であった。

柱穴には，2段掘りものと素掘りのものがあり，素掘りのタイプのものは，比較的浅いものが多いが，個々のばらつきも大きく，一概に分類しづらい。掘り込み面が不明なため正確な深さについても不明であるが，紫コラ降灰後の生活の再開を示す貴重な遺構であり，その詳細な時期も含め，今後，検討すべき課題の一つと言えよう。

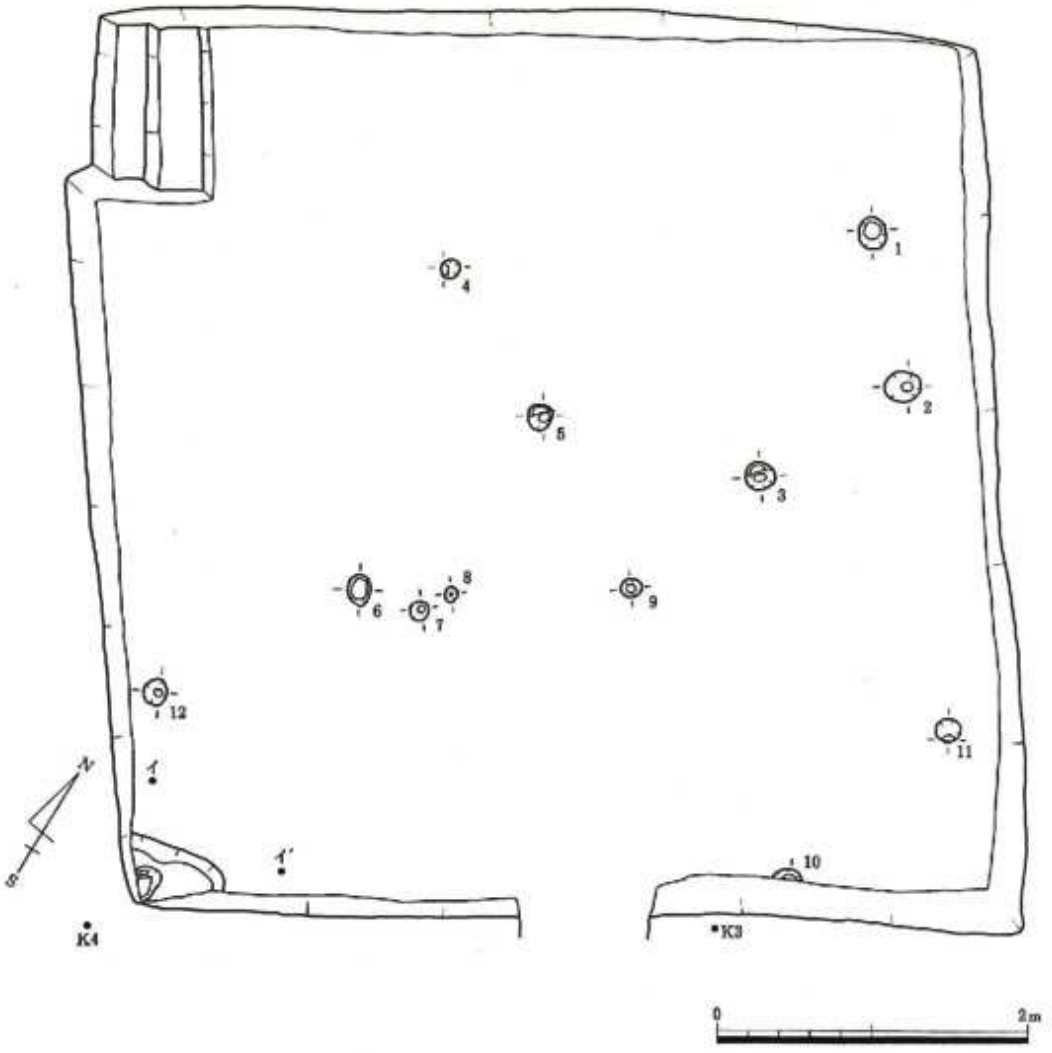
B．柱穴（奈良～平安時代）

青コラ上面まで掘り下げた段階で，第6層中から掘り込まれた柱穴を確認した。柱穴は長径28cm，短径16cm＋α，深さ30cm＋αを計り，青コラ層を掘り抜いて下層の第9層に達する。調査区内からは，1穴のみの検出であったが，調査区南側に広がる可能性も考えられる。

また，第6層上面，トレンチ北隅において，炭の集中する範囲が見られた。橋牟礼川遺跡では，ほとんどの地点で，第6層に畠が作られているが，畠の境界付近等から，雑草を燃やしたと考えられる野焼きの痕跡も発見されていることから，そうした作業の痕跡を示す遺構の可能性もある。



第23図　2トレンチ奈良～平安時代柱穴検出状況(S=1／50)及び平面図・断面図(S=1／20)



第24図　2トレンチ古墳時代柱穴群検出状況図(S＝1／50)

c．柱穴群（古墳時代1～11，弥生時代12），土壙（古墳時代）

第9層Cを検出した段階で，第9層aを埋土とする古墳時代の柱穴群を検出した。（1～11）個々の詳細については，下表にまとめる通りである。

表－8

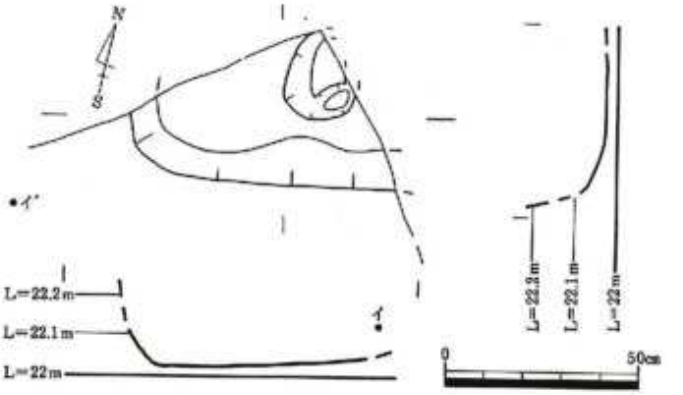
柱穴No.	上場径(cm)	下場径(cm)	深さ(cm)	柱穴No.	上場径(cm)	下場径(cm)	深さ(cm)
1	長2.2　短1.8	長1.1　短1.0	1.8	7	長1.1　短1.1	長0.5　短0.5	1.2
2	長2.5　短2.0	長0.8　短0.7	4.4	8	長0.9　短0.9	長0.2　短0.15	0.9
3	長2.0　短1.8	長0.8　短0.5	2.1	9	長1.4　短1.3	長0.6　短0.5	3.0
4	長1.25　短1.2	長0.7　短0.5	2.2	10	長1.9　短	長0.95　短	1.5
5	長1.7　短1.6	長0.7　短0.55	2.1	11	長1.5　短1.5	長0.7　短0.6	2.6
6	長2.0　短1.6	長1.3　短0.9	1.6	12	長1.8　短1.5	長0.55　短0.55	

いずれも直径20～25cm前後の小さな柱穴である。プランの推定を試みたが，検出した範囲内では建物規模を特定することができなかった。

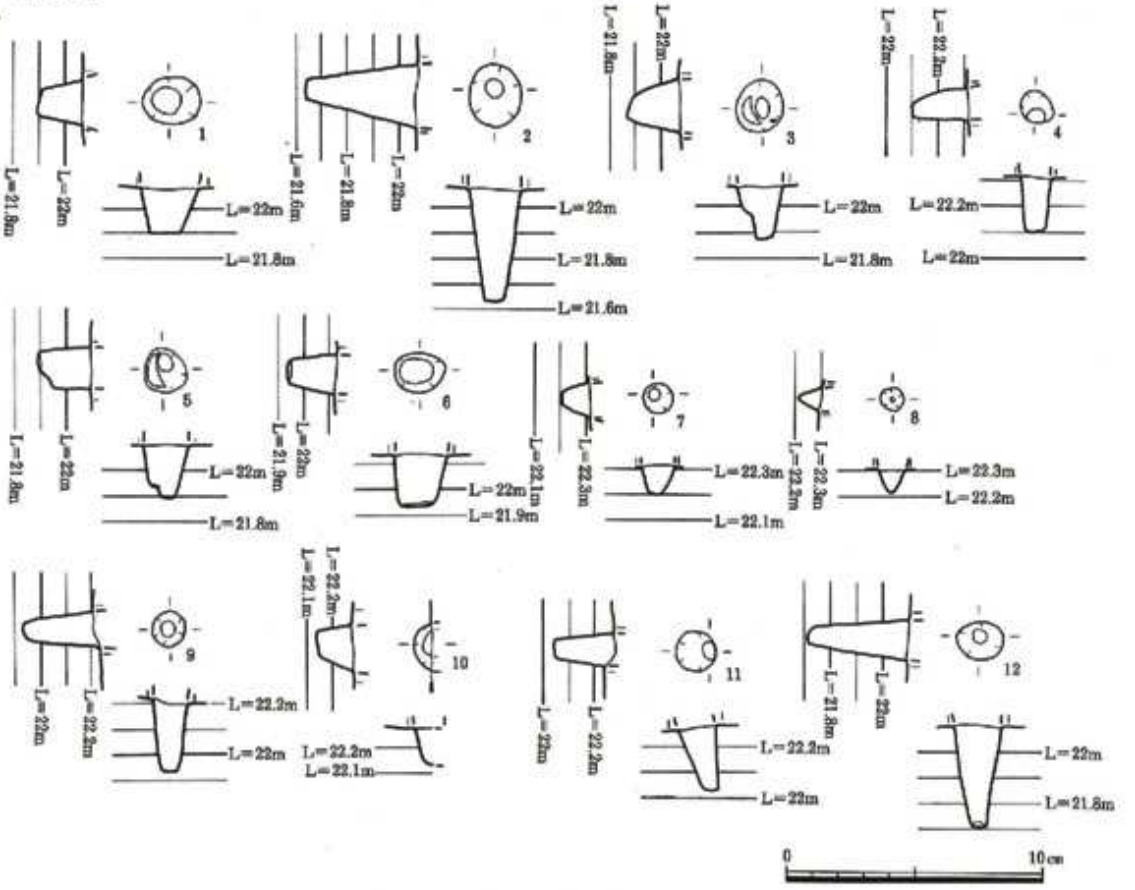
また，古墳時代の遺構として，土壙の一部を検出した。

土壙は第９層ａから掘り込まれ，（第20図参照）第10層に達し，深さ50cm＋αを計る。また内部に数cmの凹みを有する。竪穴式住居跡の可能性も考えられるが，住居と認定し得る条件，例えば炉跡や貼床の存在が見られないため土壙と呼称した。

弥生時代の柱穴を１穴検出した。(12)長径19cm，短径15cm，深さ30cmで，第10層中から掘り込まれている。埋土は第９層に色調が類似するが，第10層土が上面に被覆していたため，弥生時代の遺構と判断した。



第25図　２トレンチ土壙平面図及び断面図(S=1／20)



第26図　２トレンチ古墳時代柱穴平面図及び断面図(S=1／30)

(2) 遺　物(土器)

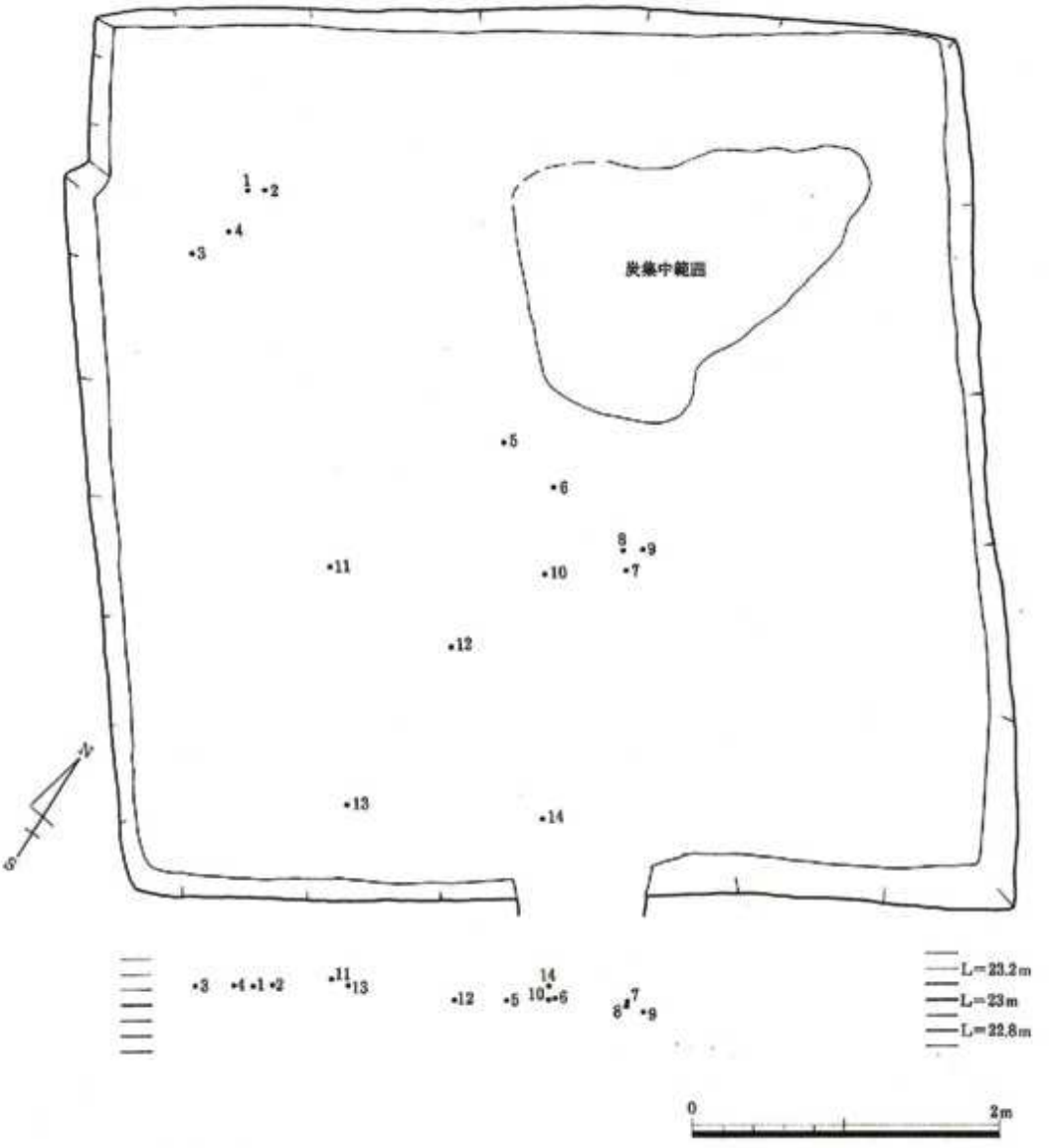
本トレンチにおいて出土した土器について，以下層位毎に述べる。

a．第6層b出土土器

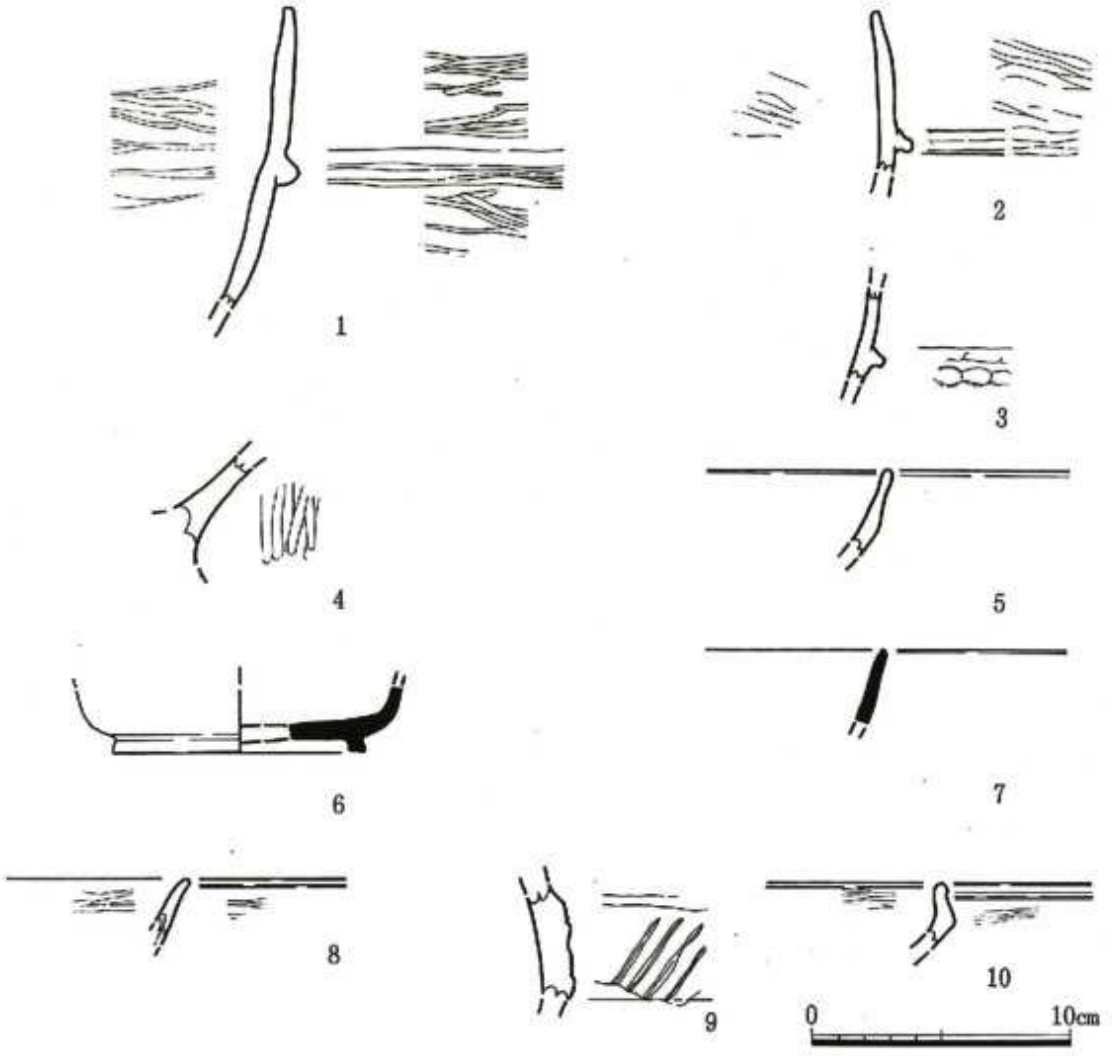
1～4は甕型土器と思われる。

1，2は口縁部で，口縁部からやや下った位置に一条の突帯を施すものである。第6層は，概ね7世紀後半～西暦874年までの包含層であると考えられていることから，古墳時代のいわゆる「成川式土器」の甕形土器属性の一部が継承されるものとして注意される。

しかし，口唇部から突帯までがやや距離がある点や，ミガキを多用する点，そして，器面や器肉の色調が暗いなどの漠然とした，印象としての差異を読み取ることができる。今後，「成川式土器」との型式差を客観的に読み取る研究が必要であろう。



第27図　2トレンチ第6層b遺物出土状況図(S=1／50)



第28図　2トレンチ第6層出土遺物実測図(S=1/3)

3は，甕形土器胴部突帯部である。

4は，甕形土器の底部脚台部で，外面には縦方向のミガキが認められる。脚台を有する甕形土器については，平成4年度の国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地内における確認調査において，7世紀の後半期に堆積したと考えられるテフラ層（通称「青コラ」）を掘り抜いた住居跡の底面直上で検出されたものがあり，「成川式土器」の一器種である甕形土器の属性がテフラ堆積時点以降にも継承されるものとして注意されたが，本資料の場合，その一事例として挙げる論拠に乏しい。

5は，高坏形土器の坏部口縁部または鉢形土器の口縁部と考えられるが，にわかに器種は限定し得ない。

6，7は須恵器である。

6は，坏底部で，高台を有する。

7も，坏で，口縁部である。

8，9は壺形で，8は口縁部，9は胴部突帯部である。特に9については，いわゆる「成川式土器」の最終未段階と考えられている「笹貫式土器」の壺形土器を特徴づける幅の広い突帯を有し，かつ，その突帯に施される鋸歯文を形成する斜方向の刻みを有するものである。9が，第6層bの堆積時点で用いられたか否かについては何ら答えを導き出し得ないが，1～4のように7世紀後半

期のテフラ層の堆積後まで継承されるのかどうか，今後注意される問題であろう。

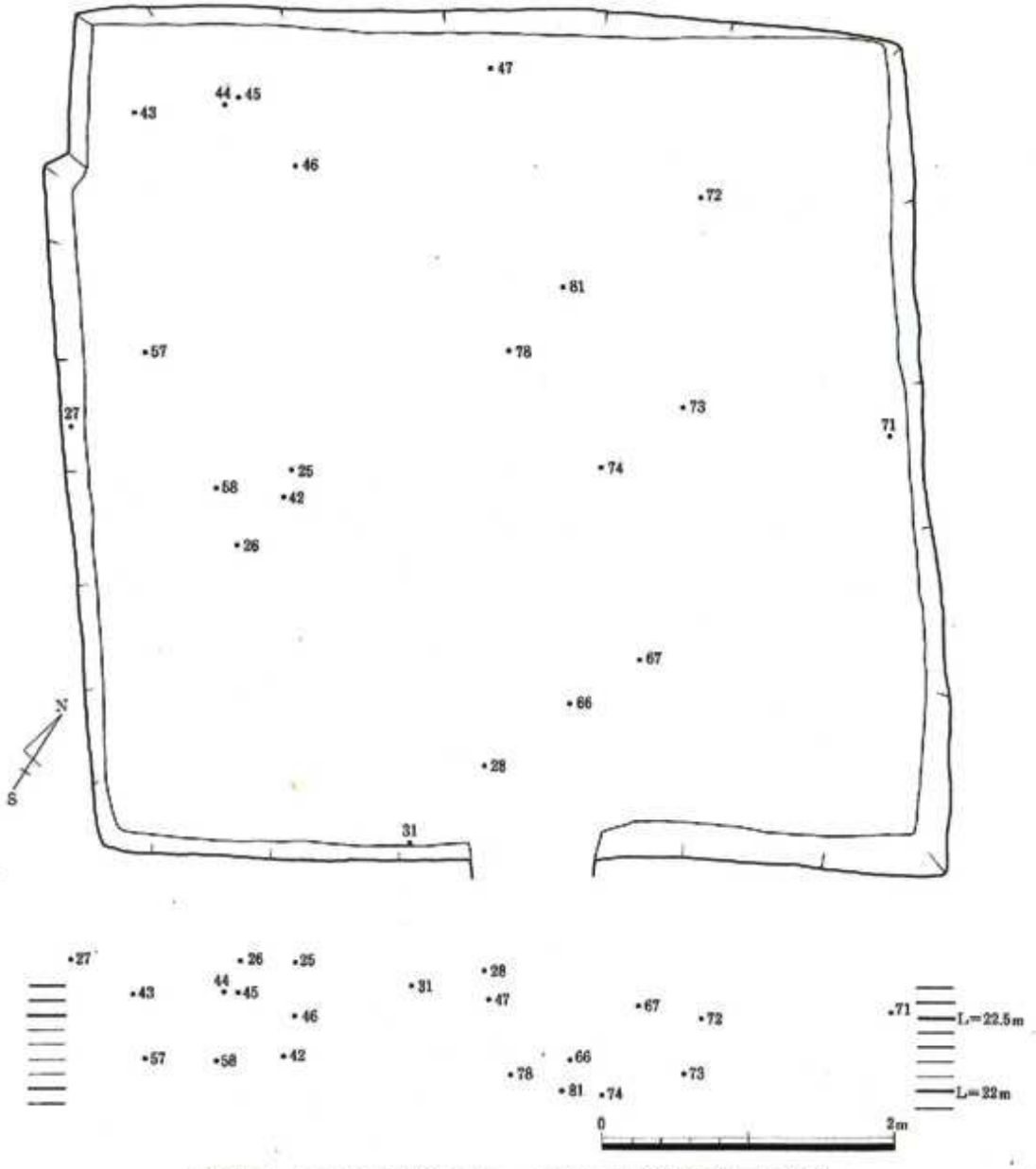
10は縄文時代晩期の精製浅鉢形土器の口縁部である。器形から刻目突帯文土器に伴う浅鉢形土器と考えられる。かような時期の遺物が第6層bに含まれていることの要因について今後注意する必要があろう。

b．第9層a出土土器

11は鉢形土器もしくは蓋形土器の口縁部と考えられる。12は，壺形土器の胴部突帯部であり，通常は鋸歯文等の文様が付加されるが，本資料は無文である。

c．第9層c出土土器

13～16，21は，甕形土器の口縁部または胴部突帯部である。13～15は突帯部に刻みは施さないが，16，21は密に刻みが施される。17は壺形土器胴部突帯部で，ヘラ状工具による斜方向の刻みが施される。18は壺形土器の底部と考えられる。19は須恵器高坏の坏部である。断面円形の紐状の把手を



第29図　2トレンチ第9層a，c遺物出土状況図(S=1／50)

有し，クシ状の工具を用いた波状文が見られる。胴部の断面には，焼成時において生じたと考えられる亀裂が認められる。20は，弥生時代甕形土器の口縁部である。口唇部の凹凸が著しく，突帯部の貼り付け時の規画性に乏しい。

d．第10層出土土器

22～31は，いずれも弥生時代甕形土器の口縁部である。これらのうち，口縁部の突帯に刻みを施すもの（24～29，31）と刻みを施さないもの（22，23，30）がある。

22は，口縁部突帯が断面三角形状を呈するもので，突帯の接合痕が見られる。

23も22と同様に，口縁部突帯の断面は三角形状を呈する。

24は，口縁部はやや「T字」状を呈する。

25は，口唇部上面が凸上に湾曲する。

26は，口唇部上面にヨコナデを強く施しているためやや凹状に湾曲する。

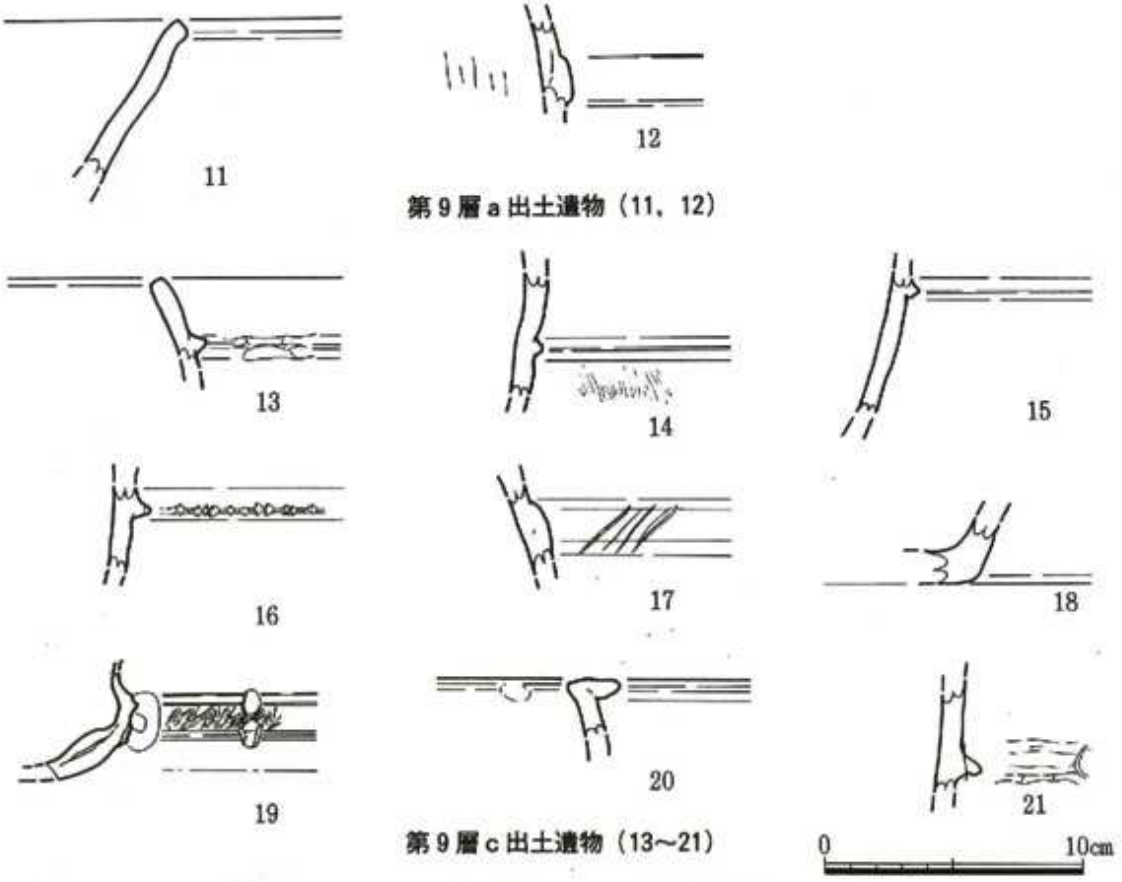
27，28は，口縁部凸帯が三角形を呈するものである。

29は，明らかに口縁部内側および外側を突出させて，断面「T字」となるように意識されている。

30は，口縁部突帯が長くなり，断面が逆「L字」に近い形状を呈する。

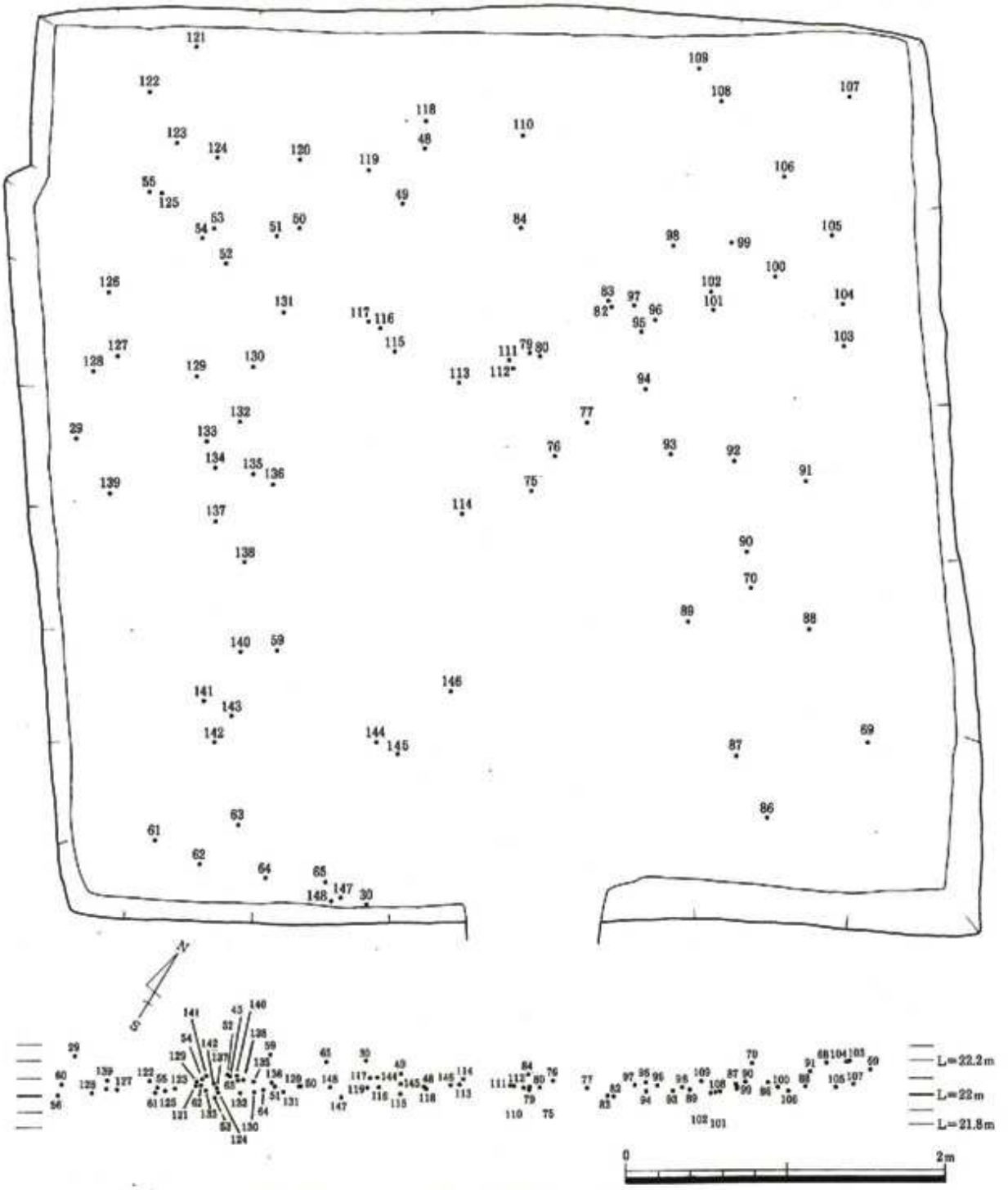
31も，30と同様の器形を有するが，胴部から突帯への変化点が不明瞭でシャープさに乏しい。

31は，口縁部の突帯に刻みを施し，かつ，刻みが施された2条の突帯が，胴部から口縁部への変化点から縦方向に平行しながら貼り付けられている。このような突帯の貼付するものは一般に，「工字状突帯」と呼ばれるものがあるが，東部九州では下城式の甕形土器に付されるものがある。南部



第30図　2トレンチ第9層a，c出土遺物実測図(S=1／3)

九州の事例は比較的乏しく，鹿児島県鹿屋市の榎原遺跡から出土した壺形土器に刻みを施す３条の突帯を縦方向に垂下させるものがある。このような突帯を施す甕形土器は南部九州では極めてマイナーであることや，他の甕形等の属性を保持しながら付加されている点からも，東部九州との関係を示す資料として注意される。32～36は，弥生時代甕形土器胴部突帯部である。32～34は突帯に刻みを施さないもので，32，34は２条の突帯を，33は３条以上の突帯を貼付したものと考えられる。



第31図　２トレンチ第10層遺物出土状況図(S=1／40)

35は，２条の刻みを有する突帯を施したものと思われる。

36は，１条の刻みを有する突帯を施す。

37～40は弥生時代甕形土器の底部で，37～39は平底を呈する。

40は，脚台となると考えられている。

41～44は，弥生時代壺形土器で，41，42は口縁部，43，44は肩部ないし頸部付近である。

41，42ともに，口唇部はヨコナデが施され，断面において若干凹んだ状況を見ることができる。

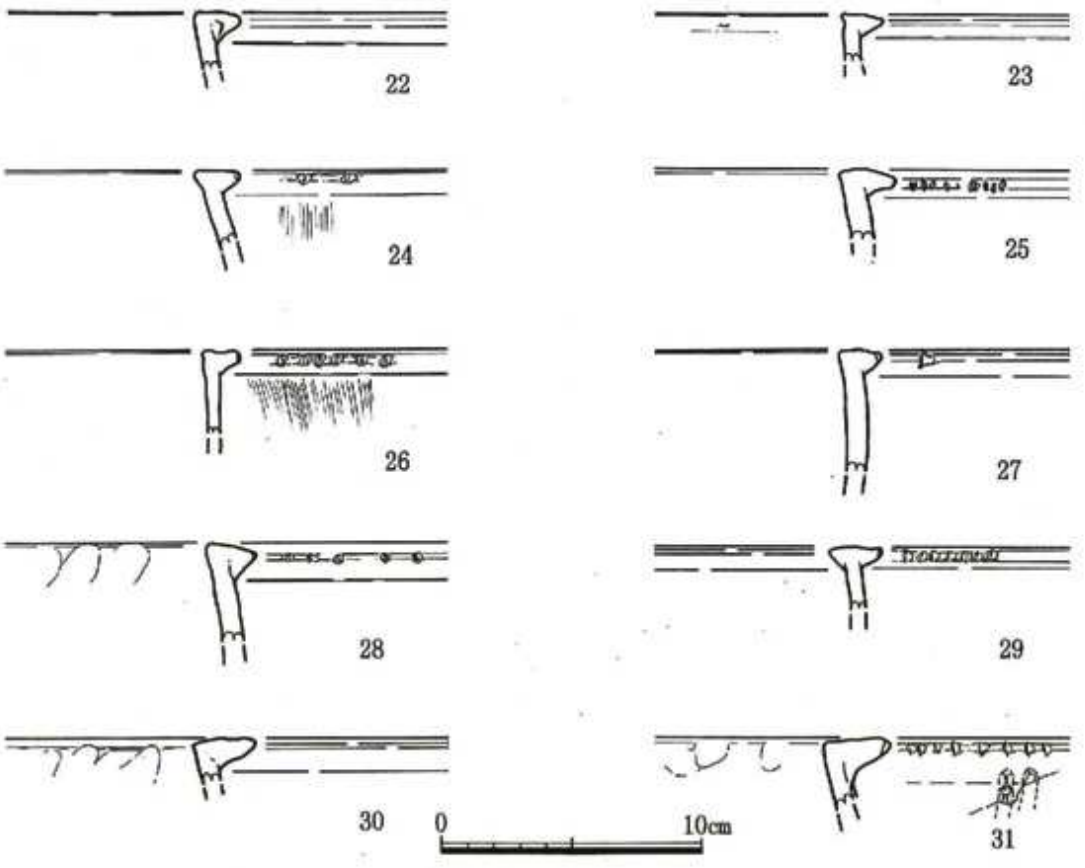
43は，３条の波線を施している。

44は，２条以上の刻みを施さない突帯が残存する。

45，46は，縄文時代晩期の深鉢形土器の口縁部で，特に，46については口唇部に突起を付しており，黒川式土器の新しい段階の深鉢形土器であると考えられる。

45，46などの縄文時代の遺物の混入も，第10層にあることからも，第10層は扇状地堆積物として堆積したと考えることに肯首できる。

その堆積時期については，包含される弥生土器の一群を見ると，弥生時代中期から後期にかけての資料が多い。橋牟礼川遺跡の標準層位における第11層の「暗紫コラ」と呼ばれるテフラ層は，いわゆる「山之口式土器」を被覆することで知られるもので，弥生時代中期末から後期の時期に形成されたと考えられている。従って，本トレンチにおける第10層は，橋牟礼川遺跡標準層位における第12層に相当する包含層と見て大きな間違いはないものと考えられる。　　（文責　下山）



第32図　２トレンチ第10層出土遺物実測図①（S＝1／3）

e．近世～近代の攪乱層からの出土土器

47は，土師質のもので，外面にスタンプによる文様が付されている。

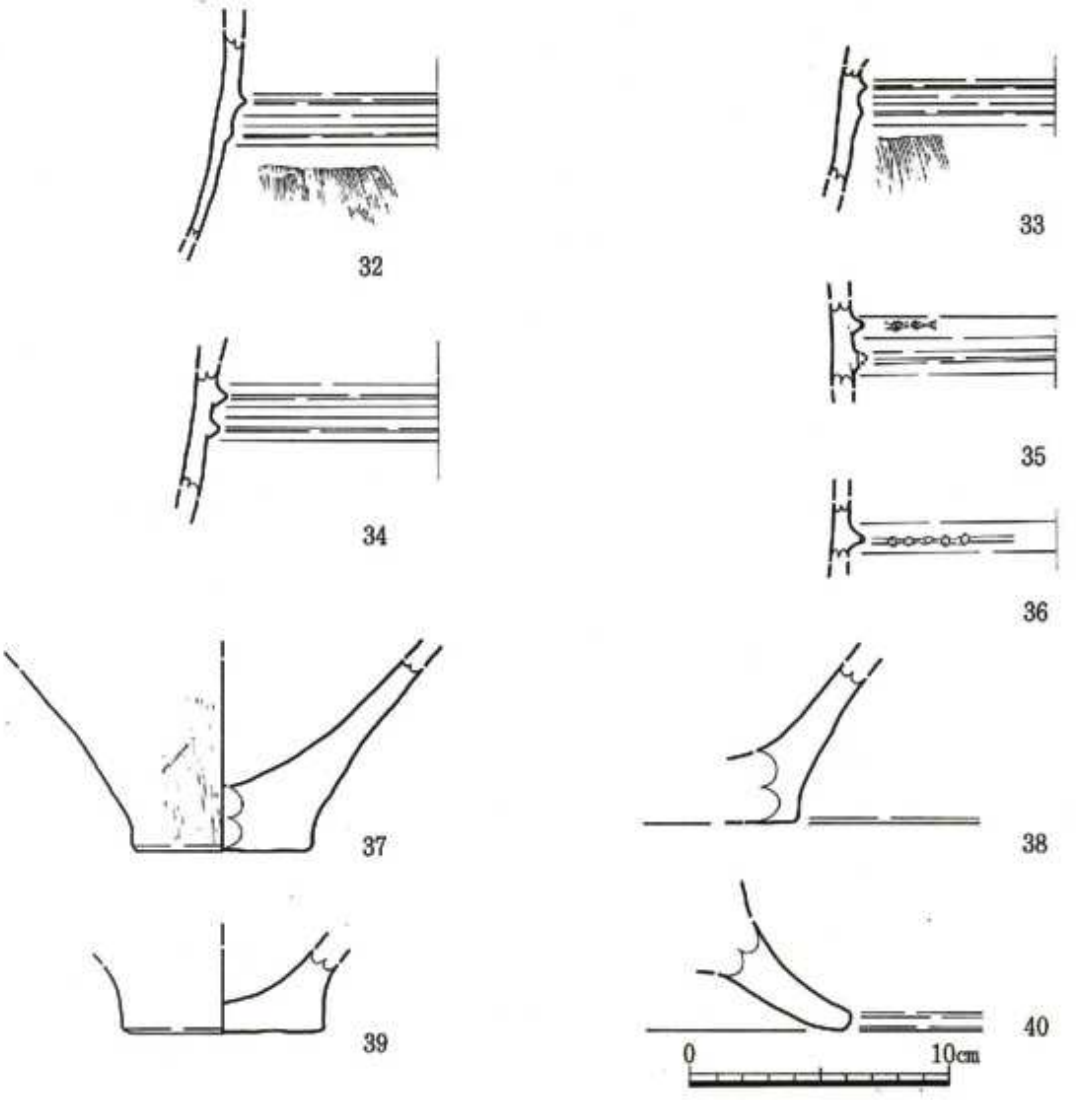
48は，陶器の皿である。内面，外面ともに灰色に発色する釉が施されている。

49は，陶器碗の底部で，内面に暗緑色に発色する釉が施されており，目あと（重ね焼きの接着部）が見られる。外面は無釉。

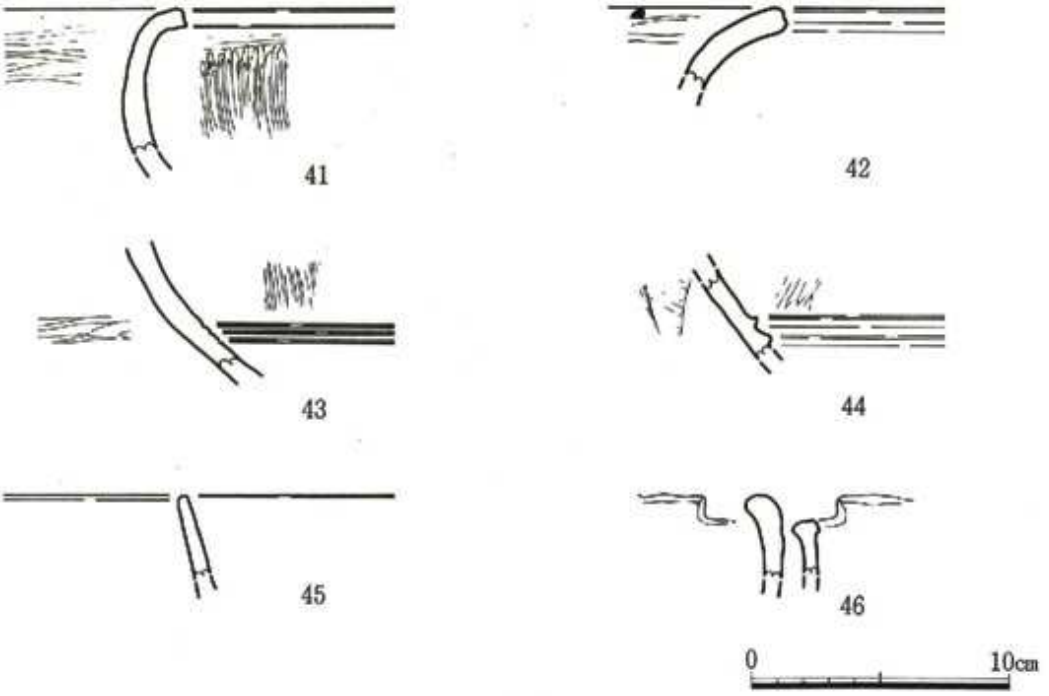
50は，土師器のフライパンで，その把手部分である。把手部分はヘラナデ調整が施され，フライパンの内面部はミガキが施されている。

土師器フライパンは，近世以降に見られるもので，鹿児島市大竜遺跡などでも発見されている。

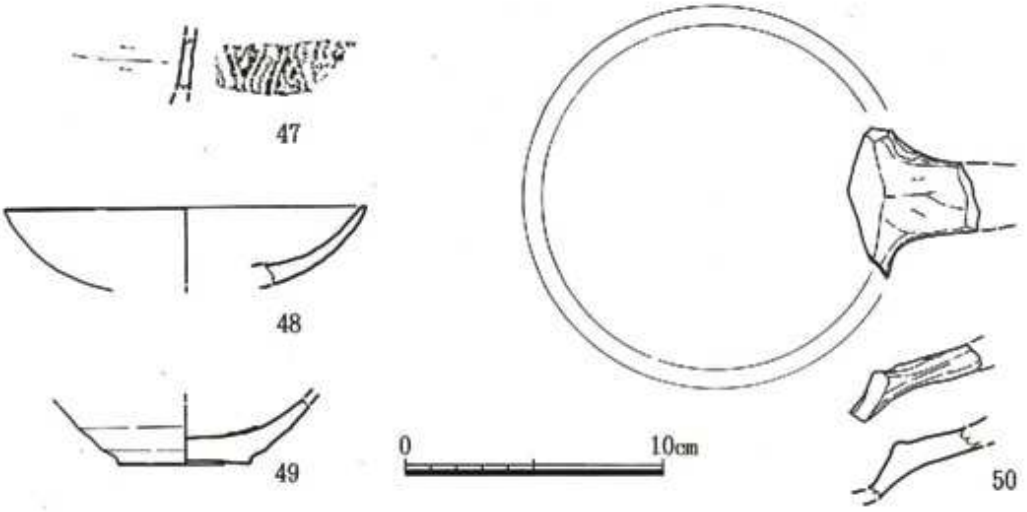
（文責　下山）



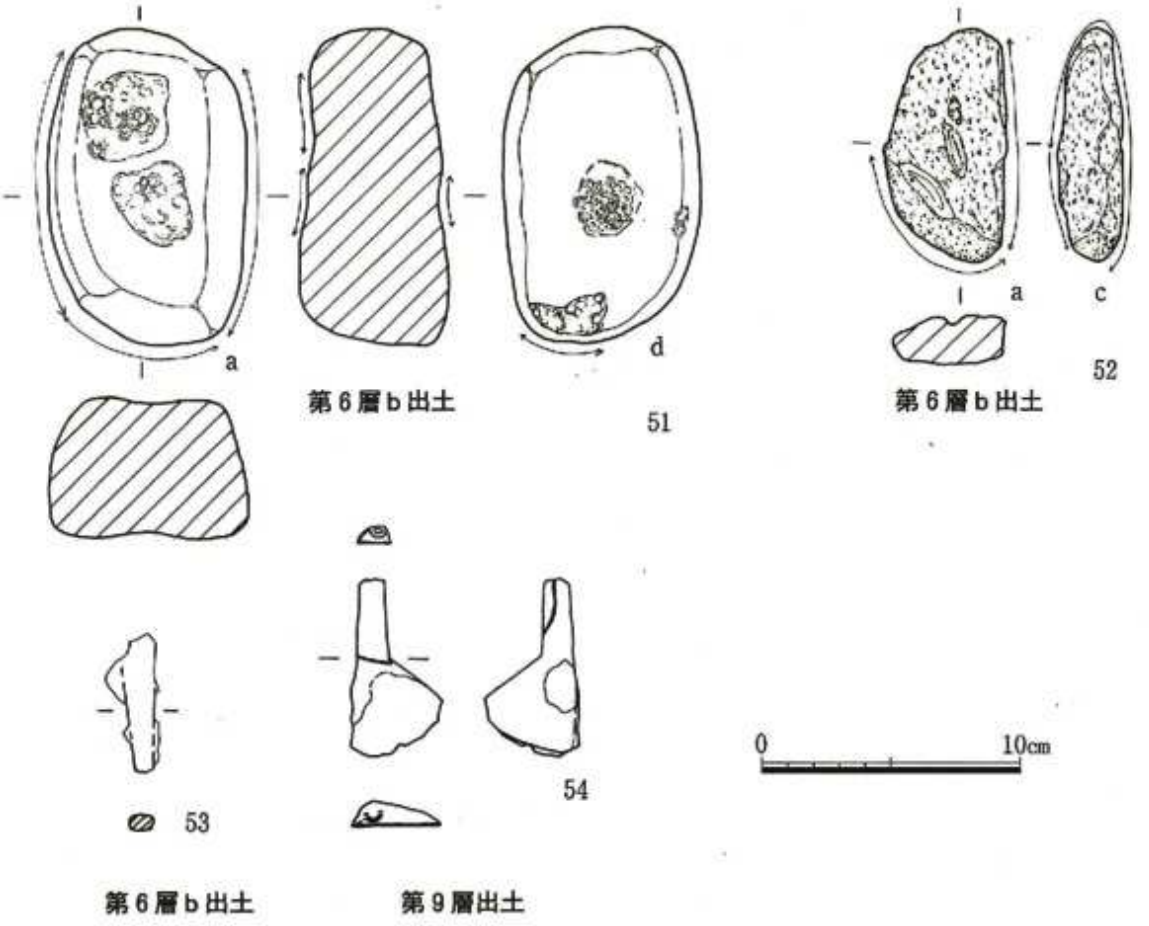
第33図　2トレンチ第10層出土遺物実測図②(S=1／3)



第34図　2トレンチ第10層出土遺物実測図③(S=1／3)



第35図　2トレンチ撹乱層出土遺物実測図



第36図　2トレンチ出土石器，及び鉄器実測図(S＝1／3)

鉄器（第35図）

53は断面楕円形を呈する刃子の基部と考えられる。

54は，器種は不明であるが断面よりその製作工程の一部が鑑みれる。素材板を2㎜ぐらいの棒状のものに一度巻き付け，それを断面D字状に包状に折りたたんでいる。幅広がる部分の用途は不明である。

軽石加工品（第35図）

52は，石鹸の泡状に発砲が発達した扁平な軽石の周辺全面に磨面が認められ，全面が平坦面となっている。a面には二条の凹面が認められる。軽石の用途・機能については不明である。

礫器（第35図）

51は，直方体の安山岩系を素材とした凹石である。敲打面である凹面はa面とd面に認められる。短軸の頂点部分には，敲打痕が認められることから，この石器は凹石と敲石を並用して使用したと考えられよう。

石器（第36図）

55は，磨製石器の破損片である。断面端部の形態がD字形を呈していることから，磨製石器自体の端部と考えられる。b面の観察より，この破片が剥落する以前に同一方向からの打撃（▲）が2度あったことが伺え，3度目の強い打撃により剥落していると推測出来る。a面下端部には刃部の

調整痕の稜線が認められ，特にその部位の研磨は他の部分に比べて著しいことから，磨製石器の刃部と考えられよう。磨製石器自体の器種は不明である。

56は，1.5cm程の厚さの剥片を素材とした石器である。d面は素材剥片の主要剥離面であるが，打瘤はさほど発達していない。a面の上端部には頭部調整痕平坦剥離（●）が確認でき，上端縁には微細な使用痕が認められる。下方（打面と180度逆）からの平坦剥離（●）がa面に5枚，d面・c面にそれぞれ1枚ずつ確認されるが，これは素材剥片の剥離以前のものではなく使用による剥落と考えられる。c面に残されいている使用による平坦剥離の剥落によって，a面右側部が一部欠損しており，使用痕と剥離の切り合いから鑑みると，この剥落（欠損）にもかかわらず引き継ぎ使用していることが伺える。

上下端部短軸縁辺に使用による平坦剥離（剥落）と使用痕が認められることや，形態的なことから縄文時代の石器組成の一種である「くさび形石器」に類似しており，用途・機能も同様であると推測出来るが，「くさび形石器」が弥生時代まで残るのか検討が必要である。

57は，頁岩岩製を素材とした不定形剥片である。全体の剥離痕の状況から以下のようなことが考えられる。まずf面側からc面に認められる剥片の剥離後a面中央に認められる剥片の剥離する。そして，打面を90度半時計まわりに移動し，前段階で剥離した剥片の下端部稜線を取り込みながら長さ25cm程の剥片（●）を剥離している。その後，打点を左に移動しながら頭部調整を施しているが剥片の剥離まではいたっていない。その後再び打点を元の位置に戻し，頭部調整を入念に施し，当剥片を剥離している。

d面の観察によると，f面側からの剥離と小剥離痕（使用痕か？）が認められることから，この剥片は何らかの道具として使用した可能性が高い。

58は，砂岩系の剥片である。ポジ面の観察によると，打瘤裂痕が異常に発達しており，本来の主要剥離面は，若干しか残在していない。（網）このことから，剥片下端部が欠損している剥離の際に剥落したものと考えられよう。a面・d面の剥離痕の状況から，打面を頻繁に転移しながら，剥離作業が進行する剥離技術が伺えられるが，a面の剥離痕は全て打点が遠く荒割り状であることから，ある統一性の剥離技術ではなく，ランダムに剥離が行われたと考えられる。d面の縁辺には2次加工が認められることから，何らかの道具として使用したことも考えられよう。

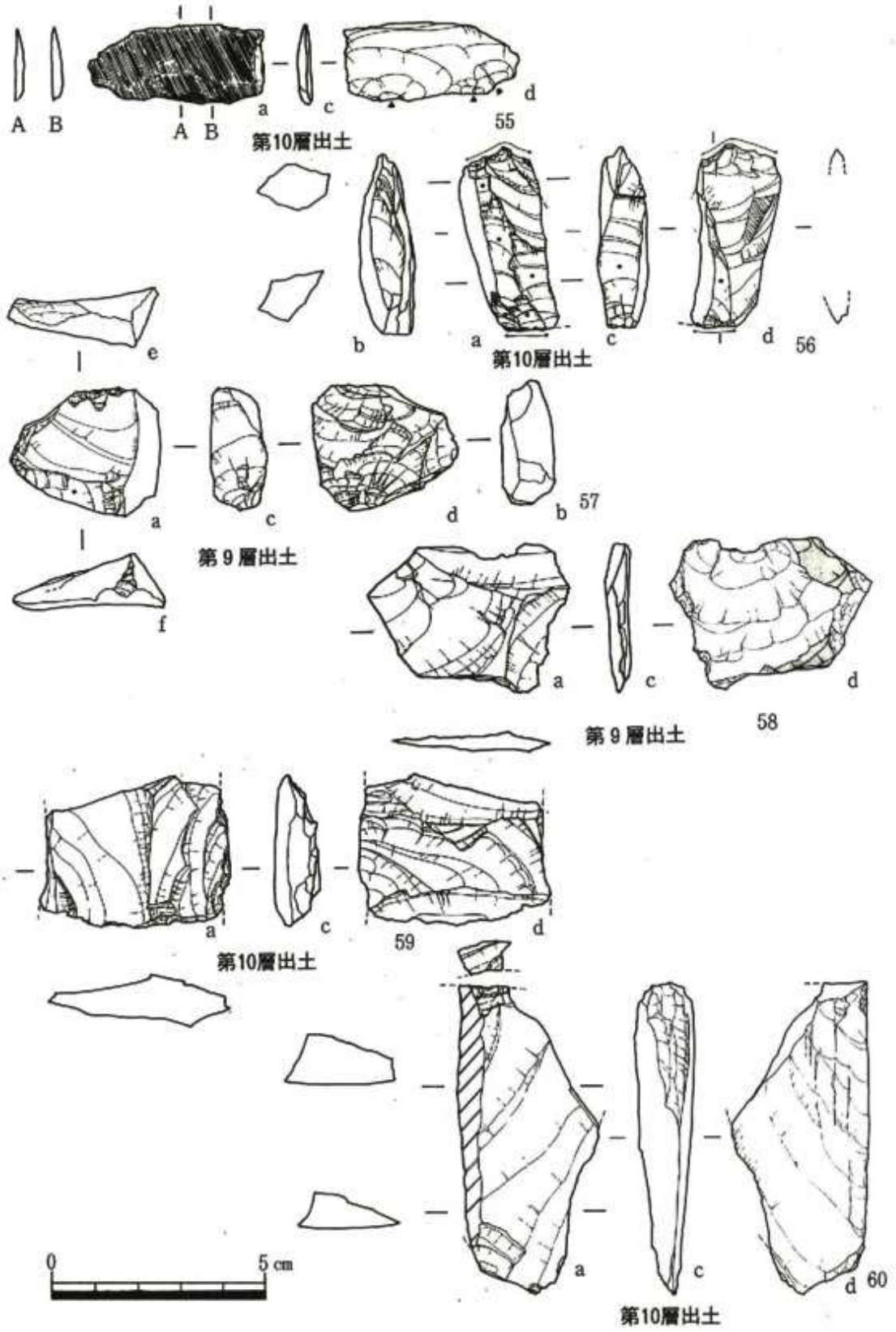
59は，扁平打製石斧の一部である。刃部・基部の部位の方向は不明であるが，両部とも欠落しており，使用による欠損と考えられよう。a面・d面の調整の状況から，石斧整形の調整は比較的荒く，打点の方向も遠く荒調整の段階のものに若干，周辺調整を施しただけにすぎないようであり，d面には打製石斧の素材段階の主要剥離面が認められる。a面に認められる調整痕の大部分は段階状剥離になっており，平面調整は粗である。

60は，粘板岩を素材とした不定形剥片である。a面左側面には節理面が認められ，この部分は剥片の剥離の際かもしくは，剥離後に節理に従い剥落している。同面右側面上部はa面側からの打撃（カ）により折れているようである。よって，石核から剥離直後の本来の剥片形状は比較的幅広であり，打面幅も広かったものと考えられよう。

剥片の剥離痕や打面部の状況等から推測される剥片剥離技術は以下のようである。

剥片剥離作業面側から作出された単一打面の石核から，頭部調整を入念に施し幅広の不定形剥片を剥離する剥離技術であり，石核の剥片剥離作業面長は最低でも7.4mを測り，比較的大きめな石核であったことが伺える。

※なお，文章中の（▲）印は，打撃方向を表し，（●）印は，石器実測図中の石器剥離面上に示してある。



第37図　2トレンチ出土石器実測図(S=2／3)

表－9

図番	原上%	残存法量	器種	部位	色 ㊥	㊥	㊥	㊥	胎土粒	混和材	調整	その他	出土状況	接合関係
1	37	破片	甕形土器	口縁部	2.5YR6/2 10YR3/1 5Y6/3	5YR6/2 7.5YR4/1	5Y7/4	－	細砂粒を含む	㊥㊦ 微	㊥ナデのち ミガキ ㊥工具によるナデのち ミガキ ㊦㊥ ミガキ ㊥工具によるナデのち ミガキ	傾きギモン	6	
2	14	破片	甕形土器	口縁部	7.5YR6/4	2.5YR6/6	7.5YR6/4	－	細砂粒を含む	㊥㊦ 微	㊥ナデのち ミガキ ㊥ナデのち ミガキ ㊦㊥ ヨコナデ ㊥ユビオサエのち ナデ	傾きギモン	6	
3	3	破片	甕形土器	胴部 突帯部	5YR4/1 2.5Y7/4	7.5YR4/3 2.5YR6/4	2.5Y7/4	－	細砂粒を若干含む	㊥㊦ 微	㊥ミガキ? ㊥カーボン多量付着 ㊥ユビオサエ	傾き不明	6	
4	6	破片	甕形土器	底部	2.5Y4/1 10YR6/4	7.5YR6/4	10YR3/1 7.5YR6/3	－	細砂粒を含む	㊦㊥ 微	㊥工具によるナデのち ナデ ㊥工具によるナデのち ナデ	傾き若干ギモン	6	8
5	12	破片	高杯形or鉢形土器	口縁部	7.5YR4/2	7.5YR6/6	7.5YR6/6	－	細砂粒を若干含む	㊦㊥ 微	㊥ミガキ?ややマメツ ㊥ 〃 ㊦㊥ 〃	傾きギモン	6	
6	34	㊥ ½～½残存 ㊥(復元) 9.5cm	須恵器坏	底部	N3/0 10BG5/1	5B5/1	5R4/1	㊥㊥ 7.5GY5/1	小レキを微量含む 微砂粒を若干含む	㊦	㊥ナデ ㊥回転ナデ自然釉 ㊥回転ナデ ㊥㊥ 回転ナデ	器肉は完分還元されず暗赤褐色 反転	6	40
7	35	破片	須恵器坏	口縁部	N3/0 7.5Y5/1	5GY6/1	5R4/1	－	砂粒を微量含む 微砂粒を若干含む	㊦	㊥回転ナデ ㊥回転ナデ ㊦㊥ 回転ナデ	傾き若干ギモン	6	
8	23	破片	壺形土器	口縁部	10R5/6 7.5YR6/4	10R5/4	10YR6/4	－	細砂粒を含む	㊥㊦ 微	㊥ミガキ ㊥ナデのち ミガキ ㊦㊥ ミガキ	傾き若干ギモン	8	
9	22	破片	壺形土器	胴部 突帯部	5YR6/4 10YR5/2	10R6/6	5YR5/4	－	細砂粒を含む	㊥㊦ ㊥ 微	㊥ミガキ ㊥ミガキのち 沈線 ややマメツ	傾きギモン	8	
10	32	破片	浅鉢形土器 (縄文晩期)	口縁部	2.5Y4/1	2.5Y4/1	7.5YR7/6	－	微砂粒を若干含む	㊥ 微	㊥黒色研磨ややマメツ ㊥ 〃 ㊦㊥ 〃	傾き若干ギモン	8	
11	31	破片	鉢形or壺形土器	口縁部	2.5YR6/1 2.5Y7/4	2.5Y7/4	2.5Y7/4	－	細砂粒を若干含む	㊦ 微	㊥ナデ ㊥ナデ ㊦㊥ ヨコナデ	傾きギモン	9	
12	28	破片	壺形土器	胴部 突帯部	2.5YR6/4	5YR6/3	5YR6/3	－	細砂粒を含む	㊥㊦ 微	㊥工具によるナデ ㊥ミガキ ややマメツ ㊥ミガキ ややマメツ	傾きギモン	9	
13	71	破片	甕形土器	口縁部	2.5YR5/3	2.5YR6/3	5YR7/4	－	細砂粒を含む	㊥㊦ 微	㊥ナデ ㊥ナデ ㊦㊥ ヨコナデ ㊥ユビオサエ	傾きギモン	9	
14	81	破片	甕形土器	胴部 突帯部	10R4/2 5YR5/2	10R4/2 7.5YR7/4	10YR7/4	－	細砂粒を含む	㊦㊥ ㊥ 微	㊥ナデ ㊥ナデ、ハケメ ㊥ヨコナデ	傾きギモン ハケメ8本／cm	9	
15	58	破片	甕形土器	胴部 突帯部	2.5YR4/2 5YR5/4	2.5YR7/6 2.5YR3/2	10YR7/4	－	細砂粒を若干含む	㊥㊦ 微	㊥ナデ ㊥ナデ、カーボン付着 ㊥ヨコナデ	傾きギモン	9	
16	73	破片	甕形土器 (弥生時代)	胴部 突帯部	2.5YR6/6 10R2/1	2.5YR6/4 10YR7/4	5YR6/6	－	細砂粒を若干含む	㊥㊦ ㊥ 微	㊥ナデ ㊥ナデ ㊥ヨコナデのち ヘラ状具でキザミ	傾き若干ギモン	9	
17	43	破片	壺形土器	胴部 突帯部	2.5YR6/6	2.5YR6/6	2.5YR6/6	－	細砂粒を含む	㊥㊦ ㊥ 微	㊥マメツ ㊥ヨコナデ ㊥ヨコナデ	傾きギモン	9	
18	67	破片	壺形土器	底部	5YR6/4 7.5YR6/2	7.5YR6/6	2.5Y5/2	㊥ 7.5YR5/5	細砂粒を含む	㊦㊥ 微	㊥ナデ ㊥ナデ ㊥ナデ	－	9	
19	42	破片	須恵器把手付高坏	破片	N6/0	N6/9	N6/0	－	微砂粒を若干含む	－	㊥回転ナデ ㊥回転ナデ	傾き若干ギモン	9	
20	一般	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	10R3/1	7.5YR6/3	10YR7/4	㊦㊥ 10YR5/2 2.5YR5/4	微砂粒を若干含む	㊥ 微	㊥ナデ ㊥ナデ ㊦㊥ ヨコナデ	－	9	

表—10

図番	取上No	残存法量	器種	部位	色 ㊥	㊦	㊧	㊨	胎土粒	焼成	調整	その他	出土状況	接合関係
21	一般	破片	甕形土器	頸部 突帯部	7.5YR6/4 10YR4/2	5YR5/4 7.5YR6/4	5YR6/4	－	細砂粒を含む	㊥ ㊦ 極	㊥ナデ ㊦ナデ? ㊨マメツ	傾き上下ギモン	9	
22	149	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	5YR5/3 7.5YR3/2	7.5YR6/4 7.5YR5/2	7.5YR6/4	－	細砂粒を含む	㊦ ㊨ 極	㊥ナデ ㊦ナデ 口㊨ヨコナデ	傾き若干ギモン	10	
23	130	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	7.5YR7/4 5YR3/2	7.5YR7/4	7.5YR7/4 5YR4/2	－	細砂粒を含む	㊥ ㊦ 極	㊥ナデ，ヨコナデ ㊦ナデ 口㊨ヨコナデ	傾き若干ギモン	10	
24	119	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	7.5YR7/6 7.5YR3/2	7.5YR7/6	7.5YR7/6	－	細砂粒を含む	㊥ ㊦ ㊨ 極	㊥ナデ ㊦ハケメのちナデ 口㊨ヨコナデのち棒状具でキザミ	傾き若干ギモン	10	
25	30	破片	甕形土器	口縁部	10YR6/3 7.5YR7/4	7.5YR7/4 5YR5/6	10YR7/4 5YR3/2	－	細砂粒を含む	㊦ 極	㊥ナデ ㊦ナデ 口㊨ヨコナデ，ヨコナデのちキザミ	傾き若干ギモン	10	
26	107	破片	甕形土器	口縁部	5YR6/6 7.5YR4/2	5YR6/6 7.5YR4/2	5YR5/6 7.5YR4/2	－	細砂粒を含む	㊥ ㊦ ㊨ 極	㊥ナデ ㊦ハケメ 口㊨ヨコナデのち棒状具でキザミ	傾き若干ギモン	10	
27	94	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	5YR6/6	5YR7/6	5YR7/6 7.5YR5/2	－	細砂粒を含む	㊥ ㊦ 極	㊥ナデ ㊦ナデ 口㊨ヨコナデのちヘラ状具でキザミ	傾き若干ギモン	10	
28	141	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	10YR7/6 7.5YR5/4	10YR7/6 5YR4/3	10YR7/6 7.5YR4/1	－	細砂粒を若干含む	㊥ ㊦ ㊨ 極	㊥ユビオサエのちナデ ㊦ナデ 口㊨ヨコナデ，棒状具によるキザミ	傾き若干ギモン	10	
29	109	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	7.5YR6/6 5YR5/2	7.5YR6/6 5YR5/2	10YR6/4	－	細砂粒を含む	㊥ ㊦ ㊨ 極	㊥ナデ，ヨコナデ ㊦ナデ，ヨコナデ 口㊨ヨコナデのちヘラ状工具でキザミ，ヨコナデ	傾き若干ギモン	10	
30	51	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	10YR7/6 7.5YR5/2	10YR7/4 10YR7/6	10YR7/4 10YR6/2	－	細砂粒を若干含む	㊥ ㊦ ㊨ 極	㊥ユビオサエのちナデ ㊦ナデ 口㊨ヨコナデ	傾き若干ギモン	10	
31	88	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	7.5YR6/6 5YR3/2	7.5YR6/6 5YR3/2	7.5YR7/4	－	細砂粒を含む	㊦ ㊨ 極	㊥ユビオサエ，ナデ ㊦工字状突帯のちキザミ 口㊨ヨコナデ，ヘラ状具によるキザミ	傾き若干ギモン 工字状突帯あり東九州系?	10	
32	52	破片	甕形土器 (弥生時代)	頸部 突帯部	10YR6/4 10YR4/3	10YR6/6 10YR4/3	10YR6/6 10YR4/3	－	細砂粒を若干含む	㊥ ㊦ ㊨ 極	㊥ナデ ㊦ナデ，ハケメ ㊨ヨコナデ	傾きギモン	10	
33	111	破片	甕形土器	頸部 突帯部	10YR3/2 7.5YR4/2	7.5YR5/4 7.5YR4/2	7.5YR5/4	－	細砂粒を含む	㊥ ㊦ ㊨ 極	㊥ナデ ㊦ハケメ ㊨ヨコナデ	傾き若干ギモン ハケメ7本／cm	10	
34	106	破片	甕形土器	頸部 突帯部	7.5YR4/2 10YR6/4	10YR7/3	10YR7/4 10YR6/2	－	細砂粒を含む	㊥ ㊦ 極	㊥ナデ ㊦ナデ ㊨ヨコナデ	傾き若干ギモン	10	124
35	84	破片	甕形土器	頸部 突帯部	2.5Y6/6 10YR7/4	10YR7/4 7.5YR4/3	10YR4/1 10YR7/4	－	細砂粒を若干含む	㊦ ㊨ 極	㊥ナデ ㊦ヨコナデ ㊨ヨコナデ	傾きギモン	10	
36	134	破片	甕形土器 (弥生時代)	頸部 突帯部	10YR7/4 10YR4/2	10YR7/4 7.5YR4/2	10YR7/4	－	細砂粒を若干含む	㊥ ㊦ ㊨ 極	㊥ナデ ㊦ナデ ㊨ヨコナデのちヘラ状具でキザミ	傾き若干ギモン	10	
37	48	破片	甕形土器 (弥生時代)	底部	10YR7/4 7.5YR7/6 7.5YR5/2	10YR3/2 10YR6/3 7.5YR5/2	10YR7/6 7.5YR5/2	㊨ 10YR7/4 10YR5/2	砂粒を含む	㊥ ㊦ ㊨ 極	㊥ナデ ㊦ハケメのちナデ ㊨無調整	ハケメ 6本／cm 反転	10	
38	140	破片	甕形土器 (弥生時代)	底部	5YR5/4 5YR4/3 7.5YR5/2	7.5YR6/6 5YR4/2	10YR7/4 7.5YR4/2	㊨ 7.5YR4/2 10YR4/1	砂粒を含む	㊦ ㊨ ㊨ 極	㊥ナデ ㊦ナデ ㊨ナデ	－	10	
39	57	1/4残存 ㊨7.8cm (復元)	壺形土器 or 甕形土器	底部	10YR7/6 7.5YR5/3	7.5YR7/6 5YR3/2	10YR4/1 10YR7/4	㊨ 10YR6/2 10YR7/6	細砂粒を含む	㊥ ㊦ 極	㊥ナデ ㊦ナデ ㊨ナデのち一部ミガキ	反転	10	
40	132	破片	甕形土器 (弥生時代)	底部	10YR7/4 7.5YR6/6	－	7.5YR6/3 7.5YR4/1	断ク 7.5YR3/1 10YR5/3	細砂粒を含む	㊥ ㊦ 極	㊥ナデ ㊦ナデ ㊨ナデ	－	10	

表—11

図番	取上No.	残存法量	器種	部位	色㊥	㊦	㊧	㊨	胎土粒	混和材	調整	その他	出土状況	接合関係
41	76	破片	壺形土器	口縁部	5YR5/4 2.5YR3/1	5YR5/4 2.5YR3/1	10YR6/3	−	細砂粒を含む	㊥㊨㊧	㊥ミガキ ㊦ミガキ ㊨㊧ヨコナデ	傾き若干ギモン	10	
42	121	破片	壺形土器 (弥生時代)	口縁部	7.5YR6/6 10YR6/4	7.5YR6/6	10YR7/4 7.5YR4/1	−	細砂粒を含む	㊥㊧㊨㊧	㊥ミガキややマメツ ㊦ナデ ㊨㊧ヨコナデ	傾き若干ギモン	10	
43	80	破片	壺形土器 (弥生時代)	胴部	2.5YR5/6 5YR5/4 2.5YR4/1	2.5YR3/1 2.5YR5/6	10YR5/3	−	細砂粒を含む	㊥㊧㊨㊧	㊥ミガキややマメツ ㊦ミガキややマメツ	傾き若干ギモン	10	83
44	29	破片	壺形土器	肩部 突帯部	7.5YR6/4 7.5YR4/1	7.5YR5/4	10YR7/4	−	細砂粒を含む	㊥㊧㊨	㊥工具によるナデ ㊦ミガキ ㊨ヨコナデ	傾きギモン	10	
45	126	破片	深鉢形土器 (縄文晩期)	口縁部	10YR4/2	10YR6/3 10YR4/2	10YR5/3	−	細砂粒を若干含む	㊥㊧㊨	㊥ナデ ㊦ナデ ㊨ナデ	傾きギモン	10	
46	143	破片	深鉢形土器 (縄文晩期)	口縁部	7.5YR5/4 7.5YR4/2	7.5YR4/3	7.5YR5/4 7.5YR4/2	−	細砂粒を若干含む	㊥㊨	㊥ナデ ㊦ナデ ㊨ナデ	傾きギモン	10	
47	一括	破片	土師質土器 (瓦器?)	−	10YR8/2 10YR5/2	10YR8/2 10YR5/2	10YR8/2 10YR5/2	−	微砂粒を若干含む		㊥工具によるナデ ㊦スタンプ文	傾き不明	−	
48	*	㊥ 1/2～1/3残 ㊦13.8cm (復元)	陶器底	−	10Y6/1 7.5Y7/2	10Y6/1	10Y6/1 2.5Y7/4	−	陶体は黒色微砂粒を含む		㊥無釉，施釉 ㊦施釉 ㊨㊧施釉	内面見込み部は無釉，㊥㊦ ともに灰色釉，反転	−	
49	*	㊥1/3残 ㊦5.1cm (復元)	陶器底	−	2.5Y7/3	5Y4/3	2.5Y5/2 10YR7/4	㊧ 10YR6/3	陶体は白色粒を含む		㊥施釉，目あと ㊦回転ヘラケズリ ㊧回転糸切り	内面暗緑色の施釉，外面は無釉，反転	−	
50	*	破片	フライパン形土師器	−	2.5Y8/4 2.5Y6/2	2.5Y8/4 2.5Y6/2	2.5Y8/4 2.5Y6/2	−	微砂粒を含む	㊥㊨	㊥ヨコナデ，ナデ ㊦工具によるナデ，ユビオサエ	傾き若干ギモン	−	
51	39	完全形 ㊥12.2cm ㊦7.6cm ㊨5.8cm ㊧10g	凹石						石材 安山岩?			側面に凹面有	6	
52	4	完全形 ㊥9.1cm ㊦4.8cm ㊨2.5cm ㊧10g	軽石加工品						石材 軽石			側面に凹面有	6	
53	41	一部残存 ㊥長5.3cm ㊦幅1.6cm ㊨厚0.7cm	刀子	茎部									6層b	
54	一括	一部残存 ㊥長6.8cm ㊦幅3.5cm ㊨厚1cm	不明	*										
55	93	一部残存 ㊥長4.2cm ㊦幅1.9cm ㊨厚0.3cm ㊧1g	磨製石斧						石材 粘板岩				10	
56	110	一部残存 ㊥4.4cm ㊦2.2cm ㊨1.3cm ㊧4g	クサビ形石器(?)						石材 頁岩				10	
57	一括	完全形 ㊥3.6cm ㊦3cm ㊨1.4cm ㊧5g	クサビ形石器(?)						石材 頁岩				9	
58	43	完全形 ㊥4.8cm ㊦3.6cm ㊨0.6cm ㊧2g	剥片						石材 砂岩				9	
59	56	一部残存 ㊥長4.6cm ㊦幅3.6cm ㊨厚1.3cm ㊧重5g	偏平打製石斧						石材 頁岩				10	
60	123	一部残存 ㊥7.4cm ㊦3.4cm ㊨1.4cm ㊧12g	剥片						石材 粘板岩				10	

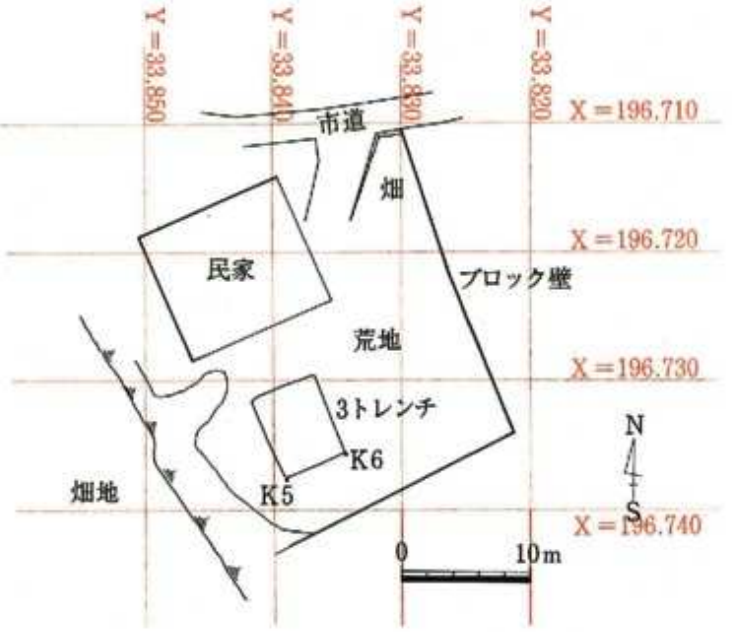
第3節　3トレンチの調査

国指定史跡の西約230mの山裾に近い地点に5×6mのトレンチを設定した。本トレンチからは，中・近世墓，及び古墳時代の竪穴式住居跡1基を検出した。

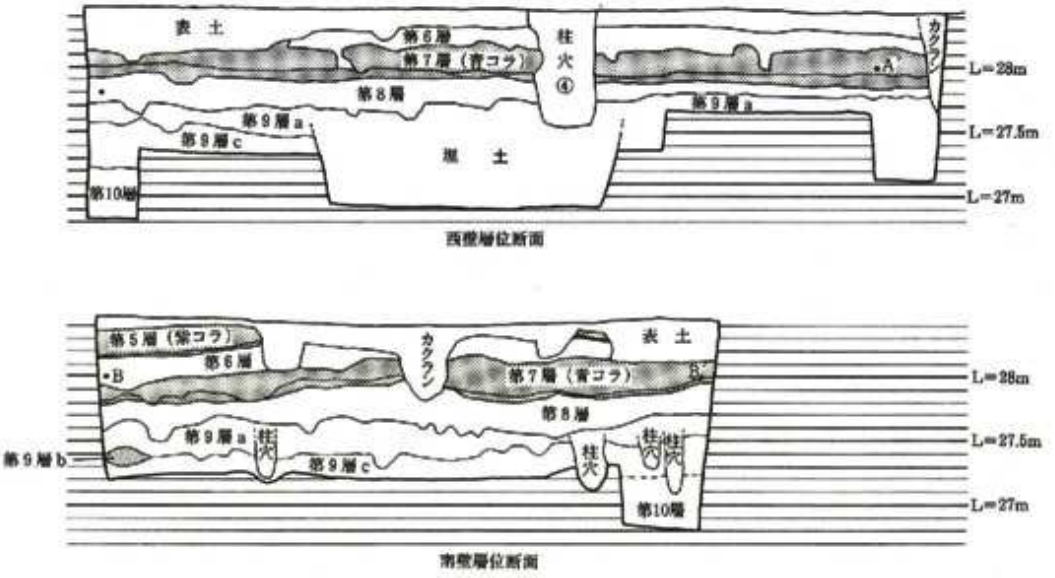
(1) 層　　位

第1層，第5層，第6層，第7層，第8層，第9層a，b，c，第10層を確認した。

表層の第1層を数cm下げると紫コラが現れ，一部は攪乱によってすでに失われている。第6層もその上面は削平を受けている。第7層は，5～20cm前後の堆積で，その上面は後世の樹根等の侵入により攪乱が見られる。第8層は土石流堆積物であるが下層との不整合が著しい。第9層は2トレンチと同じく，a，b，cの3層に細分が可能であった。また，第9層aからは，竪穴式住居や柱穴が掘り込まれている。第10層を先行トレンチにおいて検出した。30cm前後の厚さで堆積しており，第9層に比べ粘性が高い。



第38図　3トレンチ位置図(S=1／600)

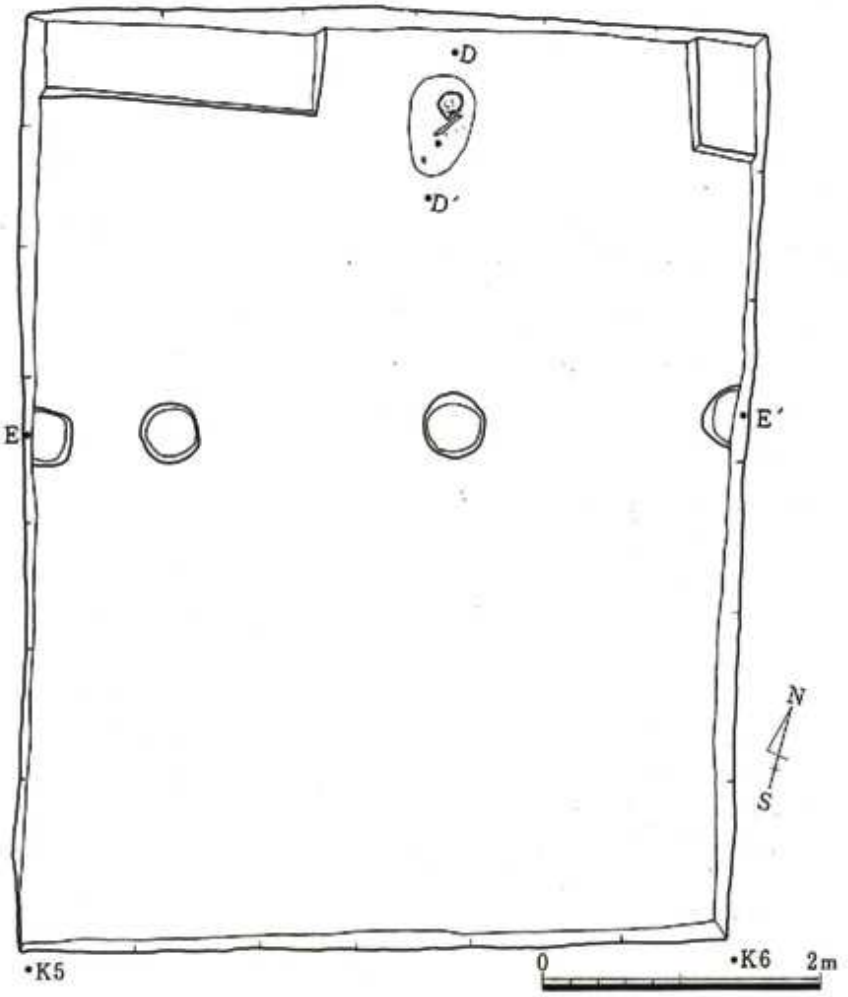


第39図　3トレンチ層位断面図(S=1／60)

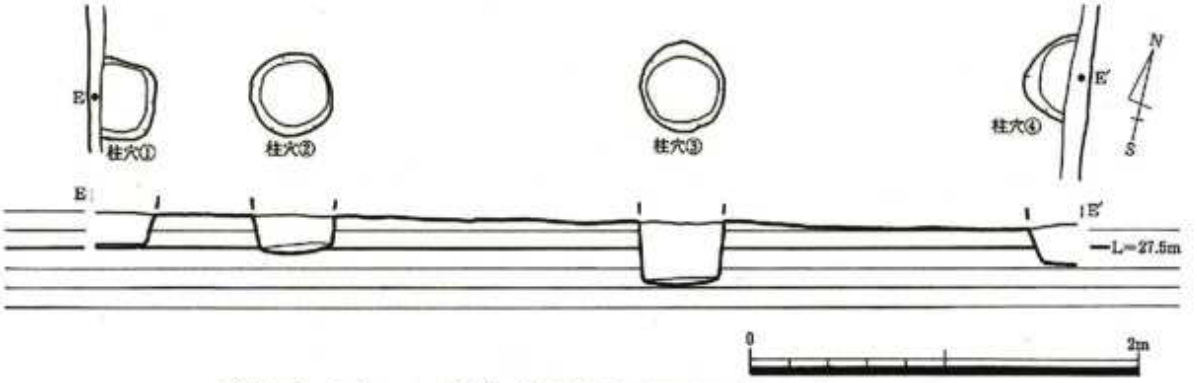
(2) 遺　構

A．柱穴及び墓（中～近世）

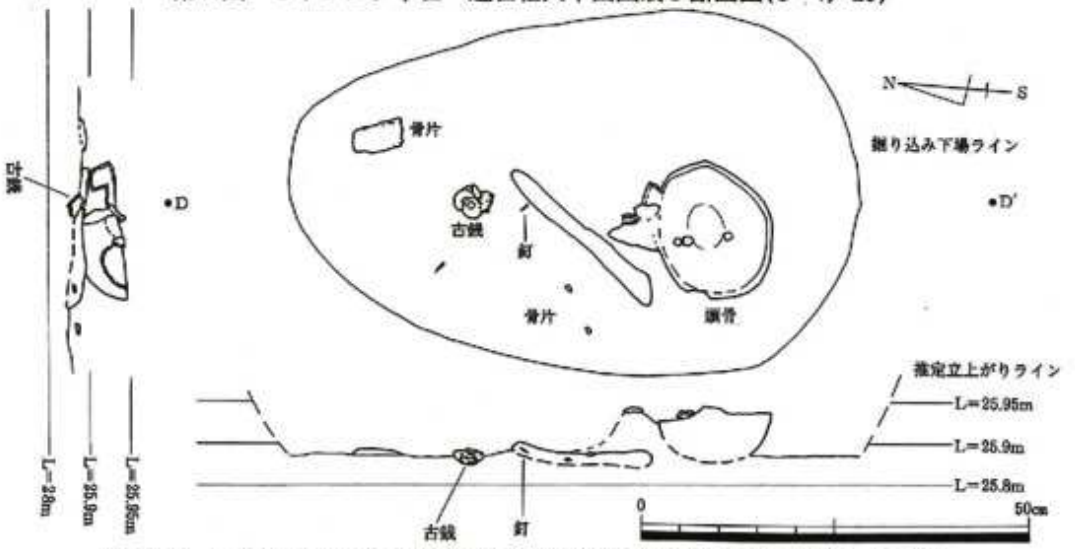
第８層上面において，中世～近世のいずれかの時期に属すると思われる柱穴と墓を検出した。柱穴は，直径20cm前後の円形のもので，ほぼ東西方向に並ぶ。柱穴の大きさ，深さともに類似していることから，一連の建築物に伴う遺構と考えられる。また，柱穴の北側から，中～近世墓を検出した。本調査地点は，かつてみかん畑であったため，その樹木があった部分は，不整形な楕円状の攪乱が見られたが，当初，墓のあった地点も，そうした攪乱と誤認していたため，骨が出土した段階で，墓壙との認識に至った。第８層において掘り込みの下場ラインを確認できた。長径73cm，短径47cmの，卵形を呈し，主軸を南北方向にもつ。また，掘り込みの上場を現地表面と推定すれば，墓壙の深さは約70cm前後となる。墓坑の床面付近からは人骨や釘が出土した他，古銭が埋納されていた。古銭は，数枚が重なった状況で出土した。腐植が激しく，正確な枚数を確認できなかったものの，そのうちの一枚については，レントゲン撮影の結果，「洪武通宝」の可能性があることがわかった。洪武通宝は明銭で代表的な輸入銭の１つであるが，中世～近世において，日本でも多く鋳造され，必ずしも時期を特定できないが，初鋳年は，1368年である。



第40図　３トレンチ中世～近世柱穴及び墓検出状況図(S=1／50)



第41図　3トレンチ中世～近世柱穴平面図及び断面図(S=1／20)



第42図　3トレンチ中世～近世墓人骨出土状況平面図及び断面図(S=1／10)

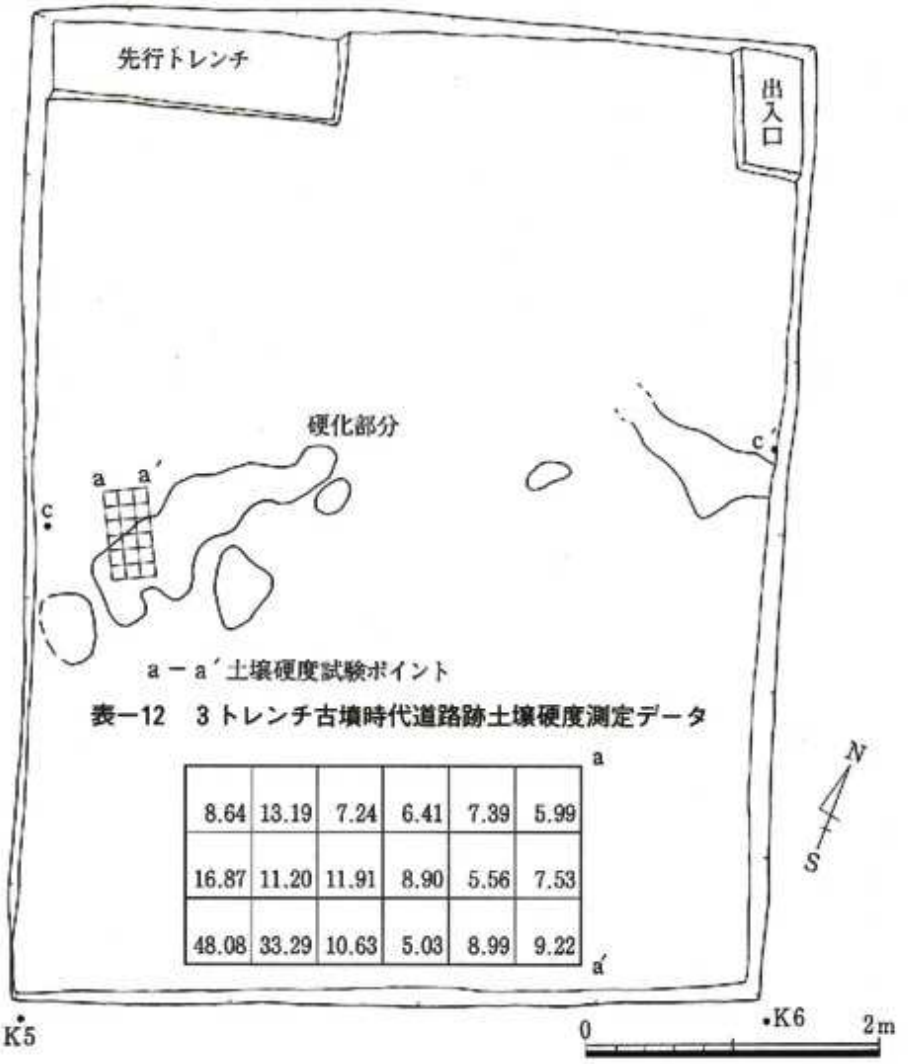
また，釘が出土していることから，棺桶があった可能性も考えられるが，木片等の遺物の出土は見られなかった。人骨については，鹿児島大学歯学部の小片丘彦教授，峰和治助手，竹中正巳助手に取り上げと鑑定を依頼し，玉稿を賜った。詳細については付篇を参照されたい。

①は，今回出土した古銭
②は，指宿市中島ノ下遺跡より出土した古銭

第43図　3トレンチ古銭実測図(S=1／1)とレントゲン写真

B．道路跡（古墳時代）

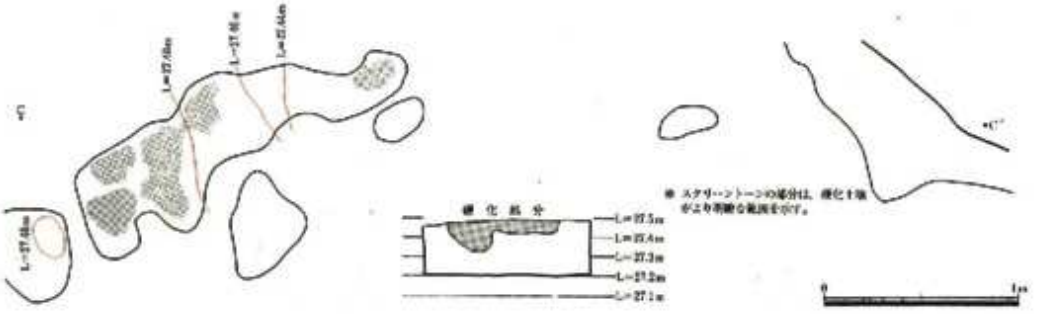
第９層ａ中で，ほぼ東西方向に伸びる帯状に連続する硬化面を検出し，道路跡を認定した。図中スクリントーンの部分は，明瞭に硬化部分が認識できた範囲である。また，断面から，硬化部分の厚さが，10～15cm前後あることがわかった。小礫や砂粒を用いて路面を舗装した形跡が見られないことから，往来のうちに踏み固まっていったものと思われる。硬化面の硬さを把握するために土壌



表－12　３トレンチ古墳時代道路跡土壌硬度測定データ

8.64	13.19	7.24	6.41	7.39	5.99
16.87	11.20	11.91	8.90	5.56	7.53
48.08	33.29	10.63	5.03	8.99	9.22

第44図　３トレンチ古墳時代道路跡検出状況図(S＝1／50)



第45図　３トレンチ古墳時代道路跡平面図及び断面図(S＝1／40)

硬度測定を行った。その結果，硬化面の平均支持強度は，15.9kg／㎠で，非硬化部分の平均支持強度は，7.29kg／㎠の値を得，硬化部分は，非硬化部分に比べ約２倍硬いことが判明した。

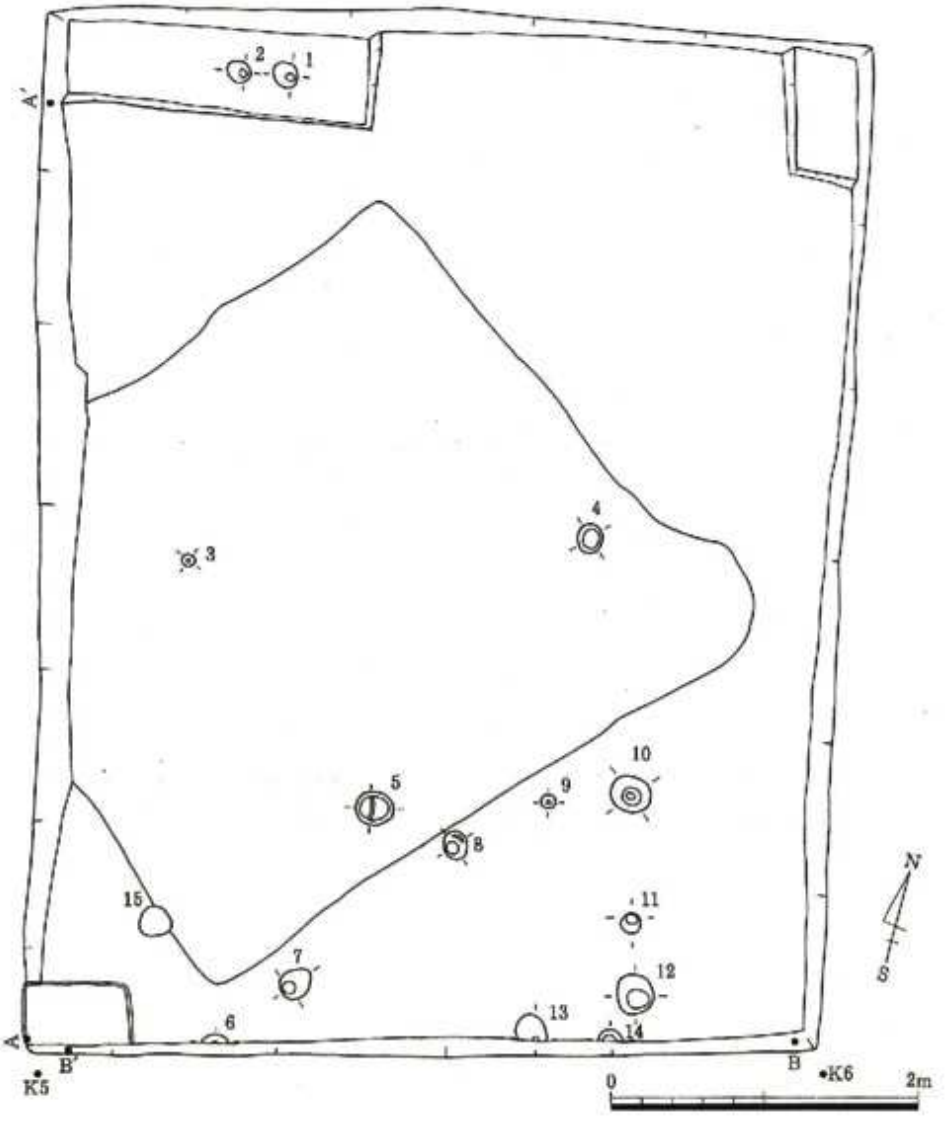
C．柱穴群（古墳時代）

第９層ｃ上面で，竪穴式住居跡の外形とともに，柱穴群を検出した。このうち，３，４，５，15については，住居埋没後の時期と考えられるが，その他については，住居に伴う可能性もある。

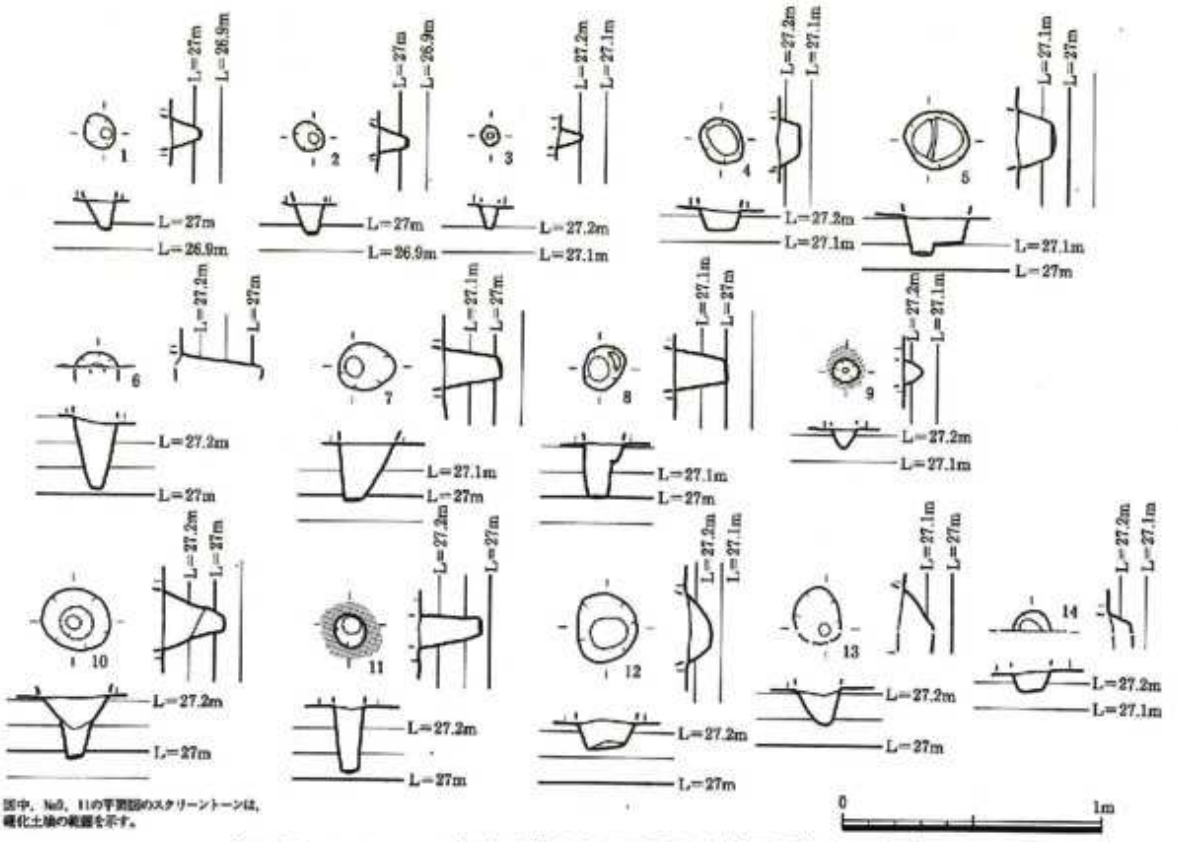
ここでは，住居跡の床面でとらえた柱穴と区別するために下図の柱穴についてまとめて取り上げることにしたい。個々の詳細については，表－13にまとめた通りである。

柱穴は，大別して２段掘りのものと素掘りのものとに分けられる。素掘りのものの中で，１，２，３，９などは，直径が10cm内外と小さい。また，９，11については柱穴の周辺の土壌が硬化していることから，柱を建てた後，根がためを施した可能性がある。

なお，15については，住居跡の壁を崩さぬよう平面のみの検出にとどめた。



第46図　３トレンチ古墳時代柱穴群検出状況図(S＝1／50)



第47図　3トレンチ古墳時代柱穴平面図及び断面図(S=1／30)

表－13

柱穴No.	上場径(cm)	下場径(cm)	深さ(cm)	柱穴No.	上場径(cm)	下場径(cm)	深さ(cm)
1	㊥1.5 ㊦1.25	㊥0.45 ㊦0.40	1.2	8	㊥1.85 ㊦1.5	㊥0.95 ㊦0.8	2.1
2	㊥1.3 ㊦1.1	㊥0.5 ㊦0.40	1.2	9	㊥1.1 ㊦0.9	㊥0.2 ㊦0.2	0.8
3	㊥0.8 ㊦0.7	㊥0.3 ㊦0.25	1.0	10	㊥2.75 ㊦2.35	㊥0.6 ㊦0.5	2.4
4	㊥1.95 ㊦1.55	㊥1.3 ㊦0.95	0.9	11	㊥1.4 ㊦1.2	㊥0.75 ㊦0.65	2.6
5	㊥2.5 ㊦2.3	㊥1.9 ㊦1.7	1.5	12	㊥2.7 ㊦2.3	㊥1.4 ㊦1.2	1.2
6	㊥1.8 ㊦	㊥0.6 ㊦	2.95	13	㊥2.3 ㊦1.4	㊥0.5 ㊦0.4	1.3
7	㊥2.2 ㊦1.85	㊥0.8 ㊦0.7	2.3	14	㊥1.5 ㊦	㊥0.8 ㊦	0.8

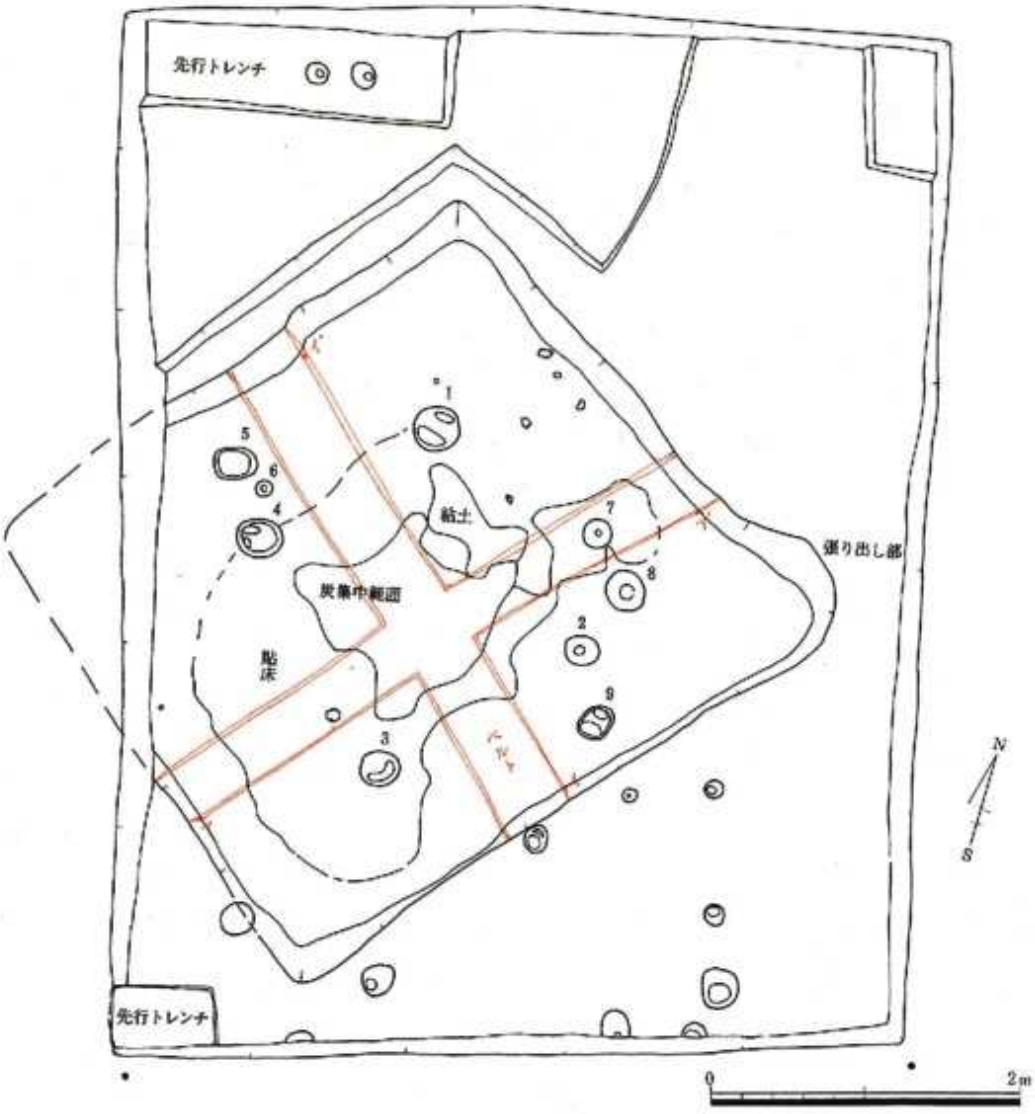
D．竪穴式住居跡（古墳時代）

第9層c上面で第9層aの中から掘り込まれた竪穴式住居跡を検出した。北東隅のコーナーに一部張り出し部分を持つ方形プランの住居跡で，一部トレンチ西壁に逃げている。

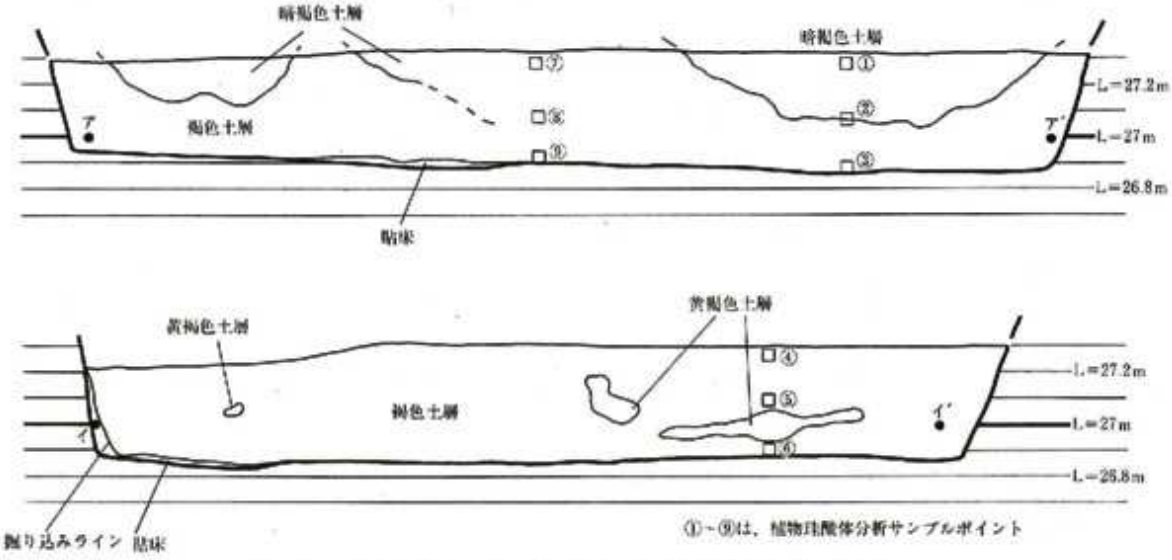
埋土は，色調の違いから2層に細分できるが，基本的には同一層である。ブロック状に黄褐色の土壌が混在する他，現生する樹木根の侵入も見受けられた。住居廃棄後の埋まり方等については，埋土の状況からは判然としない。なお，埋土中の土壌について植物珪酸体分析を行った。詳細については付篇を参照されたい。

住居跡は，北東－南西の1辺が4.3m，北西－南東の1辺が3.7mのやや長方形を呈する平面形で竪穴の深さは，おおむね60～70cmの範疇に納まるものと推測される。床面から8穴の柱穴が検出されたが，主柱穴は1，2，3，4で，四本柱の竪穴式住居と考えられる。この柱穴については後で詳述したい。

床面には，中央炉を取り囲むように貼床が見られた。貼床は硬化していたが，その硬さを把握するために，土壌硬度測定を行った。その結果，貼床部分の平均支持強度は，20.13kg／cm²で，非貼床部分の平均支持強度は，7.58kg／cm²の値を得た。



第48図　3トレンチ古墳時代1号住居跡検出状況図(S=1／50)

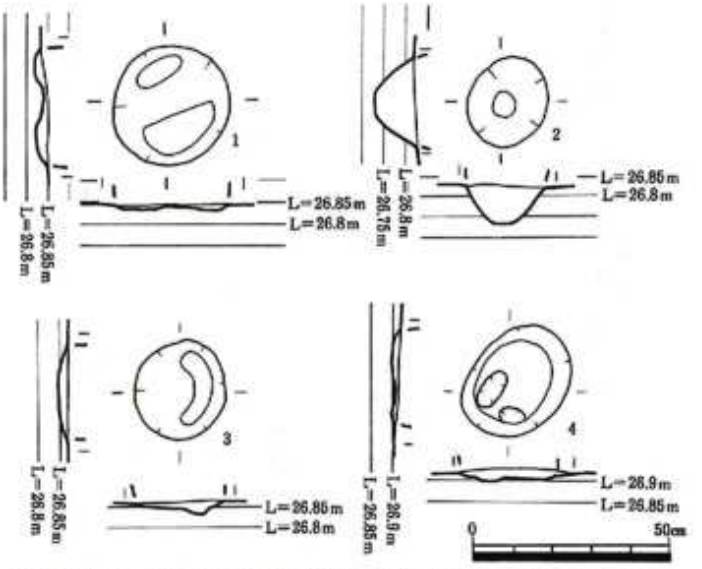


第49図　3トレンチ1号住居跡埋土層位断面図(S=1／30)

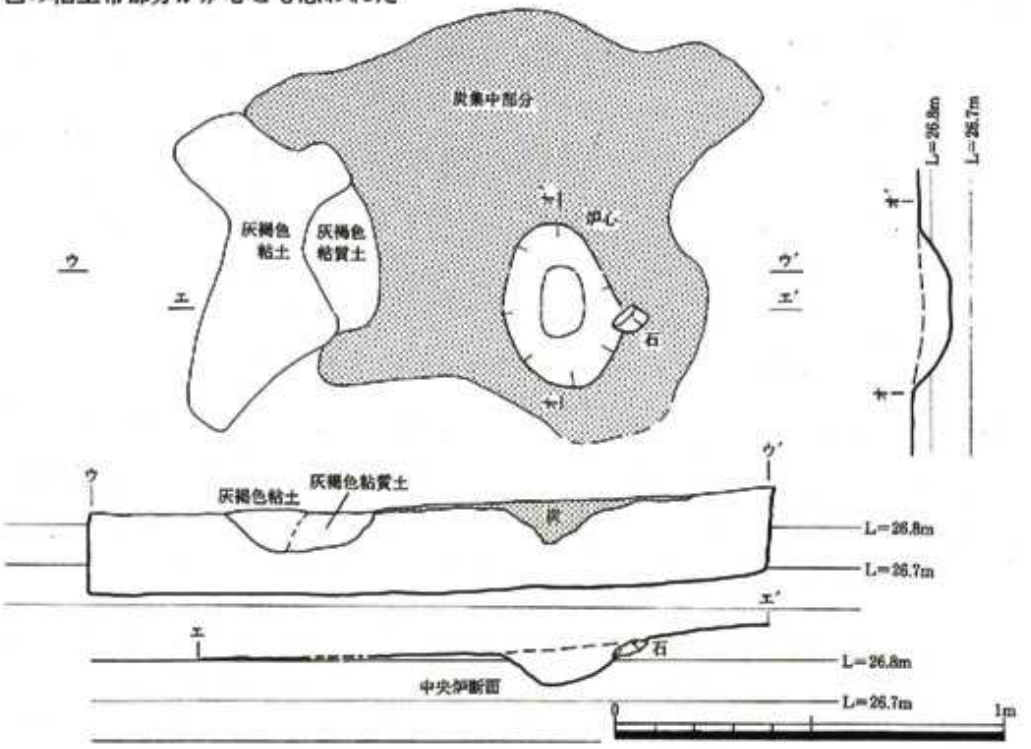
方形プランのコーナーに張り出しを持つ住居跡は，橋牟礼川遺跡で見つかっているが，張り出し部の機能はわかっていない。本住居跡の張り出し部からも埋土中から甕形土器の破片が発見されたものの詳細は不明であった。

主柱穴と思われる1，2，3，4について見てみたい。(第50図参照)。2を除いては，深さ3～4㎝前後の浅い円形の凹みがあり，埋土を除いたこの底面は，貼床同様に硬化していた。他の柱穴は，10～15㎝前後の深さを有するが，1，2，3，4が中央炉を囲み，ほぼ方形のプランをなすことから，掘り込みを行わない柱穴の可能性が考えられる。すなわち，主柱穴は自重で支えられる構造をとるものと推定され，柱穴底面の硬化面は，その結果生じた可能性が考えられる。これまでも，南九州の古墳時代の竪穴式住居において，柱穴のない住居跡の事例がいくつかみられたが，それらも今回検出された住居跡同様の構造をとっていたことも推測される。

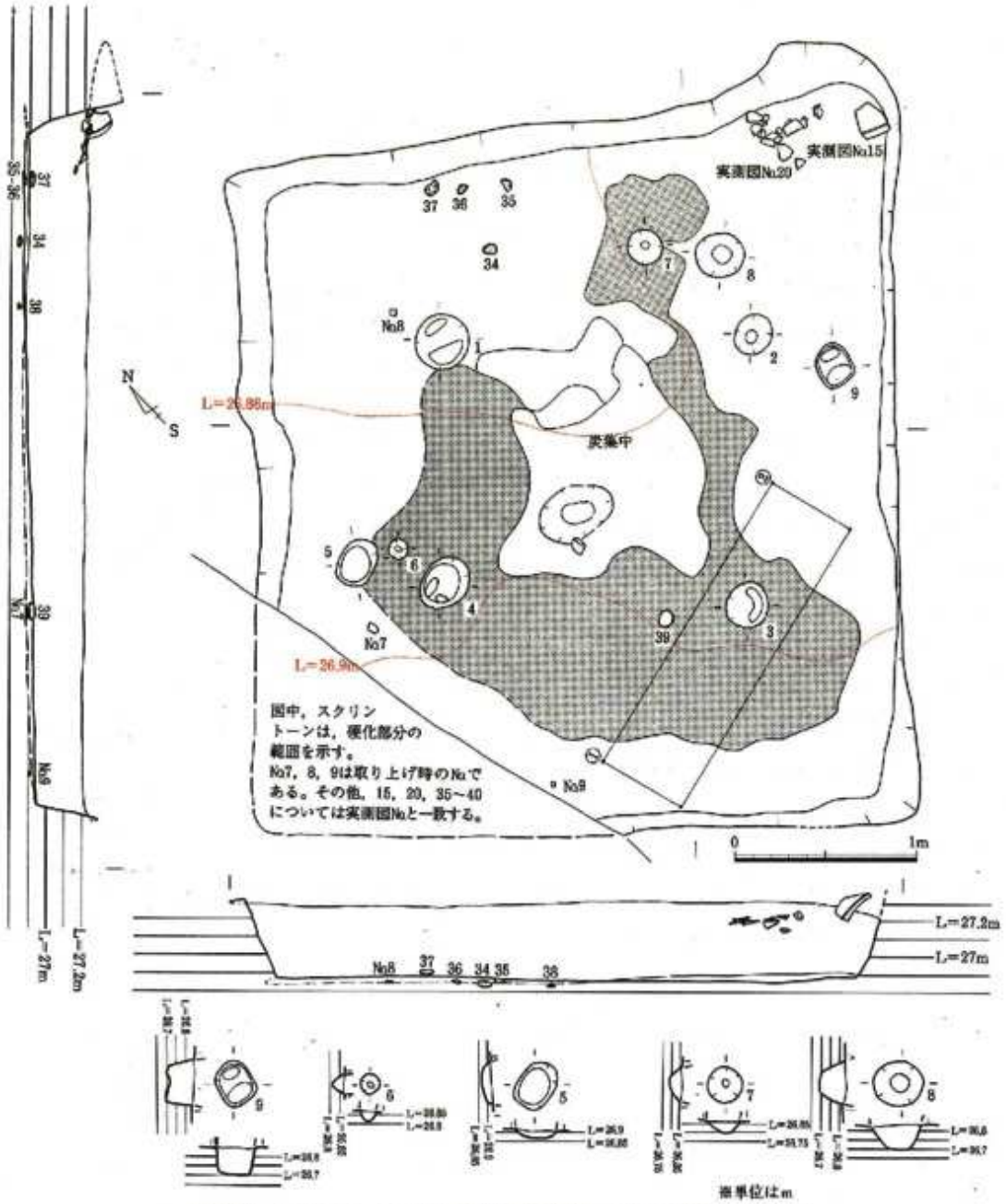
住居跡のほぼ中央からは炉跡が検出された。床面中央部に不整形に炭が集中する箇所が見られ，隣接して灰褐色の粘土帯が検出された。当初，この灰褐色の粘土帯部分が炉心とも思われた



第50図　3トレンチ1号住居跡主柱穴平面図及び断面図(S=1/20)



第51図　3トレンチ1号住居跡中央炉平面図及び断面図



第52図　3トレンチ1号住居跡平面図及び断面図(S=1／40)

表－14　3トレンチ1号住居跡床面土壌硬度測定データ

	①平均 7.19			平均 20.13												②平均 7.96			
①	5.27	9.53	11.35	21.43	10.63	7.16	6.19	11.70	31.75	64.31	21.9	15.3	36.77	40.48	21.03	6.01	6.15	6.12	②
	7.32	12.16	12.23	11.67	17.09	12.55	38.19	46.11	36.79	8.37	30.14		37.73	55.28	14.15	9.99	7.04	8.02	
	7.38	11.79	9.11	5.83	12.82	14.69	20.17	31.25	10.69	15.53			54.83	48.13	11.65	10.39	9.97	7.27	
	5.09	9.04	5.04	4.66	10.14	10.68	16.39	9.81	10.95	8.88	34.59	6.29	29.08	19.59	11.05	9.87	9.73	6.35	
	4.36	4.36	5.35	11.22	15.06	6.18	13.99	16.74	29.28	10.3	12.7	13.57	15.11	15.84	9.54	7.29	7.04	9.31	

数字がぬけている部分は柱穴があった所である。　①+②の平均 7.58

が，先行トレンチを入れ，断面を確認したところ，炭の集中する範囲に炉心があることが判った。(第51図参照)。炉心は，長径42cm，短径30cm，深さ約10cmの楕円形で，その上場付近から，石器が1点出土した。炭は，この炉心を含め，約1m四方に厚さ1cm前後で広がっていたが，その直下からは硬く焼けてしまったような床面を検出した。また，炉の南側の床面から凹石が，北側の床面からは軽石加工品がそれぞれ出土したが，土器については胴部付近の細片が多く，型式をとらえることができるような資料は見られなかった。

(2) 遺　物

本トレンチで出土した土器について，以下，層位毎に述べる。

a．第8層出土土器

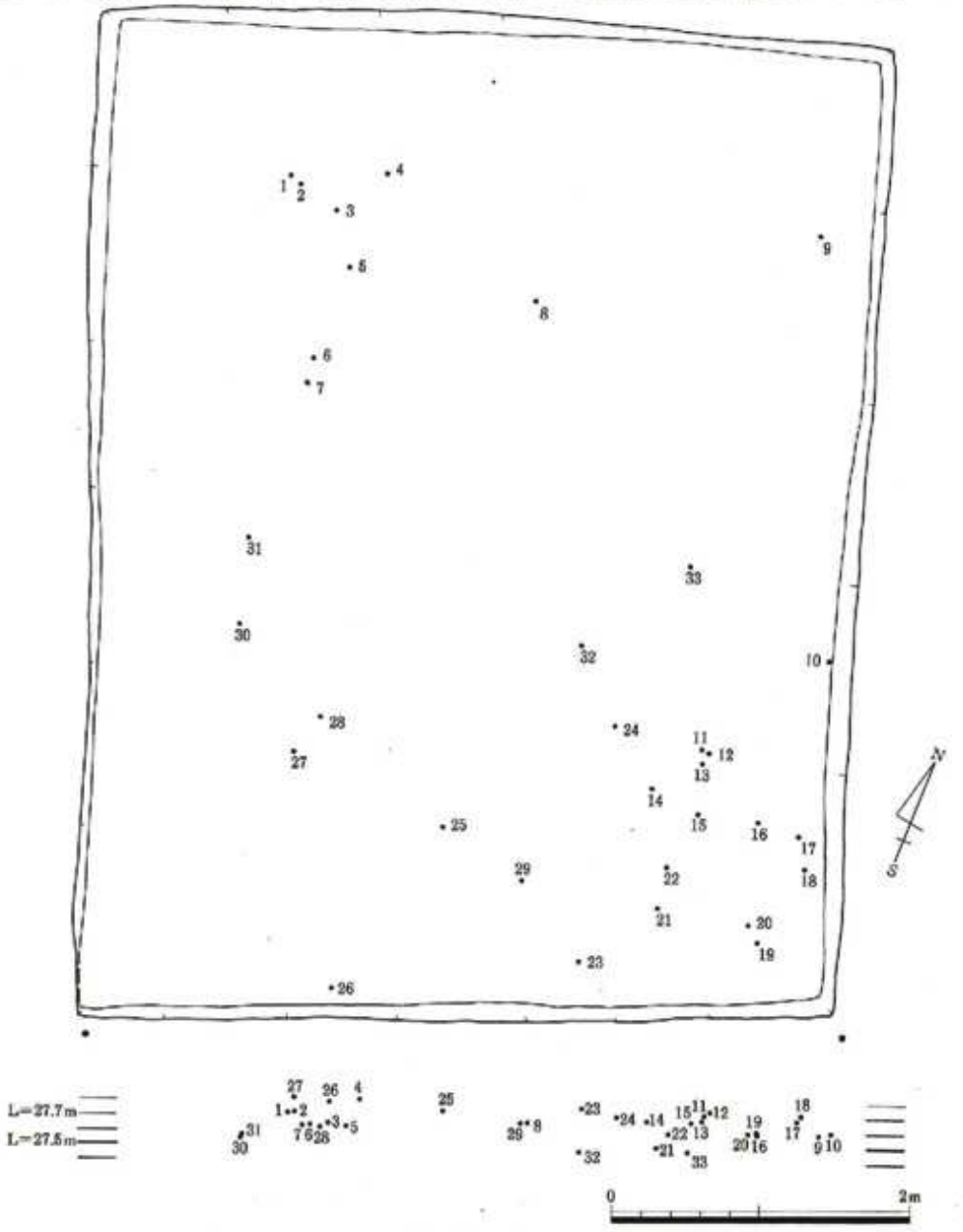
1は，坩形土器の胴部屈曲部で，外面に赤色塗彩が施されていたものと思われる。

2は，甕形土器口縁部で，口縁部下に一条の突帯を貼付する。突帯は工具によってヨコナデが施されておりつぶれて平坦になる。

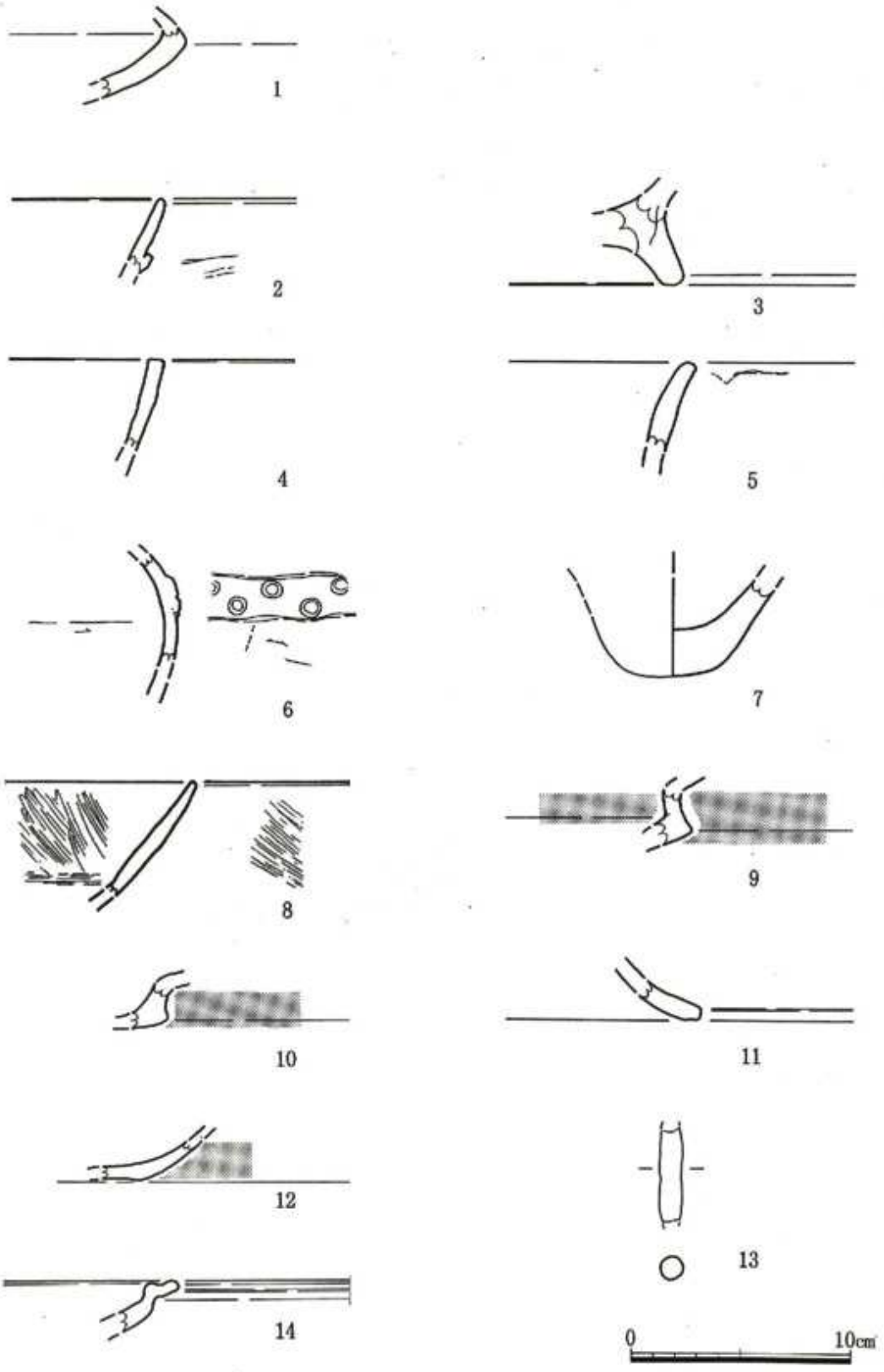
3は，甕形土器底部脚台部である。

4は，甕または鉢形土器の口縁部で，口唇部上面にヨコナデを施し平坦に仕上げる。

5～7は，壺形土器で，5は口縁部，6は胴部突帯部，7は底部である。5はやや外反し，内外面ともミガキを施す。6は幅の広い突帯を貼付し，突帯には竹管文が交互に施されている。



第53図　3トレンチ第8層遺物出土状況図(S=1/50)



第54図　3トレンチ第8層出土遺物実測図(S=1/2)

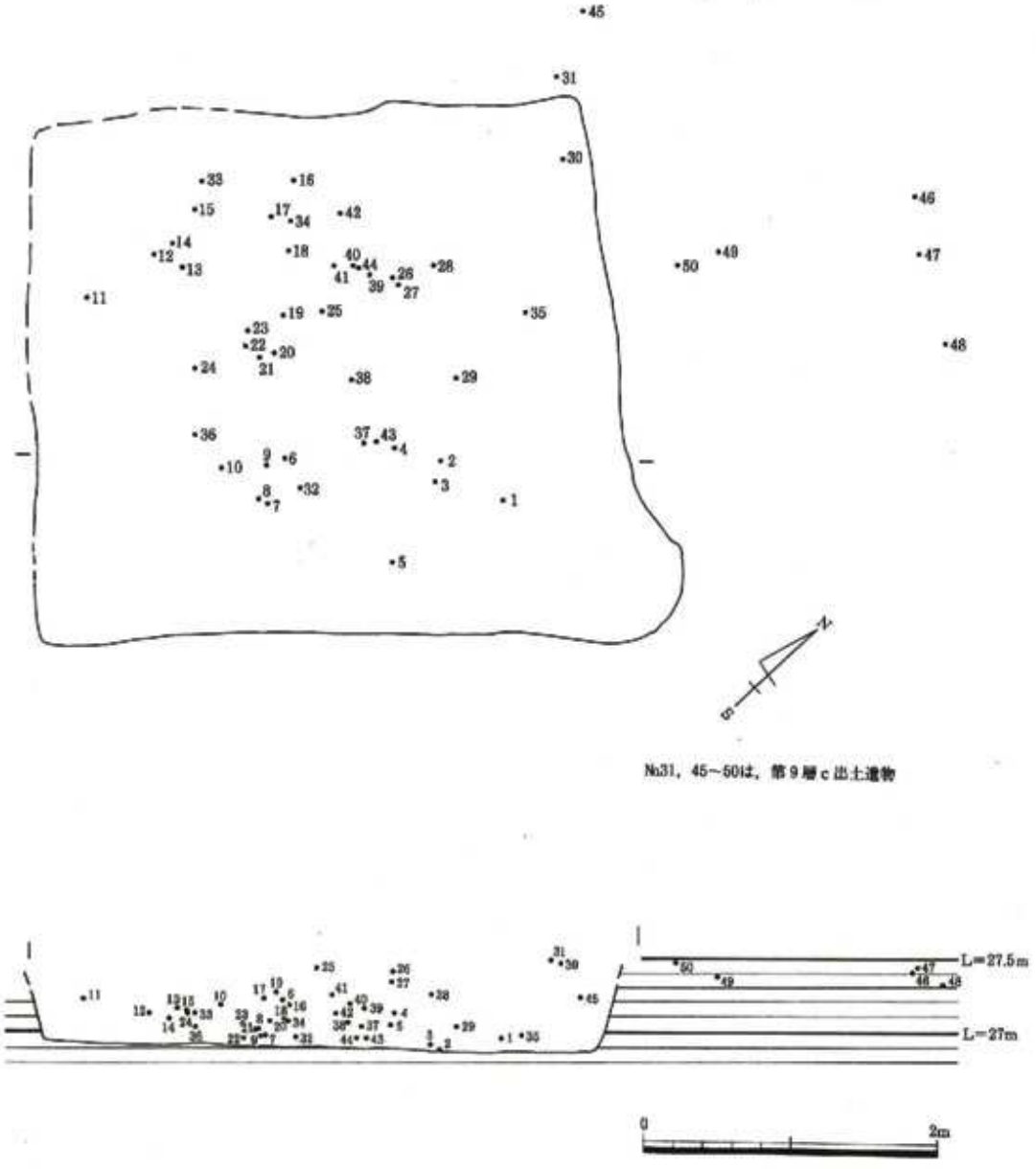
8～11は高坏形土器で，8は口縁部，9，10は胴部屈曲部，11は脚部の接地部分である。

8は内外面ともよくミガキが施されているが，赤色塗彩は施されていない。9，10は，赤色塗彩が施される。11は赤色塗彩は施されていない。

12は坩形土器の底部で，外面に赤色塗彩が施されている。

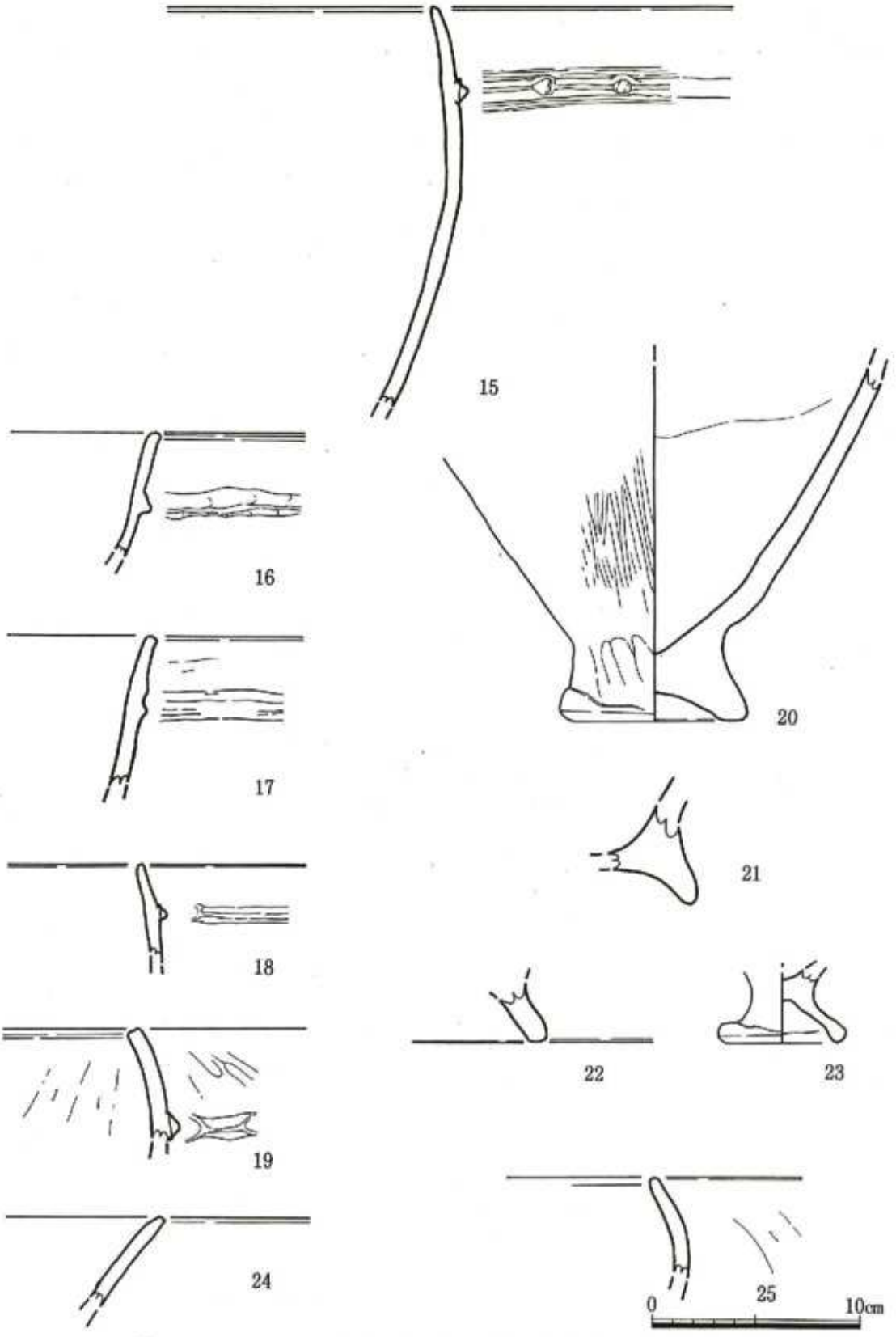
13は，用途不明の土製品である。断面円形で，両端が欠損する棒状の製品で，一見，いわゆる双孔棒状土錘に似るが，穿孔部分が確認できないため，断定できない。

14は，縄文時代晩期の精製浅鉢形土器の口縁部である。第8層がもとより，土石流堆積物であるため，一部混在したものと思われる。



№31，45～50は，第9層c出土遺物

第55図　3トレンチ1号住居跡埋土遺物出土状況図(S=1／50)



第56図　3トレンチ古墳時代1号住居跡埋土出土遺物実測図(S=1／3)

b．1号住居跡の埋土出土遺物

1は，1号住居跡の張り出し部分から出土したものであるが，精査の上，埋土からの出土と考えられた。甕形土器の口縁部である。口唇部はヨコナデで平坦に仕上げ，口縁部分はやや内湾する。

口線部下の突帯は，棒状具で刻まれる。

16～19も，甕形土器の口縁部である。18，19は口縁部下の突帯に刻みを施す。

20～23は，甕形土器底部の脚台部である。

20は胴部まで残存し，内面下半部にはカーボンが付着している。

23は小ぶりな甕形土器の脚台部で，一見ミニチュア土器かとも思えるが，実用，非実用の判定はにわかに下し難い。

25は鉢形土器の口縁部で，口縁部が大きく内湾するものである。この種の鉢形土器は橋牟礼川遺跡の下水道敷設事業に伴う発掘調査（M.№26－27トレンチ）におけるⅢ類（№162）の中で注意されたものである。

26～30は，高坏形土器で，26は口縁部，27～30は脚台である。これらの高坏はすべて赤色塗彩の施されないもので，赤色塗彩を施す一群の高坏とは，胎土が異なる。赤色塗彩を施す高坏は砂粒等の混物材が極めて少ないのに対し，赤色塗彩を施さない一群の高坏は砂粒を多く含む。

このような差異と数量差については，M.№26－27トレンチでも歴然としてあり，これを精製高坏と粗製高坏と仮に呼ぶと，粗製高坏の割合が圧倒的に多いと経験的に言うことができる。このような点で，日常容器として高坏が存在した可能性を含めて，弥生時代以降の高坏のあり方について今後注意をしておく必要があると思われる。

石器

3トレンチの古墳時代竪穴住居の底面から出土した石器6点を図化した。

34，35は軽石加工品である。34は，扁平な楕円形を呈し，全面が磨かれている。35は半月形の扁平な形状で，34と同様に全面が磨かれている。

36～38は，製品か否か判別が困難な軽石である。いずれも，製品加工過程のもの，もしくは，製品を造る際に出た廃材の可能性が考えられる。

39は凹石である。中央炉付近から出土した。側面の一部に磨面が見られる。40は凹石である。大きく欠損しており，全体形は不明である。

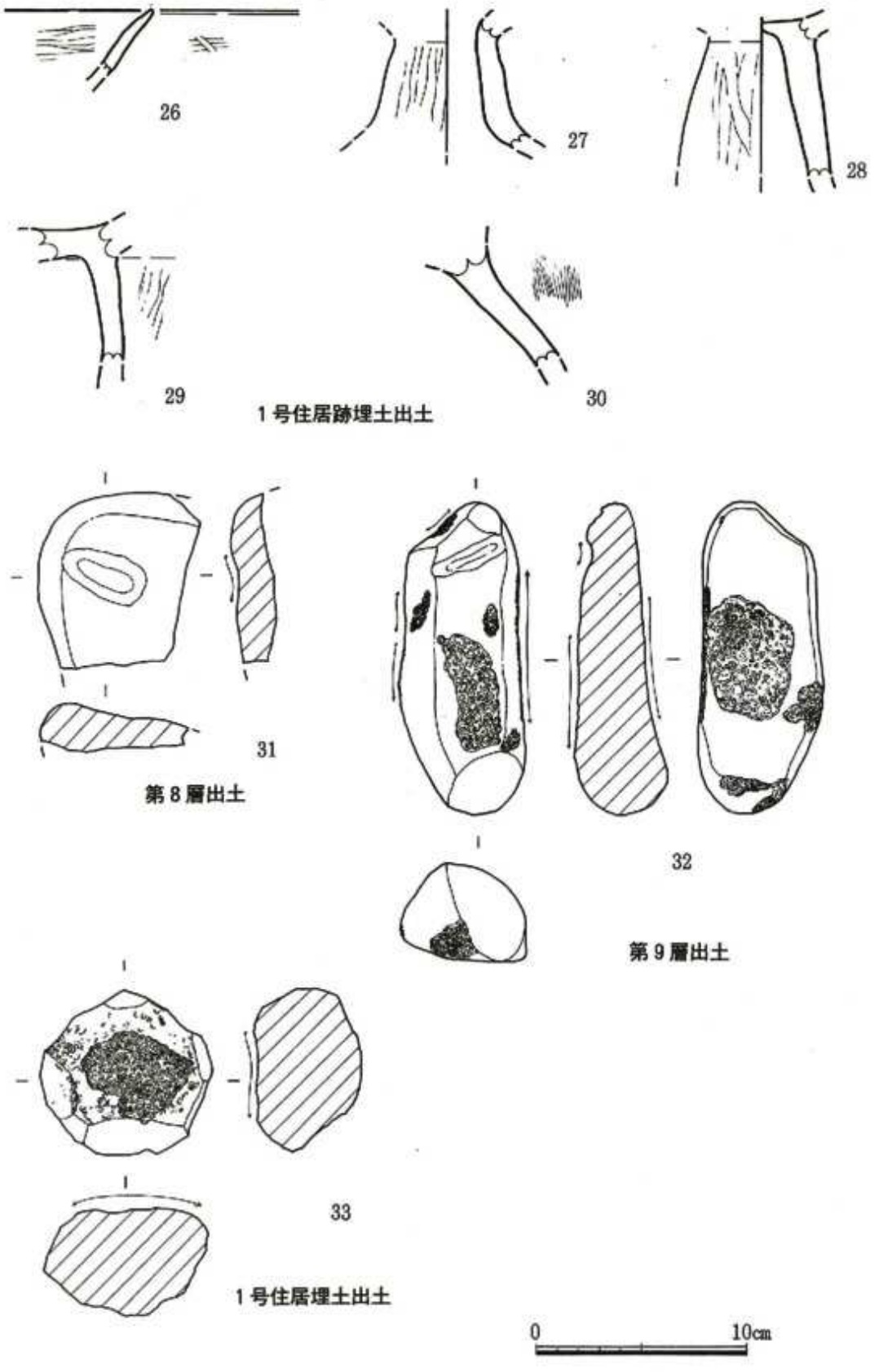
鉄器

鉄器は第58図の41～45にあげた5点が出土した。

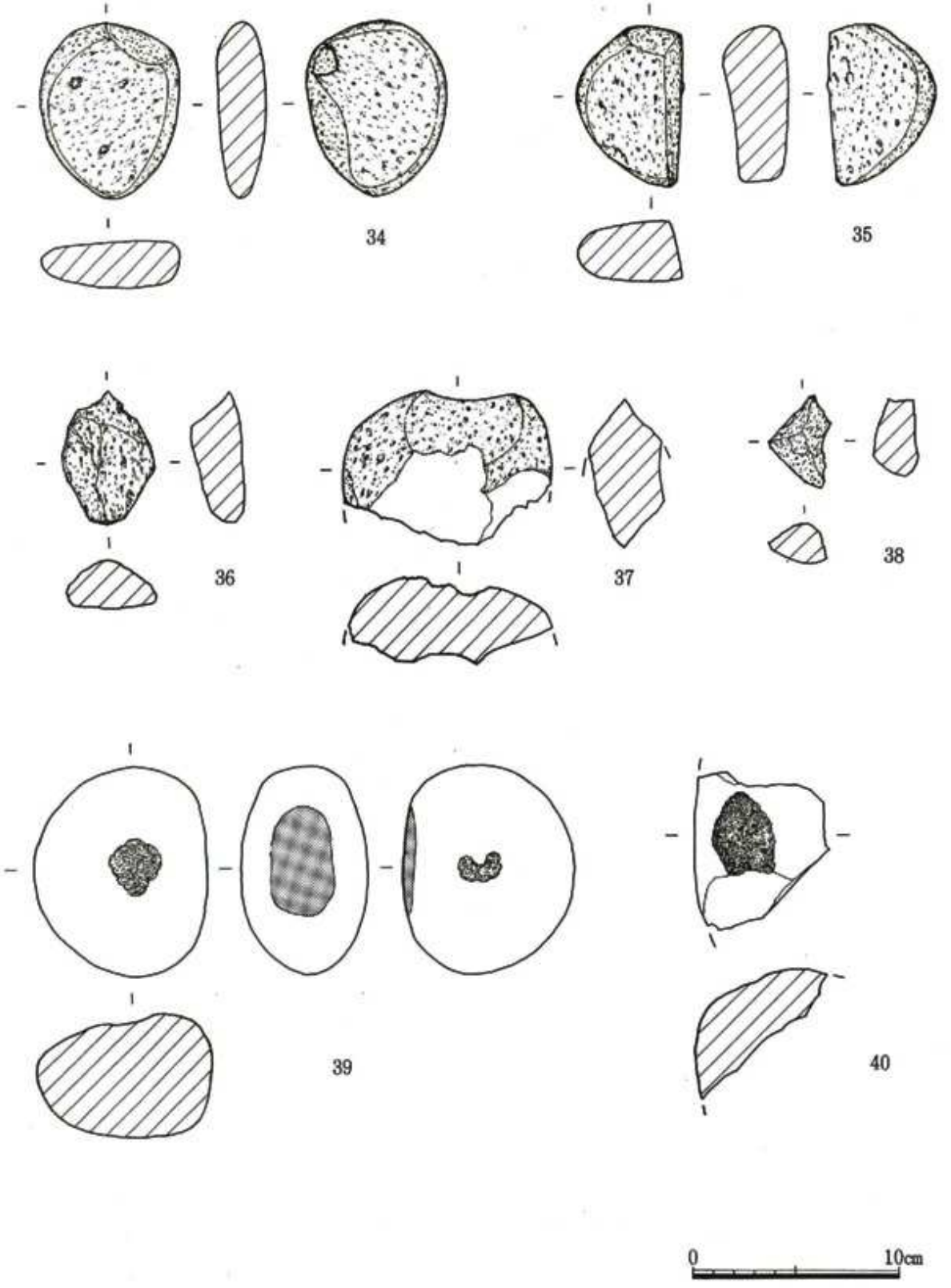
41，42は，中・近世墓の埋土中から出土した釘である。41は，又釘であるが，42については，二又に分かれない。42の釘の先端部には木片と思われる板状のものが付着している。棺桶に用いられた釘と考えられる。

43は，第8層出土の鉄鏃の基部と考えられる。断面は方形を呈するものと思われるが錆のため判然としない。44，45は第9層出土の鉄鏃の基部と考えられる。いずれも錆が激しく，断面の状況等はっきりと認識できない。

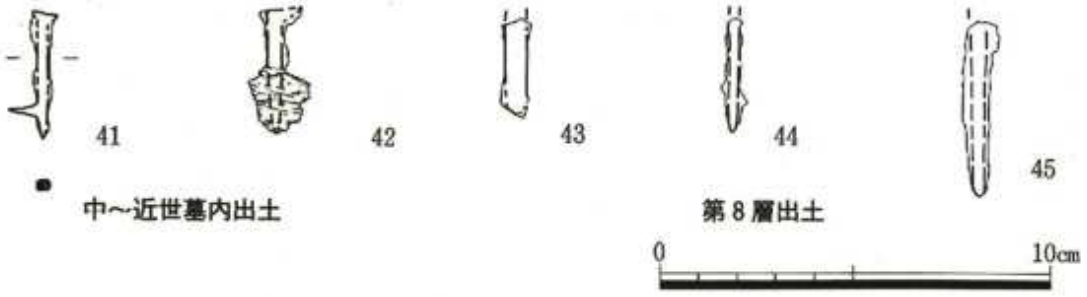
（文責　下山）



第57図　3トレンチ古墳時代1号住居跡埋土遺物及び第8層、第9層出土遺物実測図(S=1／2)



第58図　3トレンチ古墳時代1号住居跡床直上出土遺物実測図(S=1／3)



第59図　３トレンチ出土鉄器実測図(S＝1／2)

表－15

図番	取上No	残存法量	器種	部位	色				胎土粒	製作	調整	その他	出土状況	接合関係
1	一般	破片	壺形土器	胴部 底部	5YR6/6	7.5YR6/6	7.5YR7/6		微砂粒を若干含む	輪	外マメツ 内ミガキややマメツ 赤色塗彩	傾き若干ギモン	6	
2	1	破片	甕形土器	口縁部	5YR7/4 10YR6/6	2.5YR6/2 10YR6/6	5YR6/4 5YR6/2		細砂粒を含む	輪	外ナデ 内ナデ 口縁ナデ 端面ヨコナデ	傾きギモン	8	
3	32	破片	甕形土器	脚台部	5YR7/4 2.5YR7/4	2.5YR6/6	2.5YR6/4 10YR7/6	脚 2.5YR7/4 5YR7/4	細砂粒を含む	輪	外ナデ 内ナデ一部ミガキ 脚内ナデ一部ミガキ 脚端ナデ一部ミガキ	－	8	
4	7	破片	鉢形土器	口縁部	10R6/6 7.5YR7/8 5Y6/4	7.5YR6/6 7.5YR7/4	10R6/6 10YR8/2		細砂粒を含む	輪	外ナデ 内ナデ 口縁ヨコナデ	傾き若干ギモン	8	31
5	21	破片	壺形土器	口縁部	10R6/4 5Y6/1 10YR7/8	10R6/4 10YR7/6	2.5YR6/4 2.5YR6/3		細砂粒を含む	輪	外ミガキ?マメツ 内ミガキ?マメツ 口縁ミガキ，マメツ	傾き若干ギモン	8	
6	20	破片	壺形土器	胴部 突帯部	10R6/6 10YR7/6	10R6/6 10YR7/6	10R6/6 5Y6/1		細砂粒を含む	輪	外工具によるナデのちナデ 内ナデ，工具によるナデのちナデ 突帯ヨコナデのち竹管文	傾きギモン	8	
7	9	1／1残存	壺形土器	底部	5YR7/4 10YR7/6	10R6/6 7.5YR7/6 5YR6/4	10R6/6 10YR7/4 7.5YR7/4	脚 5YR7/4 10YR7/6	細砂粒を若干含む	輪	外ナデ 内ナデのちミガキやマメツ，ナデ 底ナデ	反転	8	
8	22	破片	高坏形土器	口縁部	5YR7/6	5YR7/4 10YR7/6	5R6/1 10YR7/4		微砂粒を若干含む	輪	外ミガキ 内ミガキ 口縁ミガキ	傾き若干ギモン	8	
9	35	破片	高坏形土器	脚部 屈曲部	2.5YR6/6 5YR5/2	2.5YR6/6 5YR5/3	10YR7/2 5YR6/3		微砂粒を含む	輪	外ミガキ，ややマメツ，赤色塗彩 内ミガキ，マメツ 赤色塗彩	傾き若干ギモン	8	
10	23	破片	高坏形土器	脚部 屈曲部	5YR7/6 10YR7/4	10YR7/6 2.5YR7/6	10YR7/6 2.5YR7/6		細砂粒を若干含む	輪	外マメツ 内マメツ，赤色塗彩	傾き若干ギモン	8	
11	16	破片	高坏形土器	脚台部	7.5YR6/6 N5/0		7.5YR6/6 N5/0	脚 7.5YR6/6 N5/0	細砂粒を若干含む	輪	外ナデ 脚内ナデ 脚端ヨコナデ，ナデ	－	8	
12	30	破片	壺形土器	底部	7.5YR5/8 2.5Y8/4	7.5YR5/8 2.5Y8/4	7.5YR5/8 2.5Y8/4 N6/0	脚 7.5YR5/8 2.5Y8/4	微砂粒を含む	－	外マメツ 内マメツ赤色塗彩 脚マメツ赤色塗彩	－	8	
13	3	破片	双孔棒状土錘？		7.5YR5/6 7.5YR4/4	－	7.5YR5/6 7.5YR4/4		細砂粒を若干含む	輪	－	－	8	
14	一般	破片	浅鉢形土器	口縁部	7.5YR6/4 2.5YR5/1	10YR7/4 5Y5/1	5YR6/8 5Y4/1		微砂粒を若干含む	輪	外ミガキややマメツ 内〃 口縁〃	傾き若干ギモン	8	
15	SA1 埋土	破片	甕形土器	口縁部									住居埋土	

表—16

図番	取上No	残存法量	器種	部位	色 ㊥	㊦	㊧	㊨	胎土粒	風化材	調整	その他	出土状況	接合関係
16	SA1 煙土 27	破片	甕形土器	口縁部	2.5YR5/4 2.5Y5/4	10R5/3 10YR6/3	2.5YR6/4 5YR5/1		細砂粒を若干含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊤ナデ ㊥ナデ、カーボン付着 ㊧㊨ヨコナデ ㊨ユビオサエのちナデ	傾き若干ギモン	住居煙土	
17	SA1 煙土 13	破片	甕形土器	口縁部	10R6/4 10YR4/1	10R6/4	2.5Y7/2 10R6/4		細砂粒を含む	㊦㊤ ㊥ 微	㊤ナデ ㊥工具によるナデのちナデ	傾きギモン	住居煙土	煙土20
18	SA1 煙土 16	破片	甕形土器	口縁部	2.5Y6/1 5YR6/1	7.5YR7/3	10YR6/1		細砂粒を含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊤ナデ ㊥ナデ ㊧㊨ヨコナデ ㊨ヨコナデのちキザミ	傾きギモン	住居煙土	
19	SA1 煙土 12	破片	甕形土器	口縁部	2.5YR6/2 7.5YR6/1	7.5YR7/2	5YR7/3 10YR7/3		細砂粒を含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊤ナデ、工具によるナデ ㊥ナデのちミガキ ㊧㊨ヨコナデ ㊨ヨコナデのち指頭によるキザミややマメツ	傾き若干ギモン	住居煙土	
20	SA1 煙土 8	㊨ 1/1残存 ㊩8.8cm	甕形土器	底部	10R6/4 10YR6/3 7.5R6/1	10R6/3 2.5YR6/3	10R6/6 5YR6/3	㊩ 5YR5/1 5YR6/2	細砂粒を含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊤ナデ、カーボン付着 ㊥ナデ、ナデのちミガキ ㊧㊨ナデ ㊨無調整	反転	住居煙土	9 32 土器 煙土
21	SA1 煙土 35	㊨ 1/6～7/1残存	甕形土器	底部	5Y7/3 10R6/4	N4/0 2.5Y6/3	10R6/4 5Y7/3	㊩ 5Y7/3 N6/0	細砂粒を含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊤ナデ ㊥ナデ ㊧㊨ナデ ㊨ナデ	二次火熱を受けている	住居煙土	
22	SA1 煙土 1	破片	甕形土器	底部 脚台部	10YR7/2 5YR7/4		2.5YR7/4 7.5YR7/2	㊩ 10YR7/3 2.5YR7/3	細砂粒を含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊥ナデ ㊧㊨ナデ ㊨ナデ	傾きギモン	住居煙土	
23	SA1 煙土 25	㊨ 1/1残存 (ミニチュア?) ㊩6cm	甕形土器	脚台部	2.5Y7/3 10R6/4	2.5Y7/3 10R6/4	10R6/4	㊩ 2.5Y7/3 5YR6/1 10R6/3	細砂粒を含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊤マメツ ㊥ナデ ㊧㊨ナデ ㊨ナデ	反転	住居煙土	
24	SA1 煙土 10	破片	鉢形 or 甕形土器	口縁部	10R6/4 10YR7/3	2.5Y7/3 10R6/4	10R6/4 7.5YR7/2		細砂粒を若干含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊤ナデ ㊥ナデ ㊨ヨコナデ	傾き若干ギモン	住居煙土	
25	SA1 煙土 15	破片	無頸壺 or 鉢形土器	口縁部	10R6/4 10YR7/2	10R6/3 2.5Y7/3	10R6/4 10YR7/3		細砂粒を含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊤ナデ ㊥ナデ ㊨ヨコナデ	傾きギモン	住居煙土	
26	SA1 煙土 23	破片	高坏形土器	口縁部	5YR6/2 5YR2/1	5YR3/1	5YR3/1 7.5YR7/3		微砂粒を含む	㊦ 微	㊤ミガキややマメツ ㊥ 〃 ㊨ 〃	傾き若干ギモン	住居煙土	
27	SA1 煙土 4	㊩ 最小径部 1/1残存	高坏形土器	脚台部	10R6/4 N8/0 7.5YR7/3		10YR8/2 2.5Y7/4	㊩ 10R6/4	細砂粒を含む 小レキを微量含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊥工具によるナデ ㊧㊨ナデ	反転	住居煙土	
28	SA1 煙土 33	㊩ 最小径部 1/1残存	高坏形土器	脚台部	10R5/6 2.5YR6/4	7.5YR7/6 7.5YR5/1	10R5/6 2.5Y7/3	㊩ 10R5/6 2.5Y7/3	細砂粒を若干含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊤ミガキ ㊥ミガキ ㊧㊨ナデ	反転	住居煙土	
29	SA1 煙土 19	破片	高坏形土器	脚台部	10R6/4	N4/0 5Y7/3	10R5/4 5Y7/3	㊩ 5Y2/2 5Y6/4	細砂粒を含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊤ミガキ ㊥ミガキ ㊧㊨ナデ		住居煙土	
30	SA1 煙土 22	破片	高坏形土器	脚台部	N7/0 N5/0 2.5YR7/3		2.5YR7/4 7.5YR4/1	㊩ 2.5YR7/3 10YR7/2	細砂粒を含む	㊦㊤ ㊥㊧ 微	㊤ハケメのちナデ ㊧㊨ナデ	傾き若干ギモン	住居煙土	
31	19	欠損 ㊩7.9cm ㊨7.2cm ㊧2.3cm ㊩305 g	凹石							石材 安山岩系?			8	
32	一般	完全形 ㊩14.6cm ㊨5.7cm ㊧4.3cm ㊩503 g	凹石							石材 安山岩系?			9	
33	SA1 一般	完全形 ㊩8.1cm ㊨7.8cm ㊧5cm ㊩350 g	磨石器							石材 安山岩系?		受熱の痕跡あり		
34	SA1 F1	完全形 ㊩8.5cm ㊨6.7cm ㊧2.3cm ㊩16 g	軽石加工品							石材 軽石				

表—17

図番	取上No	残存法量	器種	部位	色㊥	㊦	㊧	㊨	胎土粒	混和材	調整	その他	出土状況	接合関係
35	SA1 F2	完全形 ㊤7.7cm ㊥5.1cm ㊧3.1cm ㊨15g	軽石加工品							石材 軽石				
36	SA1 F3	㊤6.5cm ㊥4.4cm ㊧2.4cm ㊨8g	軽石							石材 軽石		未製品		
37	SA1 F4	㊤10.1cm ㊥7cm ㊧4cm ㊨72g	軽石							石材 軽石		未製品		
38	SA1 F5	㊤4.6cm ㊥2.7cm ㊧2.2cm ㊨4g	軽石							石材 軽石		未製品		
39	SA1 F6	完全形 ㊤10.2cm ㊥8.4cm ㊧6cm ㊨770g	凹石							石材 安山岩系				
40	SA1 F10	残㊤7.6cm 残㊥6.5cm 残㊧4cm 残㊨215g	凹石							石材 安山岩系				
41	中～近世墓坑土	㊤3.3cm ㊥0.4cm ㊧0.3cm	又釘											
42	〃	㊤3.3cm ㊥0.4cm ㊧0.4cm	釘									木片付着		
43	24	欠損 残㊤2.5cm 残㊥0.6cm 残㊧0.6cm	鉄鏃	茎部										8
44	33	欠損 残㊤3cm 残㊥0.3cm 残㊧0.3cm	鉄鏃	茎部										8
45	一括	欠損 残㊤4.5cm 残㊥— 残㊧—	鉄鏃	茎部										8

第V章　考　　察

今回の範囲確認調査で得られた成果について振り返るとともに，新たに提出された課題も併記し，まとめにかえたい。

1トレンチについて

近世の道路跡，古墳時代の竪穴式住居跡2基，土壙2基を検出した。近世の道路跡は，指宿市では始めての検出例である。指宿市内には石橋や堤防跡などの近世の建造物はいくつか残っているが，近世集落の実態は，ほとんど判っていない。今回の道路跡の検出により，付近に集落の存在が伺われる。また，古墳時代の竪穴式住居跡が発見され，当時の集落の北東側への広がりが確認された。

2トレンチについて

中世の柱穴群，古墳時代の柱穴群が検出され，国指定史跡の西側でも遺跡の存在が確認された。

橋牟礼川遺跡は，平安時代（西暦874年3月25日）の開聞岳噴火で埋没した火山災害遺跡で，数10cm～2m前後の火山灰が当時の集落を覆いつくしている。この時の噴火で，一旦，集落は廃絶されたものと考えられているが，その後，生活が再開される時期がいつなのか明確には判っていない。

そうしたことから，火山灰直上の黒色土層中に見られる遺構，遺物は災害後の生活を物語る貴重な資料であり，それらの詳細な時期を検討することが，類例の増加は待たれるものの，課題の1つであると考える。

また，弥生時代の良好な遺物包含層が確認され，多数の土器が出土した。弥生土器の出土は，これまで国指定史跡内や，橋牟礼川遺跡の周知の遺跡の範囲内からも確認されていたが，西側における弥生時代集落の存在を推測させる資料の発見となった。

3トレンチについて

中～近世墓，古墳時代の竪穴式住居1基が検出された。中～近世墓は，指宿地方では初めての検出例である。時期の特定が困難であったことが残念であるが，付近にも墓域が広がっているものと考えられる。また，調査地点南側約200mの所には，廃仏毀釈で廃寺となった西撰寺があったとの伝承もあり，今回検出された墓との関連も注目される所であるが，墓の時期がはっきりしないため推測の域を出ない。

古墳時代の竪穴式住居跡は，方形プランのものでコーナーの一部に張り出し部をもつ。今回検出された竪穴式住居跡の柱穴の状況から，主柱穴は掘り込みを伴わないタイプのもので，上部構造の重みが支えとなって建っているタイプの住居である可能性が出てきた。仮に，そうした構造の住居であった場合，どのような上部構造をとるのか，また，その建築方法はどうした手順をとるかといった様々な解すべき問題が浮かび上がってくる。今後，この住居の構造と復元案については，建築史学からの検討ももらいながら進めていきたい。

また，この竪穴式住居跡の発見によって，古墳時代の集落が山裾部でも営まれていたことが示唆された。橋牟礼川遺跡で発見されている集落との関係も含め，山裾部での集落の広がりが，どの程度であったのか，といった点についても今後の調査・研究の視野に入れていく必要があろう。

（文責　渡部）

SUMMARY

Hashimuregawa-archaeological site is located in Ibusuki-City on the southern most of tip of Kyushu Island.

In the Hashimuregawa-archaeolgical site we can find layers which we were deposited at four different times by Mt. Kainon's volcanic activity.

The first volanic activity occured during the last Jōmon Age; the second occured around the middle of the Yayoi age. The next occured in the last quater of the 7th century and the last volcanic actiuity happened on March 4th 874 A.D. The Hashimuregawa-archaeological site "Archaeologcal disadter" features look like "Pompeii"

Now, the purpose of this excavation was to know the expanse of the Hashimuregawa-archaeological-site. To do this we set up three trenches around the Hashimuregawa-archaeological site. These trenches were set up on Katanoda point whish is located on the west sidw of the Hashimuregawa-archaeological site.

1. The main result of the first trench

   We found two dwelling pito of the Kofun age. We could know the northwest expanse of the Kofun age village.

2. The main result of the second trench

   We found many pits of the middle age. These pits are the traces of some building pillars. In addition, we found much pottrey from the Yayoi age to the Heian age.

3. The main result of the third trench

   We found a grave from the middle age or the modern age. A part of a cranium was unearthed in the grave, but we couldn't know details about the cranium without middle age.

   In addition, we found dwelling pit of the Kofun age. The third trench was set up at the base of a mountain 300m away from the Hashimuregawa-archaeological site.

   We suppose that another village from the Kofun age spread out at the base of the monutain.

We could confirm the westen expanse of the Hashimuregawa-archaeological site by this excavation.

In the future we want to continue the excavation, and find new information about the Hashimuregawa-archaeokogical site.

Original: Tetsuya Watanabe
Translation: Tetsuya Watanabe
Proofreading: Trevor Fencott

写 真 図 版

写真図版１（１トレンチ現場写真）

南壁層位断面

古墳時代住居跡平面(完掘状況)

近世道路跡平面

１号土壙平面

近世道路跡断面

石鏃検出状況

古墳時代住居跡平面(検出途中)

２号住居跡遺物出土状況

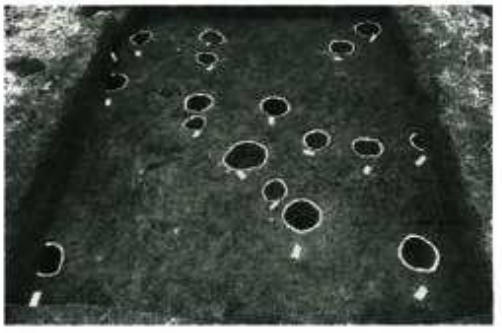
写真図版 2（2トレンチ現場写真）

2トレンチ南壁層位断面

古墳時代柱穴群平面①

西壁層位断面

古墳時代柱穴群平面②



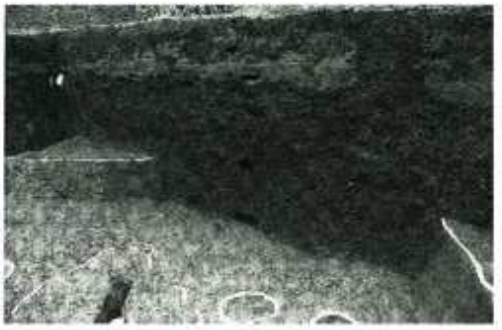
中世柱穴群平面

奈良～平安時代の柱穴断面

写真図版 3（3 トレンチ現場写真①）

南 壁 層 位 断 面

中～近世墓人骨出土状況②

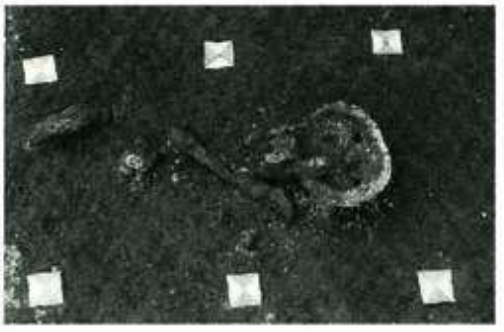


西 壁 層 位 断 面

古 銭 出 土 状 況

中～近世柱穴及び墓検出状況

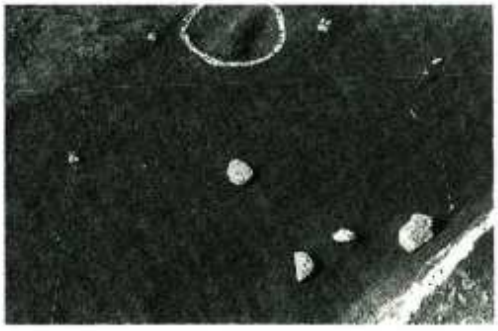
古墳時代道路跡検出状況



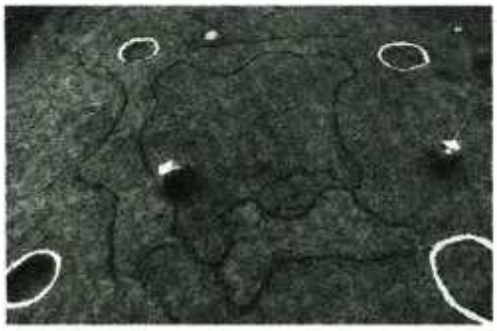
中～近世墓人骨出土状況①

写真図版４（３トレンチ現場写真②）

古墳時代１号住居跡完掘状況

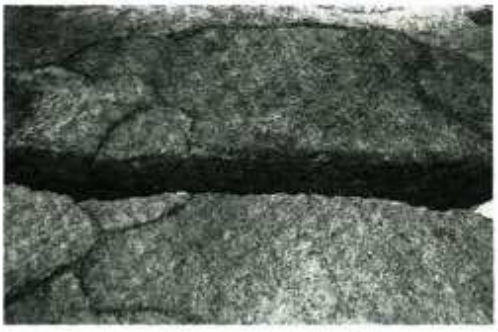


軽石加工品出土状況

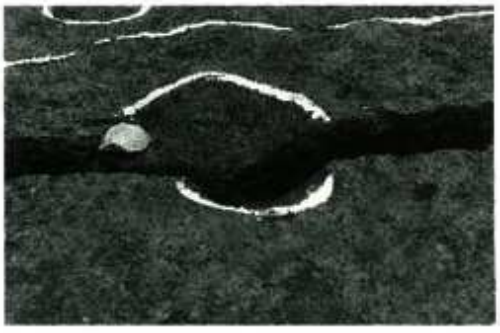


中央炉検出状況

張出し部遺物出土状況



中央炉断面①



中央炉断面②（完掘状況）

写真図版 5

1 T－1

1 T－2

1 T－3

1 T－4

1 T－5

1 T－6

1 T－7

1 T－8

1 T－9

1 T－10

1 T－11

1 T－12

1 トレンチ出土遺物①

写真図版 6


1 T－13


1 T－14


1 T－15


1 T－16


1 T－17


1 T－18


1 T－19


1 T－20


1 T－21


1 T－22


1 T－23


1 T－24


1 T－25


1 T－26


1 T－27


1 T－28


1 T－29


1 T－30


1 T


1 T－31

1 トレンチ出土遺物②

写真図版 7


1 T－32


1 T－33


1 T－34


1 T－35


1 T－36


1 T－37


1 T－38


1 T－39


2 T－1


2 T－2


2 T－3


2 T－4


2 T－5


2 T－6

1トレンチ・2トレンチ出土遺物①

写真図版 8


2 T－7


2 T－8


2 T－9


2 T－10


2 T－11


2 T－12


2 T－13


2 T－14


2 T－15


2 T－16


2 T－17


2 T－18


2 T－19


2 T－20


2 T－22


2 T－23


2 T－21


2 T－24


2 T－25


2 T－26


2 T－27


2 T－28


2 T－29

2 トレンチ出土遺物②

写真図版 9


2 T－30


2 T－31


2 T－34


2 T－32


2 T－33


2 T－35


2 T－36


2 T－37


2 T－38


2 T－39


2 T－40


2 T－41


2 T－42


2 T－43


2 T－44


2 T－45


2 T－46

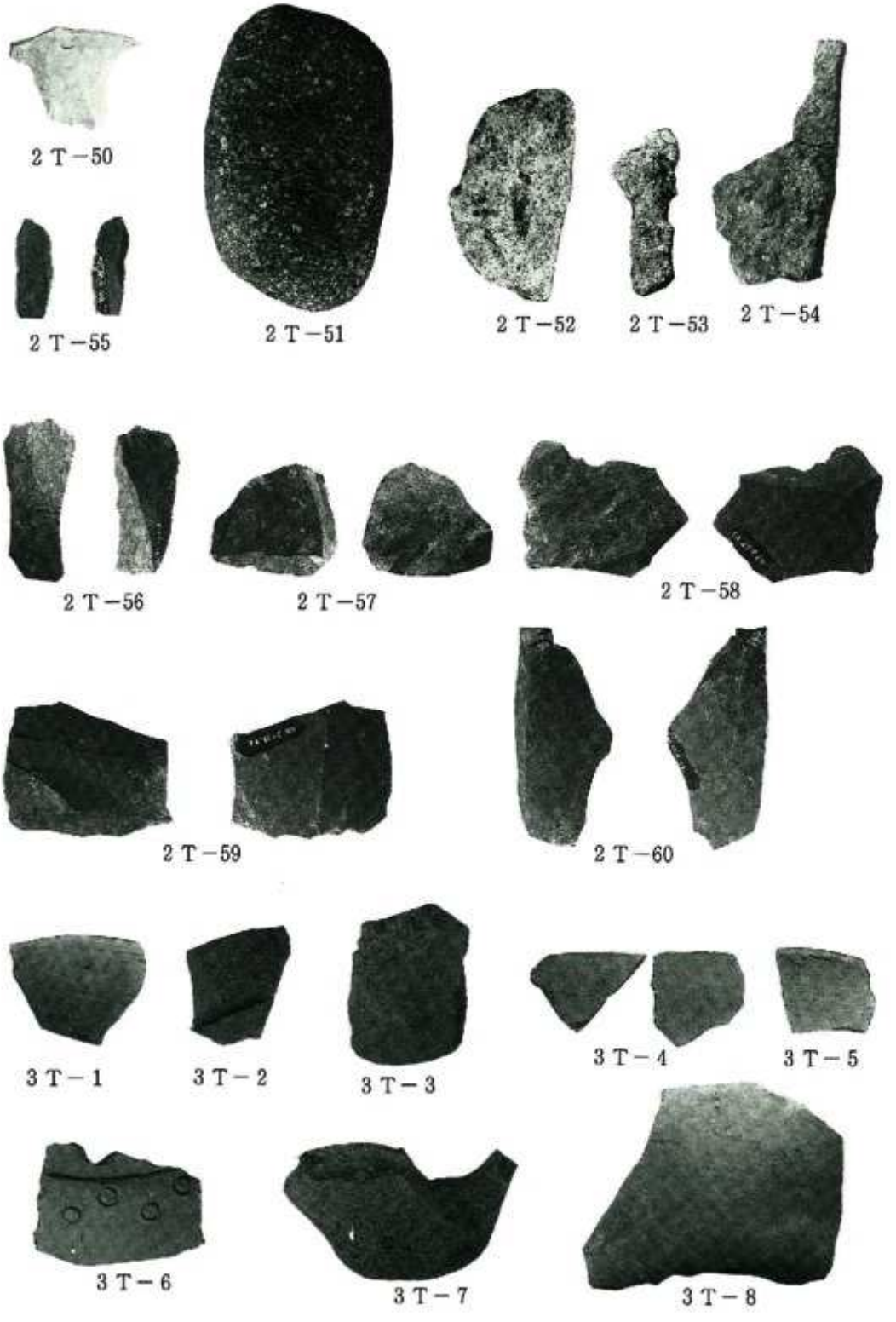

2 T－47


2 T－48

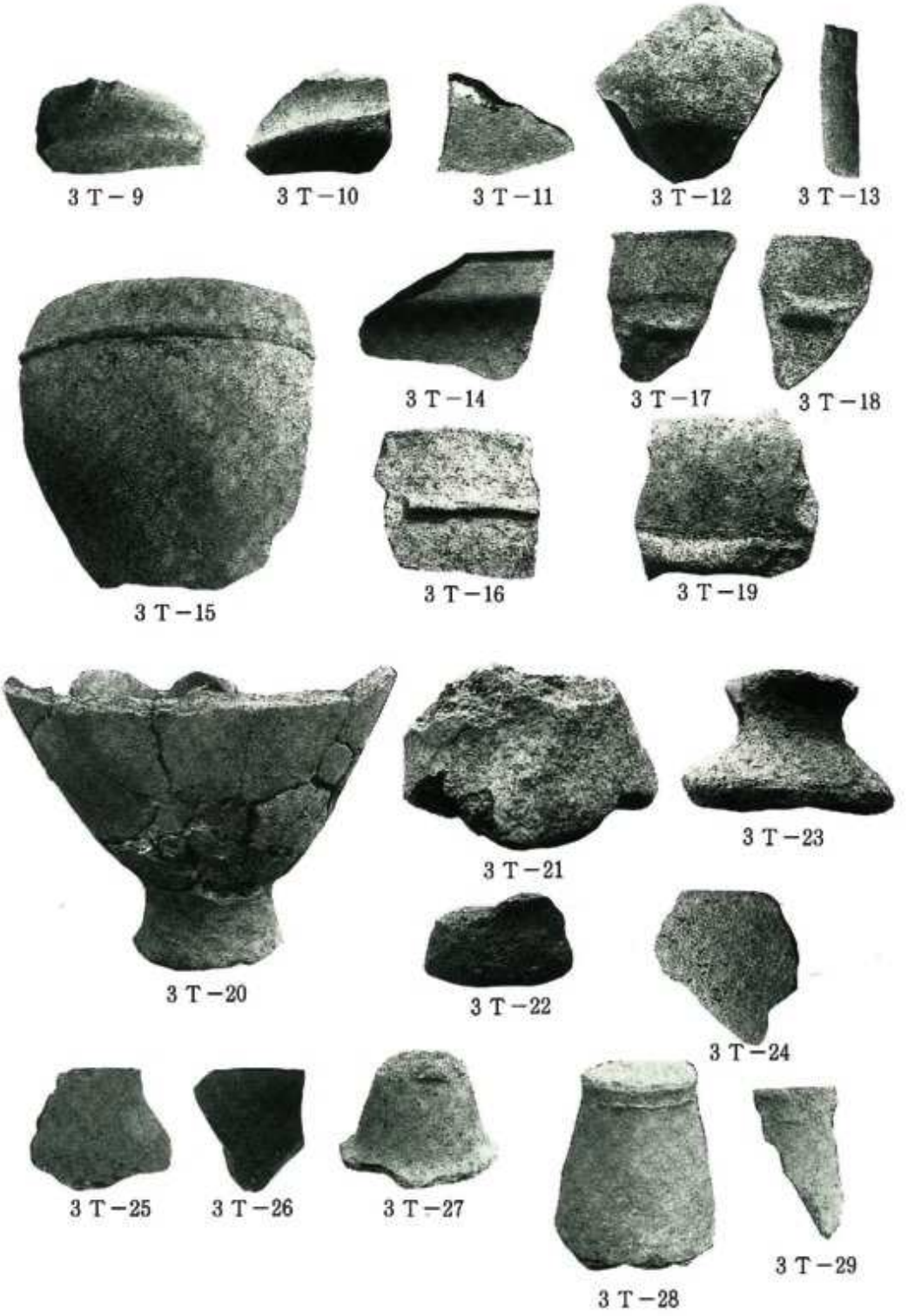

2 T－49

2 トレンチ出土遺物③

写真図版10



2トレンチ・3トレンチ出土遺物①


3 T－9
3 T－10
3 T－11
3 T－12
3 T－13
3 T－14
3 T－15
3 T－16
3 T－17
3 T－18
3 T－19
3 T－20
3 T－21
3 T－22
3 T－23
3 T－24
3 T－25
3 T－26
3 T－27
3 T－28
3 T－29

3 トレンチ出土遺物②

写真図版12


3 T－30


3 T－31


3 T－32


3 T－33


3 T－34


3 T－35


3 T－36


3 T－37


3 T－38


3 T－39


3 T－40


3 T－41　3 T－42　3 T－43

3 トレンチ出土遺物③

付　　篇

指宿市，片野田遺跡における植物珪酸体分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり，植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

片野田遺跡の発掘調査では，古墳時代の住居跡が検出された。そこで住居跡の埋土等について植物珪酸体分析を行い，イネをはじめとするイネ科栽培植物の検出および当時の古植生・古環境の推定を試みた。

2．試　料

調査対象は，7世紀後半頃に開聞岳から噴出した青コラ層の下位から検出された古墳時代の住居跡である。試料は，1トレンチと3トレンチにおいて住居跡の埋土やその周辺の土層断面から計27点が採取された。試料採取箇所を分析結果の試料欄に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに，次の手順で行った。

1）試料の絶乾（105℃・24時間）

2）試料約1gを秤量，ガラスビーズ添加（直径40μm，約0.02g）

※電子分析天秤によ1万分の1gの精度で秤量

3）電気炉灰化法による脱有機物処理

4）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去，乾燥

6）封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

7）検鏡・計数

同定は，イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし，400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当る。試料1gあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）をかけて，単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は，イネは赤米，キビ族はヒエ，ヨシ属はヨシ，ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は2.94（種実重は1.03），8.40，6.31，1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48，クマザサ属は0.75である。

4．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表1および図1～図4に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ，キビ族（ヒエ属など），ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など），ダンチク属，キビ族型，ウシクサ族型，Aタイプ，Bタイプ，ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），クマザサ属型（おもにクマザサ属），メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），マダケ属型（マダケ属，ホウライチク属），タケ亜科（未分類等）

頴の表皮細胞由来：イネ

その他：表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），茎部起源，未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），マンサク科（イスノキ属），クスノキ科（バリバリノキ？），はめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など），その他

5．考　察

(1) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには，イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）やキビ族（ヒエやアワ，キビなどが含まれる）ジュズダマ属（ハトムギが含まれる），オヒシバ属（シコクビエが含まれる），モロコシ属，トウモロコシ属などがある。

このうち，本遺跡の試料からはイネとキビ族が検出された。

イネは，1トレンチ基本土層の1層（攪乱，試料1），3層（褐色土層，試料3），4層（紫コラの2次堆積，試料4），5a層（奈良・平安，試料5），および3トレンチ東セクションの攪乱層（試料10）から検出された。このうち，3層（試料3）では密度が3,500個／gと比較的高い値であり，明瞭なピークが認められた。したがって，同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。奈良・平安時代とされる5a層（試料5）では，密度は800個／gと低い値であるが，同層は直上を紫コラ層（2次堆積）で覆われていることから上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって，同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

なお，3トレンチ1号住居跡の埋土下位(床面直上，試料6)では，イネ籾(頴の表皮細胞)に由来する植物珪酸体が検出された。密度は800個／gと少量であるが，同住居跡の床面付近に何らかの形でイネ籾が置かれていた可能性が考えられる。キビ族は3トレンチ1号住居跡の埋土上部（床面直上，試料6）および東セクションの攪乱層（試料10）から検出された。キビ族にはヒエやアワ，キビなどの栽培種が含まれるが，現時点ではこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを完全に識別するには至っていない（杉山ほか，1988）。また密度も1,000個／g未満と低い値であることから，各層準でヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性は考えられるものの，イヌビエなどの野・雑草に由来するものである可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため，未分類としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題

としたい。

(2) 植物珪酸体分析からみた植生・環境

古墳時代の試料からは，ウシクサ族型や棒状珪酸体が比較的多く検出され，ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）やネザサ節型，メダケ節型なども検出された。また，イネ科以外にもクスノキ科（バリバリノキ？）やマンサク科（イスノキ属）などの樹木（照葉樹）に由来する植物珪酸体も検出された。樹木についてはイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量がかなり低いことから，植物珪酸体分析の結果から古植生を復原する際には，他の分類群よりも過大に評価する必要がある。

以上の結果から，古墳時代の調査区周辺はススキ属やチガヤ属，ネザサ節，メダケ節などが見られるイネ科植生であり，クスノキ科やマンサク科（イスノキ属）などの照葉樹もある程度生育していたものと推定される。

参考文献

杉山真二（1987）　遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号：P.27-37.

藤原宏志（1976）　プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9：P.15-29.

藤原宏志（1979）　プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.Sativa L.）生産総量の推定－．考古学と自然科学，12：P.29-41.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）　機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追求のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20：P.81-92.

表1　指宿市，片野田遺跡の植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

	1トレンチ													3トレンチ													
	1号住居埋土			高 木土層										B地点			A地点			C地点			東セクション					
	1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	8	9		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
分類群＼試料	上位	中位	下位	1層	2層	3層	4層	5a層	5b層	黄ブラ	7層	8層		上位	中位	下位	上位	中位	下位	上位	中位	下位	撹乱	6層	黄ブラ	8層	埋土	埋土
イネ科																												
イネ				7		35	7	8															32					
イネ籾殻(穎の表皮細胞)																			8				8					
キビ族(ヒエ属など)														7									8					
ウシクサ族(ススキ属など)	44	39	15	15	7	7					8			14	8			24	62	8	39	60	102	8		30	23	36
ダンチク属																							8					
キビ族型		8		15		7								7	8	7				8			8					
ウシクサ族型	124	163	105	36	126	134	7	32			39	52		136	16	7	46	63	139	24	78	53	142	32		97	62	29
Aタイプ	22		22	7	15	14		24			8	7		7	16		8	16	15	16	31		16			15	15	
Bタイプ											16	15				7		8		8								
タケ亜科																												
ネザサ節型	29	16	15	22	67	57	7							36	24	7	23	8	23	8	8		16				8	29
クマザサ属型	7			7	22	21	15					7			8	7		8	15			30	8				15	
メダケ節型												7		29	24	15		16	8		8	15				15	31	15
マダケ属型				7	37	28																	24					
未分類等	73	85	52	51	133	142	45	8			16	45		171	39	52	23	31	69	48	55	38	32	8		15	31	66
その他のイネ科																												
表皮毛起源	7	31	15	7	30	28						7				7	8	16	31	8	8	15	16	8		22		
棒状珪酸体	621	745	427	131	576	573	37	87		8	47	74		421	134		92	47	524	159	55	106	748	48		394	77	153
茎部起源				7			7																8					
未分類等	665	605	495	174	628	665	37	103	8	8	78	134		621	166	74	146	110	601	183	101	121	670	103		491	209	109
樹木起源																												
ブナ科(シイ属)						7									8	7		8										
マンサク科(イスノキ属)				29	7	14	7															15						
クスノキ科(バリバリノキ?)	29	23			22	21					8	30		38	16	22	23	31	31	8	16	30				30	46	36
はめ絵パズル状(ブナ属など)					7																							
その他	7	8	7	15	22	14					23			7	32	22	8	39	8		8	30				7	15	15
植物珪酸体総数	1629	1723	1154	530	1700	1769	172	261	8	16	241	380		1491	497	238	377	424	1534	477	405	513	1844	207		1116	534	488

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡·cm）

イネ				0.21		1.04	0.22	0.23															0.93					
(イネ籾)				0.07		0.36	0.08	0.08															0.32					
キビ族(ヒエ属など)														0.60									0.66					
ウシクサ族(ススキ属など)	0.54	0.48	0.19	0.18	0.09	0.09					0.10			0.18	0.10			0.29	0.76	0.10	0.48	0.75	1.27	0.10		0.37	0.29	0.45
ネザサ節型	0.14	0.07	0.07	0.10	0.32	0.27	0.04							0.17	0.11	0.04	0.11	0.04	0.11	0.04	0.04		0.06				0.04	0.14
クマザサ属型	0.06			0.05	0.17	0.16	0.11					0.06			0.06	0.06		0.06	0.12			0.23	0.06				0.12	

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

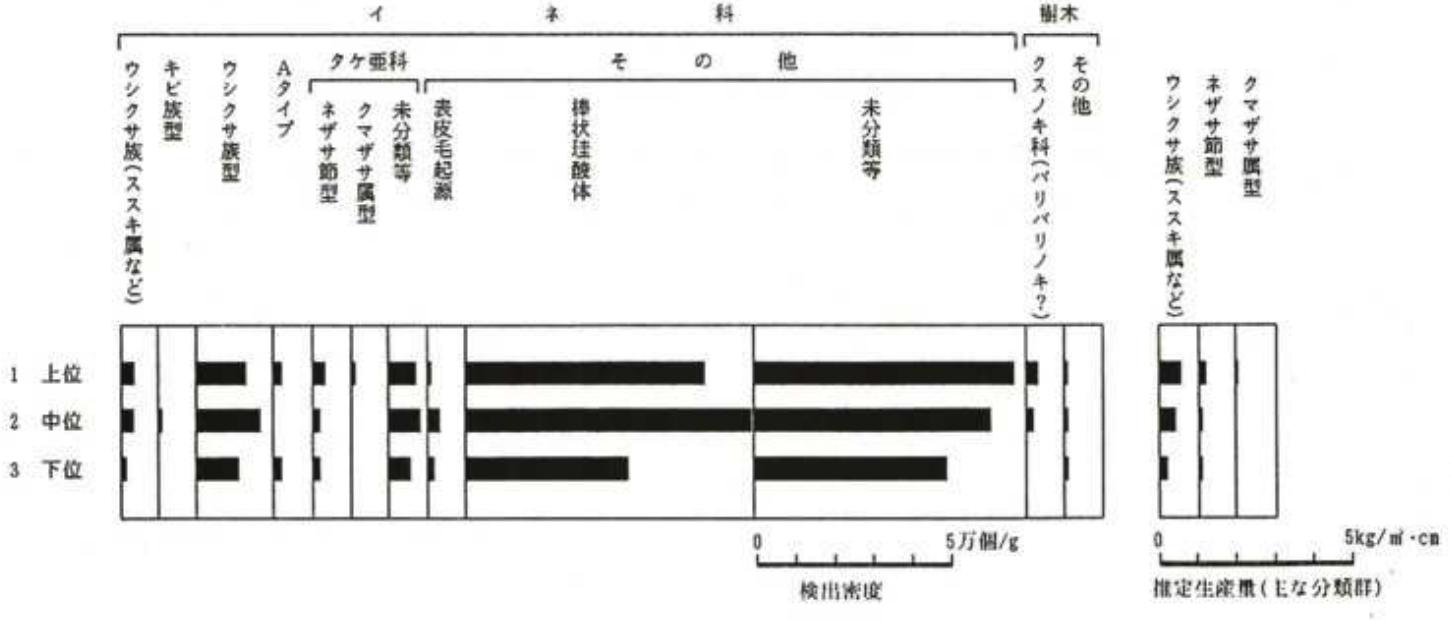


図1　指宿市，片野田遺跡1トレンチ1号住居跡(古墳時代)埋土の植物珪酸体分析結果

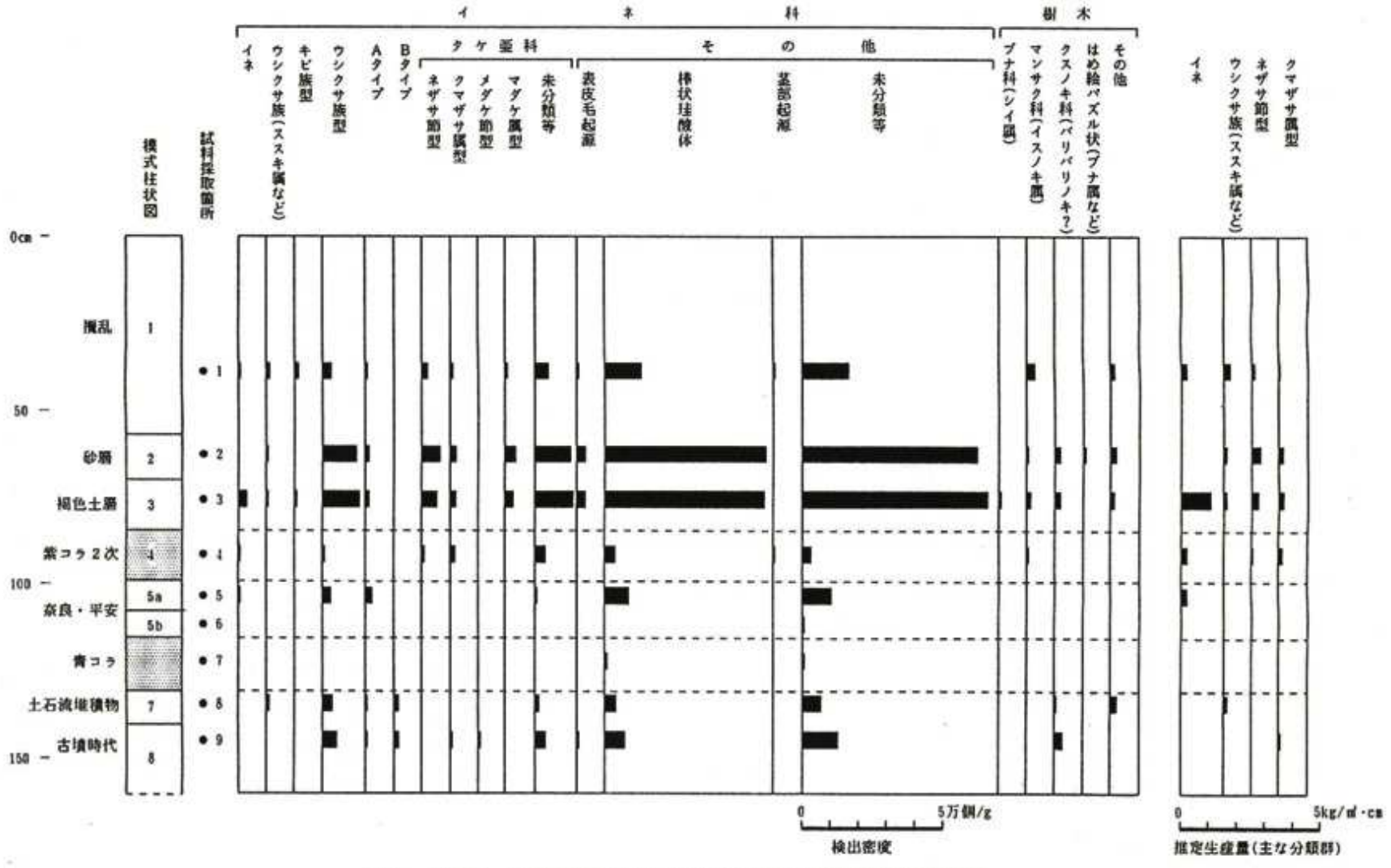


図2　指宿市，片野田遺跡1トレンチ基本土層の植物珪酸体分析結果

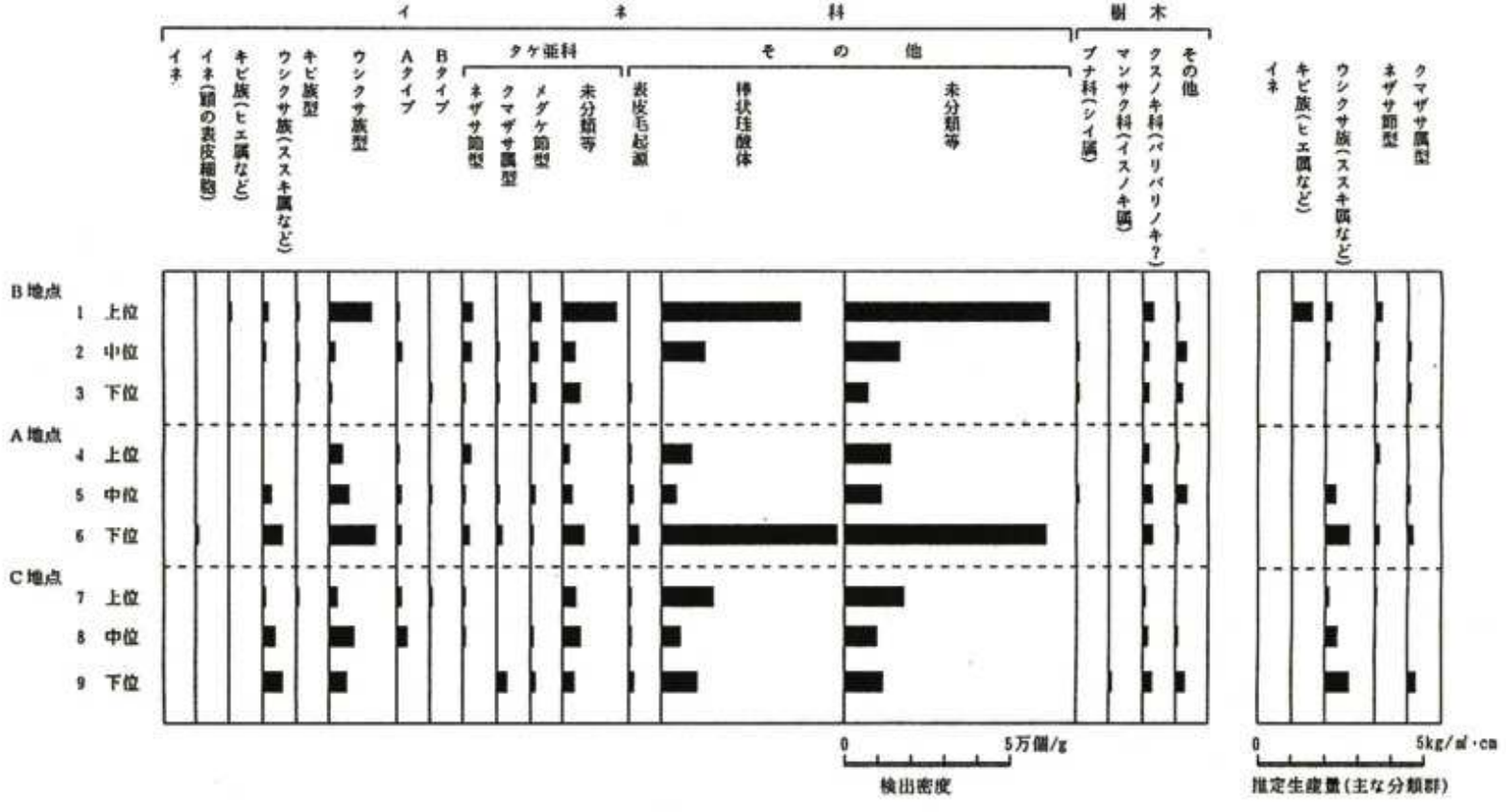


図3　指宿市，片野田遺跡3トレンチ1号住居跡(古墳時代)埋土の植物珪酸体分析結果

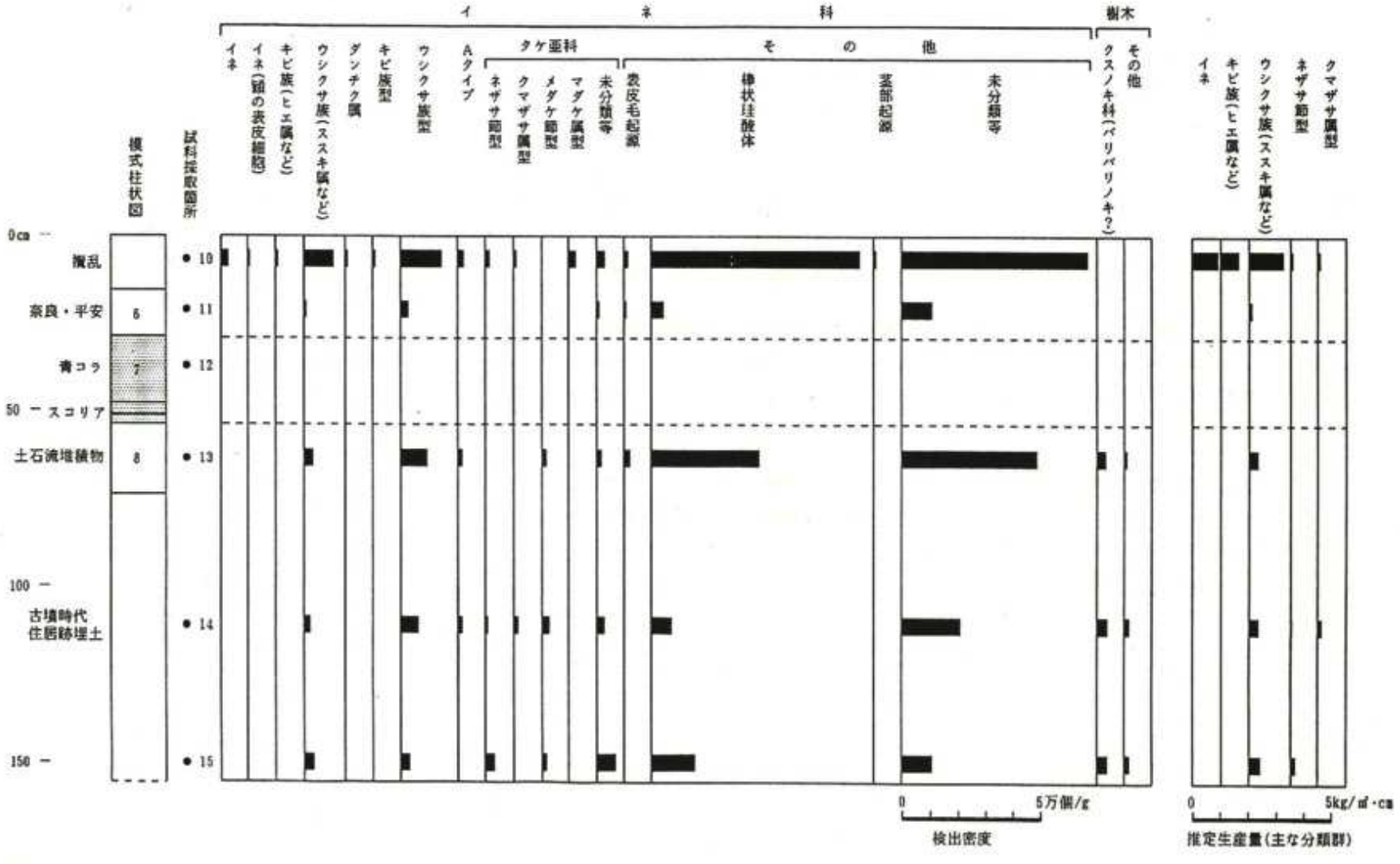


図4　指宿市、片野田遺跡3トレンチ東セクションの植物珪酸体分析結果

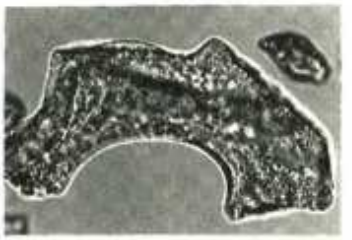
植物珪酸体の顕微鏡写真

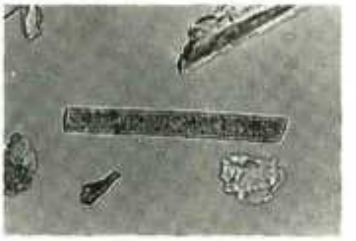
（倍率はすべて400倍）

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	1トレンチ	4
2	イネの籾殻(穎の表皮細胞)	3トレンチ	6
3	キビ族(ヒエ属など)	3トレンチ	1
4	ウシクサ族(ススキ属など)	3トレンチ	5
5	ウシクサ族型	1トレンチ	2
6	イネ科Aタイプ	1トレンチ	2
7	Bタイプ	1トレンチ	8
8	ネザサ節型	1トレンチ1号住居	3
9	クマザサ属型	3トレンチ	9
10	メダケ節型	3トレンチ	1
11	マダケ属型	1トレンチ	3
12	表皮毛起源	1トレンチ1号住居	3
13	棒状珪酸体	1トレンチ1号住居	1
14	不明	1トレンチ	2
15	ブナ科(シイ属)	1トレンチ	3
16	マンサク科(イスノキ属)	1トレンチ	1
17	クスノキ科(バリバリノキ？)	1トレンチ1号住居	1
18	ブナ科(アカガシ亜属？)	1トレンチ	1

プラントオパール写真

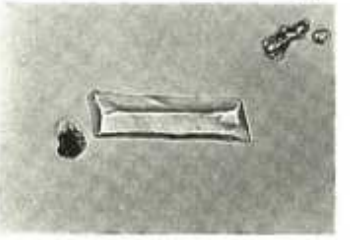

1

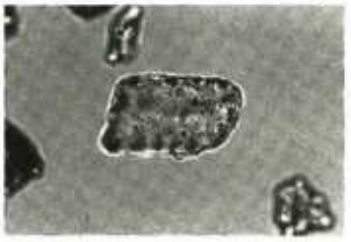

7


13


2


8


14


3


9


15


4

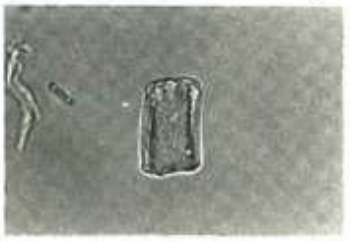

10


16

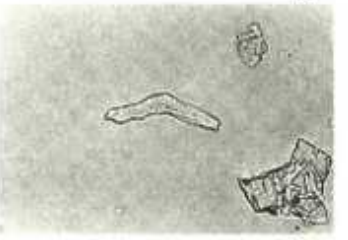

5


11


17


6


12

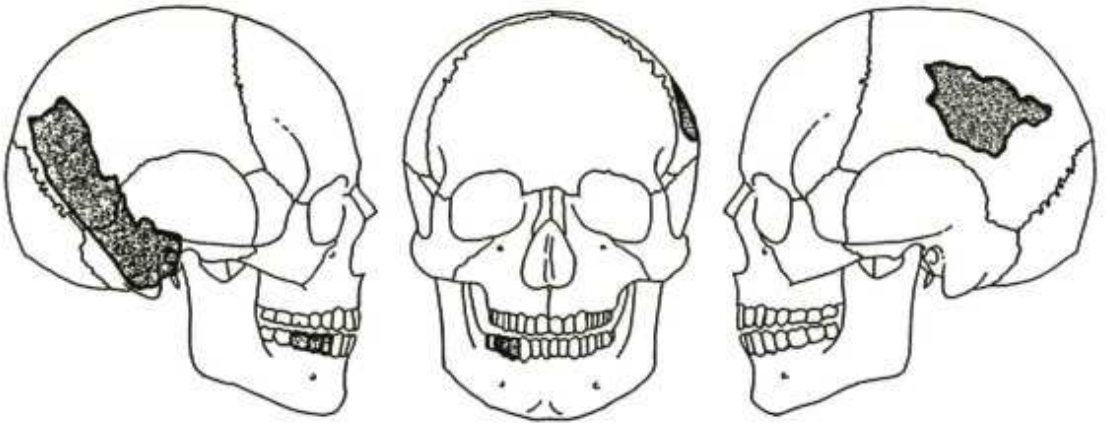

18

指宿市橋牟礼川遺跡片野田地点３トレンチ出土の人骨

鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ
竹中正巳・峰　和治・小片丘彦

平成７年（1995）２月，指宿市橋牟礼川遺跡片野田地点３トレンチから人骨１体を埋葬した中世～近世に属する墓１基が発掘された。人骨は腐食が進んでいて遺存量が少なく，埋葬姿勢の確認はできなかったが，観察の結果，以下の所見が得られた。

1．頭蓋と歯の遺存部は図１の通り，右側頭・頭頂部片（A），左頭頂骨片（B）および３本の下顎歯（C）である。このほかに部位の同定できない体肢骨の破片が少量ある。
2．性別は判定に有用な部位が残っておらず，不詳である。
3．縫合の状態が観察可能な右鱗状縫合は，内・外板とも未閉鎖である。
4．下顎右の第１，第２小臼歯および第１大臼歯の咬耗はそれぞれMartinの３，２，２度である。
5．下顎右第１小臼歯の近心歯頸部にC_2，遠心歯頸部にC_3のう蝕がある。
6．右外耳道に骨瘤は形成されていない（左は観察不能）。
7．年齢の判断材料は乏しいが，歯の咬耗と縫合の状態から一応熟年と推定される。



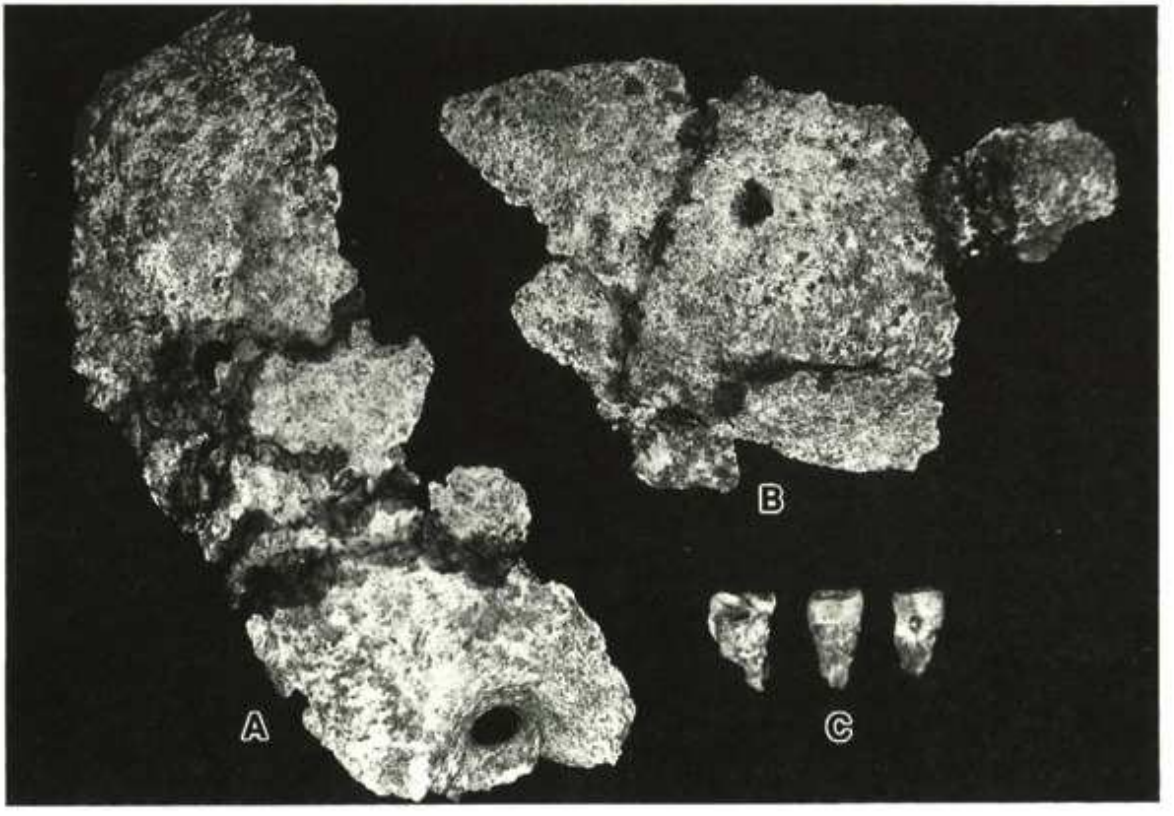


図1　人骨および歯の遺存部位

南迫田遺跡篇

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境

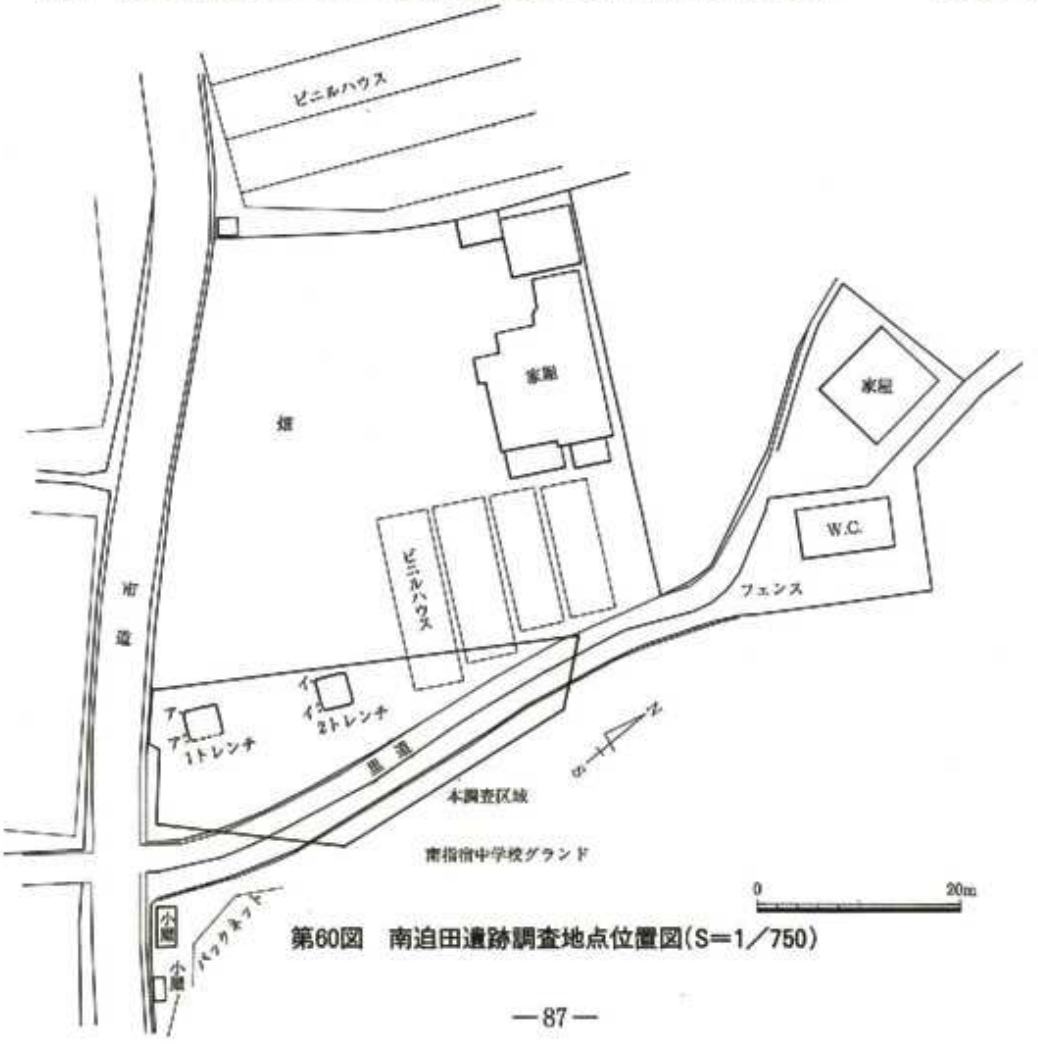
南迫田遺跡は，指宿市十二町に所在する。遺跡は，池田湖の東側の外輪山の山裾，海抜16～25m前後の火山性扇状地上に位置し，西暦874年の開聞岳噴火に伴う紫コラの厚く堆積していることが確認されている。平成５年度に行われた農道整備事業に伴う確認調査では，縄文時代～中世の各時期の遺物包含層が確認された他，中世の道路後や柱穴などが検出された。今回の調査地点は，平成５年度に確認調査を行った地点の東側約200mに位置し，周辺には坂瀬ノ上遺跡，柳田遺跡，上玉利遺跡等が隣接している。

第Ⅱ章　調査に至る経緯

平成６年９月より，指宿市立南指宿中学校の校庭拡幅工事が実施されることとなった。工事の内容は，校庭西側の畑地を約３m切り下げ，現校庭面の高さに合わせてテニスコートを設置する内容であったが，付近に遺跡地の存在が知られていることから，工事に先立ち，確認調査を実施することとなった。

確認調査は，平成６年７月20日～同月25日まで，１トレンチ（３×３m），２トレンチ（３×３m）の２ヵ所のトレンチを設定し実施した。

なお，調査の組織については，片野田遺跡地点の調査体制と同様である。　　（文責　渡部）



第60図　南迫田遺跡調査地点位置図(S=1／750)

第Ⅲ章　遺跡の層位

南迫田遺跡の層位は，橋牟礼川遺跡基本層位とおおむね一致する。そこで以下，南迫田遺跡の層位については，橋牟礼川遺跡の基本層位に準じた形で表記したい。

なお，詳細については，各トレンチの層位の特徴を述べる中で触れることとする。

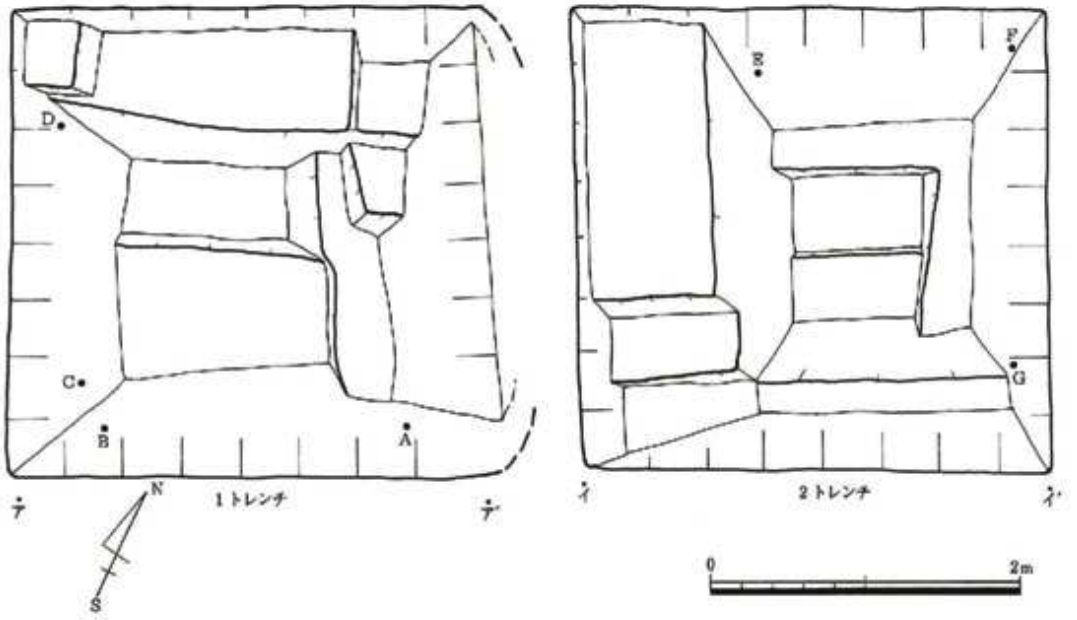
第Ⅳ章　確認調査

1トレンチ，2トレンチの2ヵ所を調査した。いずれのトレンチからも遺物の出土は見られなかったが，紫コラ，青コラの開聞岳起源の火山灰が確認された。以下，各トレンチの層位について述べる。

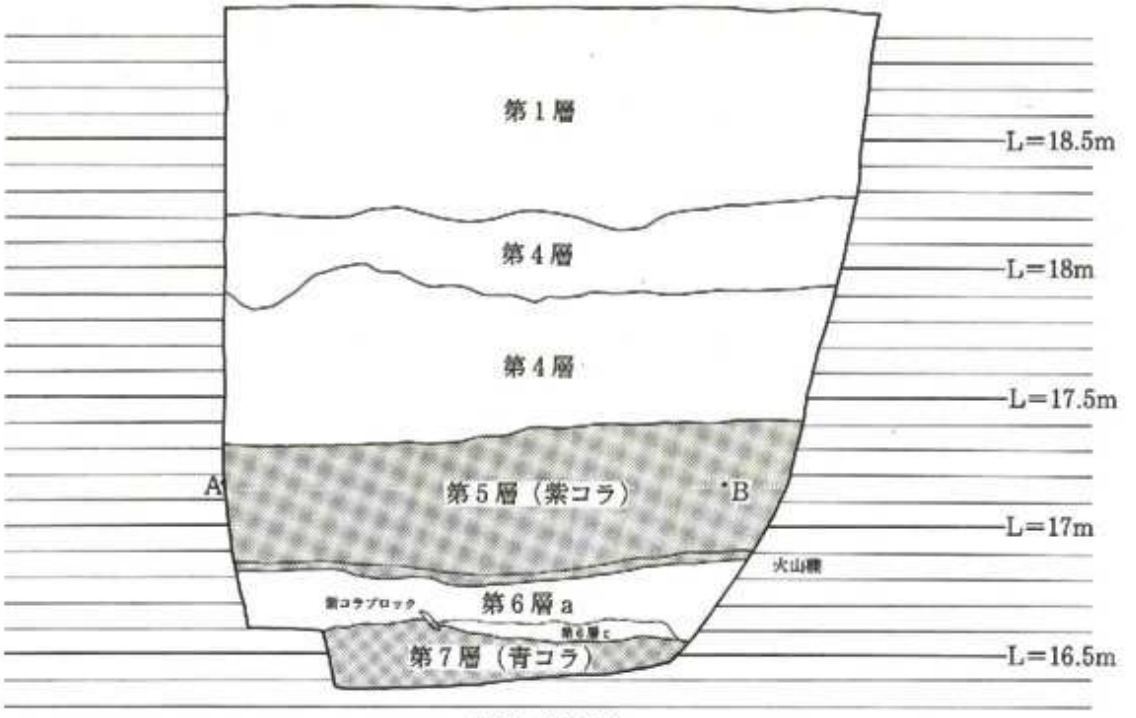
第1節　1トレンチの層位

第1層，第4層，第5層，第6層，第7層を確認した。

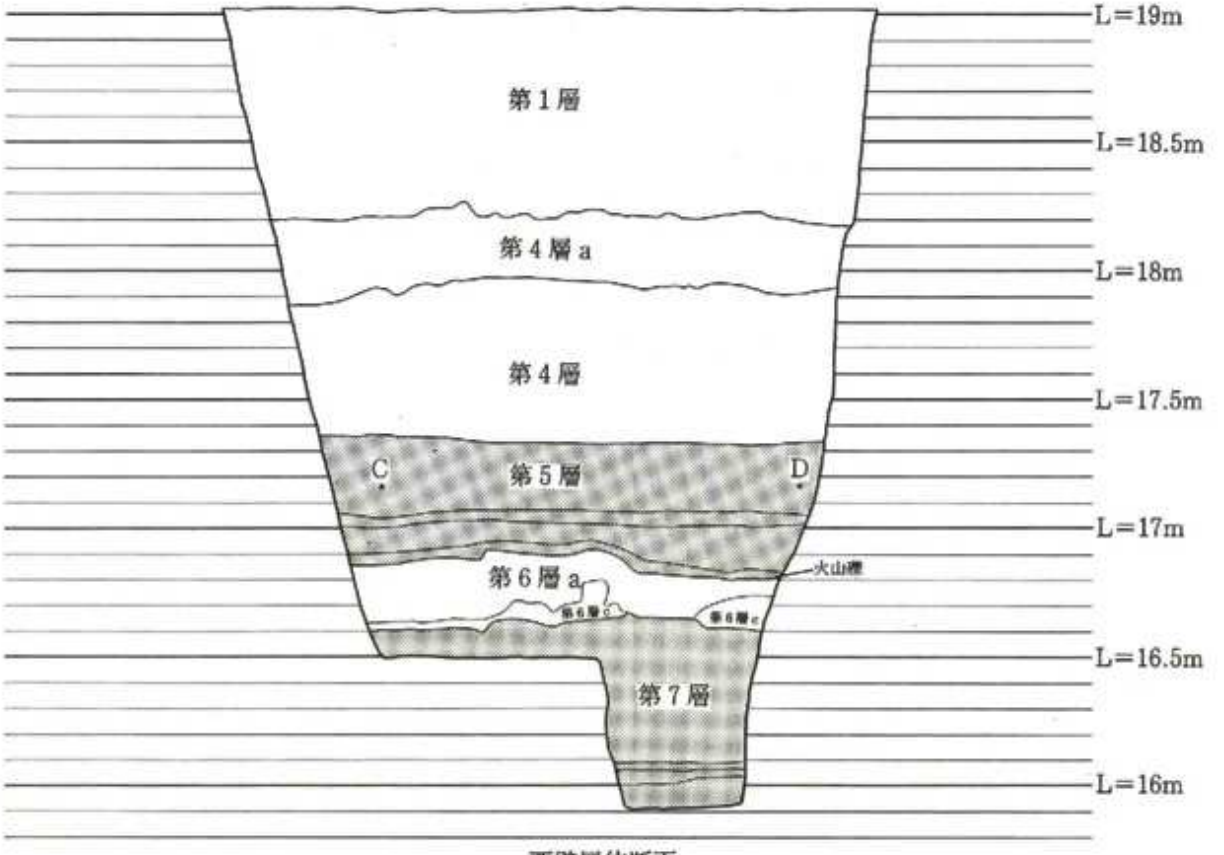
第1層は，現代耕作土で，80cm前後堆積している。第4層は，中世の黒色土層で，20～30cmの層厚をなす。第4層は，砂層であり，約50cmの厚さで堆積している。第5層は，西暦874年の開聞岳噴火に伴う火山灰（紫コラ）である。最下層の火山礫層，細粒と粗粒の火山灰がフォールユニットを形成する互層，山裾から流出し堆積したと思われる2次堆積層の3層に細分できる。最下層の火山礫は，5cm前後の堆積で，第6層上面を被覆している。1トレンチ西壁においては，わずかに畝状の盛り上がりが見られるが，遺構か否か判然としない。また，第6層の下部は，黄オリーブ色の砂質土層でルーズな堆積をなす。第7層は，7世紀最終四半期頃の開聞岳噴出物である火山灰（青コラ）の2次堆積層である。軽石片が若干含まれる他，砂と混在した形で堆積している。西壁層位断面では，細粒の火山灰と粗粒のものとが互層になって堆積している。いずれの地層からも遺物の出土は見られなかった。



第61図　トレンチ完掘状況図(S=1／50)

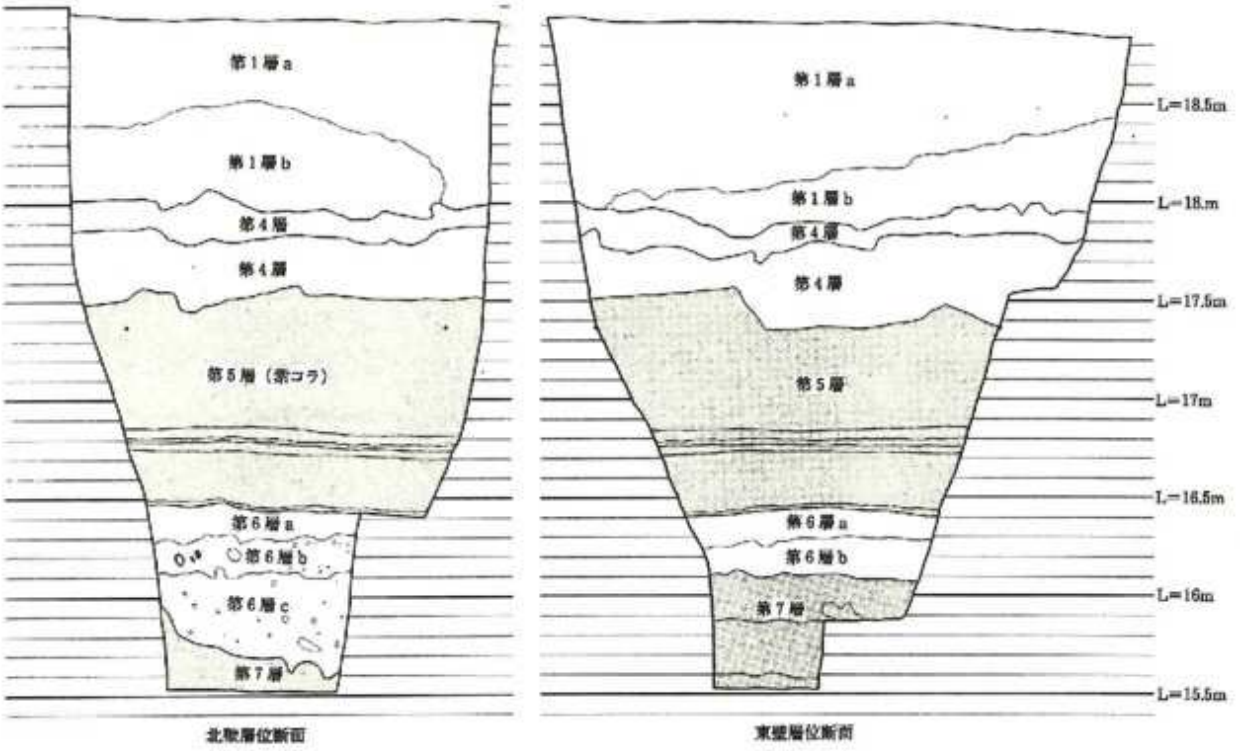


南壁層位断面



西壁層位断面

第62図　1トレンチ層位断面図(S=1／30)



第63図　2トレンチ層位断面図(S=1／40)

第2節　2トレンチの層位

1トレンチから10m北の地点に2トレンチを設定し，調査を行った。

地表下約3．5mまで掘り下げ，第1層，第4層，第5層，第6層，第7層を確認した。第1層は現代耕作土で，その色調から2層に細分できる。第4層は，10～15cm前後の堆積で1トレンチに比べ薄い。第5層は，紫コラであるが，70cm前後の2次堆積層の下層に，30cm前後の1次堆積層が見られる。最下層には，火山礫が3～5cmの厚さで堆積している。東壁断面の第6層上面は，ゆるやかに盛り上がり，畝が流れた形を思わせるが遺構か否か判然としない。第6層の下部は，軽石片を含んだ砂質土層であり，その色調からb．cの2層に細分できた。第7層は，青コラの2次堆積層である。1トレンチと同様に，砂や軽石片と混在した形で堆積している。いずれの地層からも遺物の出土は見られなかった。

1，2トレンチの確認調査から，工事における掘削は，青コラ2次堆積層まで及び，第6層が削平されることが確認された。この第6層については，畠が営まれていた可能性も考えられたため，工事予定地を面的に探査し，畠の有無を確認した上で，工事の施工にうつることとなった。

第V章 本　調　査

確認調査の結果を受け，平成6年8月1日～同月31日末まで本調査を実施した。調査は掘削が及ぶ第6層上面（西暦874年3月25日の地表面）について実施した。なお，6層以下の土層については掘削が及ばないこと，本工事地点がテニスコートとして利用されることから，先行トレンチにて層位の状況を確認した後，慎重工事を行うこととなった。調査は，確認調査と同様の組織，体制にて実施した。

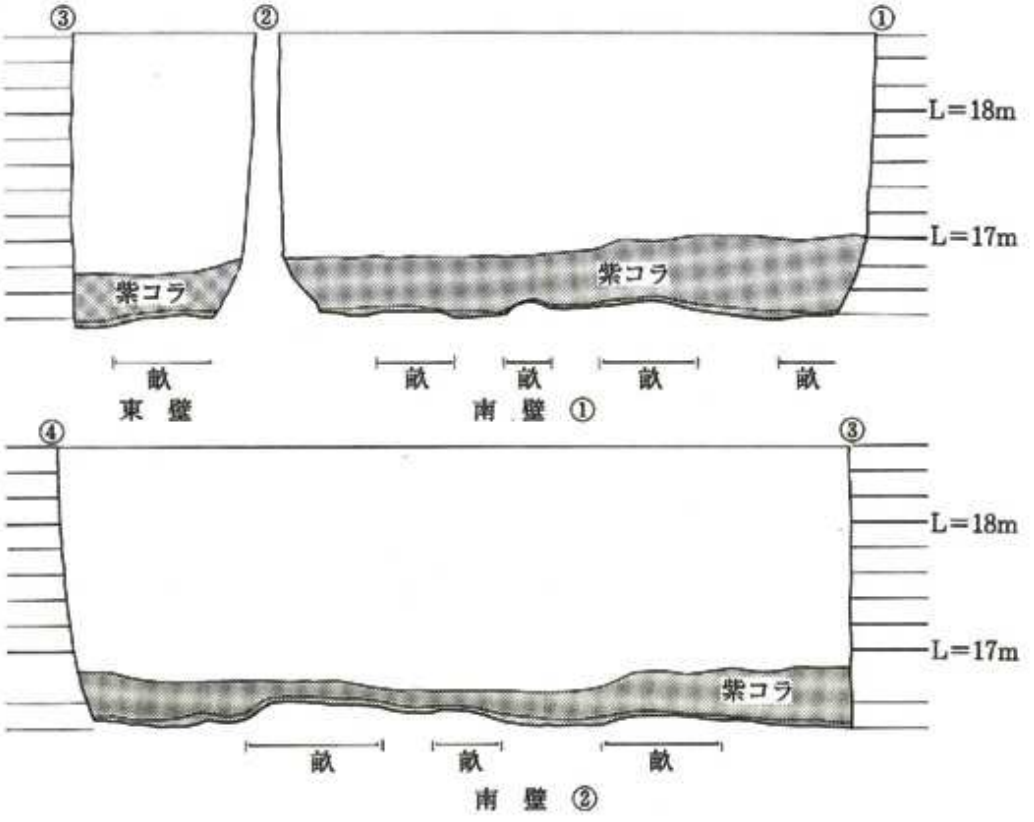
第1節 遺　構

本調査は，地下げが及ぶ約400㎡の部分について行ったが，調査区縁辺の紫コラ直下から畠跡が検出された。調査区中央にも旧地形の微妙な起伏が見られ，畝が流れた形状を思わせる部分もあるが判定はできない。

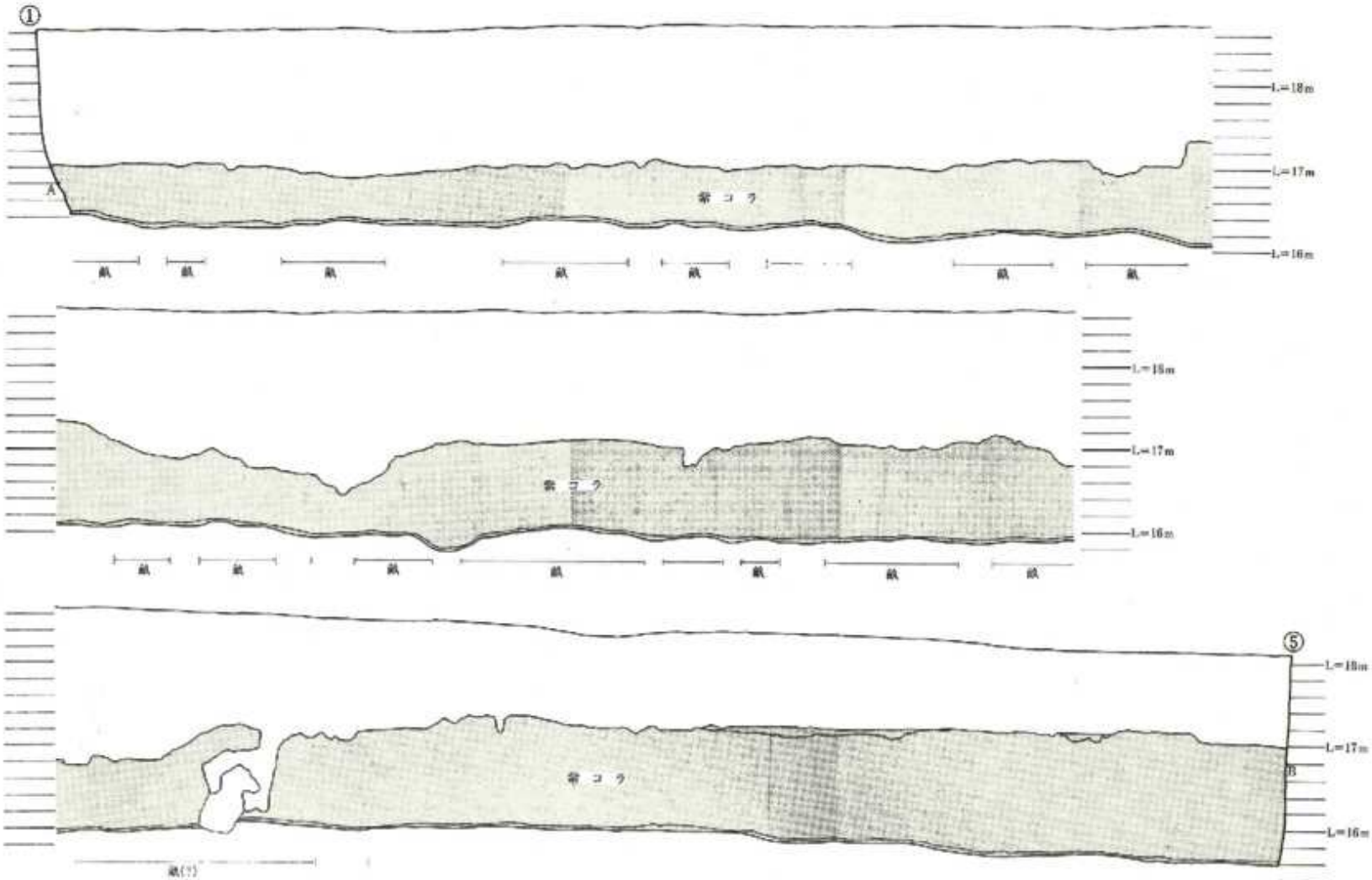
縁辺部の畝については，層位断面においてその起伏を把えることができた。以下，第65図を参照しながら詳述したい。

調査区南側断面において7条の畝を確認した。畝幅は20～50㎝前後とばらつきがあり，その起伏も緩やかである。畝頭と畝間の境も見分けにくいことから，畝立てをしてすぐの状態ではなく，盛った土が流れてしまったような印象を受ける。

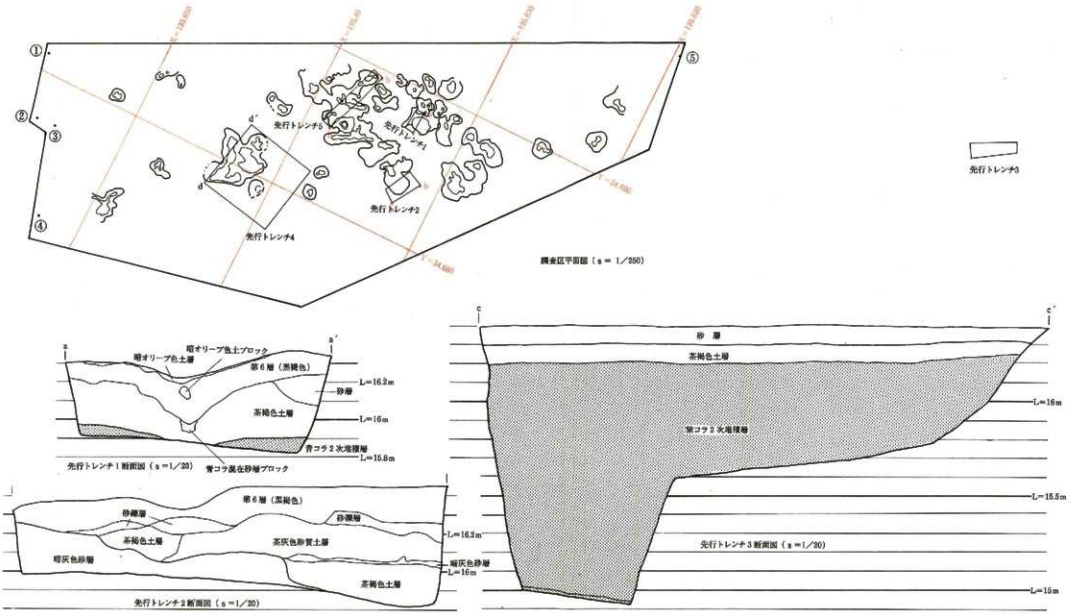
西側断面においても15条の畝を確認することができた。南側断面と同様に，畝幅や畝立ての間隔が不揃いで，その形状も平面形では極めて把えにくい状況であった。畝は調査区縁辺から東側に若干その端部をのぞかせており，いずれも調査区外に広がるものと予想される。



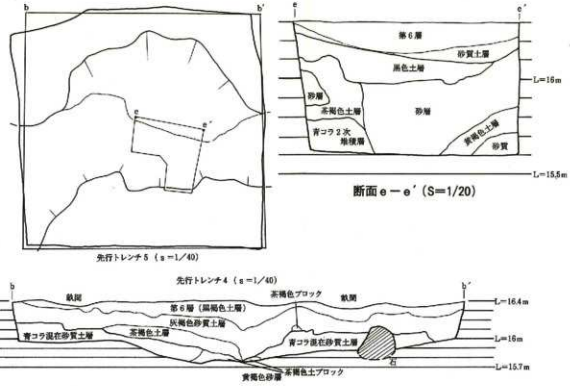
第64図　本調査区（東壁）及び（南壁）層位断面図（S＝1／60）



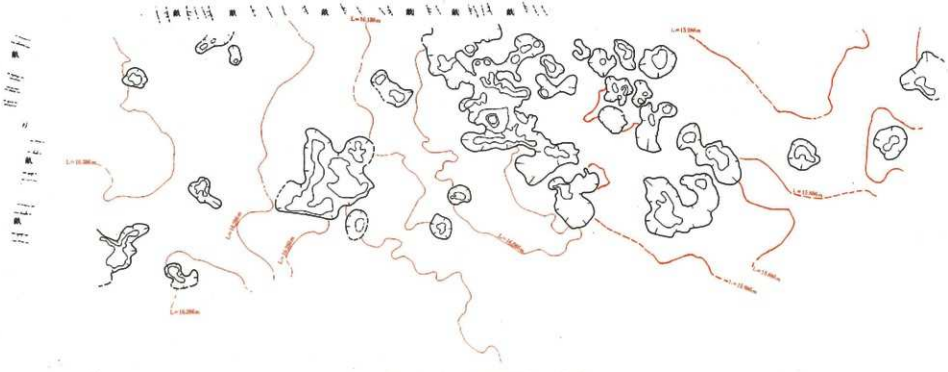
第65図　本調査区西壁層位断面図(S＝1／80)



第66図　本調査区平面図及び先行トレンチ断面図



第67図　先行トレンチ平面図及び断面図



第68図　本調査区平面図(S=1／160)

第2節　先行トレンチについて

調査区内に4ヵ所の先行トレンチを設け，層位の状況を確認した。先行トレンチは，調査区ほぼ中央の旧地形の凹地に4ヵ所，調査区外ではあったが，旧地形の傾斜を確認するため調査区北側より約20m離れた地点に1ヵ所設定した。

先行トレンチ1，2，4の断面から，第6層の下層には，茶褐色～灰褐色の砂質土層が堆積しており，さらにその下層には，青コラの2次堆積層が堆積している。人為的な掘り込みの形跡などが認められないことから，自然流路の痕跡と考えられる。また，先行トレンチ3の断面から，旧地形が，北側に向かい傾斜していることが確認された。

第Ⅵ章　考察　～まとめにかえて～

本調査の結果，西暦874年3月25日の開聞岳噴火で埋没した旧地表面から，畠跡が検出された。調査区縁辺部での検出であったため，その全容は不明であるが，西側断面において確認した畝から少なくとも，南北方向に約25mの広がりをもつものと思われる。

橋牟礼川遺跡，小田遺跡等からも，同時期の畠が多数検出されている。今回，南迫田遺跡において畠が検出されたことから，約2km程南にある橋牟礼川遺跡を含め，標高10～20m前後の山裾部分では，広い範囲において畠作が展開されていた可能性を示唆するものと思われ，874年段階における指宿地方の班田制の実態を把握する上でも注目すべき資料の1つと評価されよう。

SUMMARY

Minamisakoda archaeological site is located in Ibusuki-City at the sourthern most tip of Kyshu Island. It is 1.5km away from Hashimuregawa archaeological site.

The topographical features of the Minamisakoda site were formed by volcanic layers from Mt. Kaimondake and Ikeda-cardera, as well as avalanche layers from the outer rim of the Ikeda-crater.

We excavated a 400m² area and found some fields from the Heian age under the volcanic ash. Simiarly aged fields were found in the Hashimuregawa-site too.

We suppose that the fields had expanded at the base of a mountain in Ibusuki-City.

Oreiginal: Tetsuya Watanabe
Translation: Tetsuya Watanabe
Proofreading: Trevor Fencott

写真図版13

南迫田遺跡確認調査
1トレンチ西壁

南迫田遺跡確認調査2トレンチ西壁

南迫田遺跡本調査風景

南迫田遺跡第6層上面畠跡検出状況
（南から）

紫コラ

南迫田遺跡第6層上面畠跡検出状況
（北から）

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書

第1集	岩本遺跡	(1978)縄・弥・古
第2集	小牧第Ⅱ調査区　出水迫遺跡他	(1979)旧・縄・弥・古
第3集	橋牟礼川遺跡	(1980)縄・弥・古・平安・中世・近世
第4集	鳥山地区	(1980)旧・縄・弥・古・平安
第5集	宮ノ前遺跡	(1981)古・平安
第6集	横瀬遺跡	(1982)縄・弥・古・平安
第7集	尾長谷迫遺跡	(1986)弥・古・中世
第8集	中島ノ下遺跡	(1990)縄・弥・古・平安・中世・近世
第9集	橋牟礼川遺跡Ⅱ	(1991)古・平安
第10集	橋牟礼川遺跡Ⅲ	(1992)古・平安
第11集	橋牟礼川遺跡Ⅳ	(1992)古・平安
第12集	橋牟礼川遺跡Ⅴ	(1993)古・平安
第13集	南摺ケ浜遺跡Ⅰ	(1993)縄・古(土壙墓)
第14集	南摺ケ浜遺跡Ⅱ	(1993)縄
第15集	南迫田遺跡	(1994)弥・古・平安・中世
第16集	橋牟礼川遺跡Ⅵ(概報)	(1994)縄・弥・古・平安
第17集	橋牟礼川遺跡Ⅶ	(1994)弥・古・中世
第18集	二反田川河川敷堤防跡	(1995)近世
第19集	鳥山遺跡Ⅱ	(1995)旧・縄
第20集	橋牟礼川遺跡Ⅷ	(1995)
第21集	橋牟礼川遺跡Ⅸ	(1995)予定

橋牟礼川遺跡Ⅷ

平成７年３月

発　行　鹿児島県指宿市教育委員会
指宿市十町２４２４
☎ 0993－２２－２１１１

印刷所　中央印刷株式会社
鹿児島市春日町12番16号
☎ 0992－４７－３３００